

岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第486集

かい た ろう
台太郎遺跡第54次発掘調査報告書

盛岡南新都市計画整備事業関連遺跡発掘調査

2006

岩手県盛岡市

(財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター

岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第486集
 台太郎遺跡第54次発掘調査報告書 正誤表

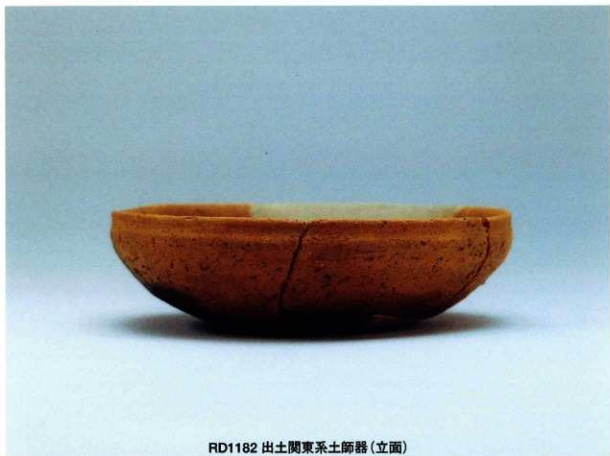
頁	行	誤	正
14	2	(第8図、写真図版11)	(写真図版10)
15	1	(第10・11図、写真図版12)	(写真図版11・12)
29	17	(第23図、写真図版15・16)	(写真図版18)
34	1	(第27・28図、写真図版21・22)	(写真図版20・21)
38	5	(第33図、写真図版26・27)	(写真図版24・25)

表2

64	図12	すべて図11
	図15	図14
65	図15	すべて図14
	図16	すべて図15
66	図16	すべて図15
	図15	すべて図14
67	図15	すべて図14
	図16	図15
68	図20	すべて図19
	写真55 45	写真55 62
69	図20	すべて図19
	図21	すべて図20
70	図20	すべて図19
	図20	すべて図19
71	図21	すべて図20
	図25	すべて図24
	図28	すべて図26
72	図	図29
	図34	図32
73	図34	すべて図32
	図58	図32
	図36	すべて図34
	図39	図35
74	図39	すべて図35
	図42	すべて図36
	図43	すべて図37
75	図43	すべて図37
	図43	すべて図37
76	図23	すべて図22
	図50	すべて図44
77	図52	図45
	図54	すべて図47
78	図54	すべて図47
	図54	すべて図47
79	図63	すべて図56
	図64	すべて図57
80	図64	すべて図57
	表3	削除

台太郎遺跡第54次発掘調査報告書

盛岡南新都市計画整備事業関連遺跡発掘調査



RD1182 出土関東系土師器(立面)



RD1182 出土関東系土師器(底部)

序

岩手県には、旧石器時代から全時代を通じて数多くの遺跡、埋蔵文化財があります。これら先人が残した文化遺産を保存し、後世に伝えていくことは、私たち県民に課せられた重大な責務であります。その一方で地域開発などの社会資本の充実も欠くことのできない題目であります。

このような埋蔵文化財の保護、保存と開発との調和も今日的な課題であり、当岩手県文化振興事業団は、埋蔵文化財センターの創立以来、岩手県教育委員会の指導と調整のもとに、開発事業によってやむを得ず消滅する遺跡の緊急発掘調査をおこない、記録保存する措置をとって参りました。

本書は、盛岡南新都市計画整備事業に関連して平成16年度におこなった台太郎遺跡第54次調査の成果をまとめたものであります。この調査により段丘上に立地する古墳～平安時代集落の様子がこれまで以上に明らかになり、当時の集落を考えるうえで貴重な資料を提供することが可能となりました。

この調査成果が、本書とともに広く活用され、考古学研究に寄与すると同時に埋蔵文化財に対する理解と関心をより深めることに役立つこと切に願う次第です。

最後になりましたが、これまでの発掘調査および報告書作成に際し、ご援助とご協力を賜りました盛岡市都市整備部盛岡南整備課、盛岡市教育委員会をはじめとする多くの関係諸機関、関係各位に心より感謝申し上げます。

平成18年3月

財団法人岩手県文化振興事業団
理事長 合田 武

例 言

- 1 本書は、岩手県盛岡市向中野字向中野 19 ほかにある台太郎遺跡において、平成 16 年度に実施した第 54 次発掘調査の成果を収録したものである。
- 2 調査は盛岡南新都市整備事業に伴い、岩手県教育委員会事務局生涯学習文化課の調整を経て、盛岡市の委託を受けた財団法人岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センターが実施した緊急発掘調査である。
- 3 台太郎遺跡は岩手県遺跡登録台帳番号 LE24 - 0214 に該当し、第 54 次調査の調査略号は ODT - 04 - 54 である。
- 4 発掘調査面積は 4,394m²、発掘調査期間は平成 16 年 4 月 12 日～8 月 6 日であった。また、発掘調査は、文化財調査員 福島正和・小松則也が担当した。
- 5 整理作業は平成 16 年 11 月 1 日～平成 17 年 1 月 31 日の期間、福島正和が担当した。
- 6 本書の執筆および編集は福島がおこなった。
- 7 発掘調査に際する航空写真撮影は、東邦航空株式会社に業務委託した。
- 8 発掘調査で作成した遺構実測図のすべては、原因のデジタル処理から編集作業まで（株）セビアスに、鉄製品の保存処理は（株）JFE テクノリサーチに業務委託した。
- 9 発掘調査においては、盛岡市都市整備部盛岡南整備課、盛岡市教育委員会、独立行政法人都市再生機構岩手総合開発事務所、株式会社三陸七建、近隣住民の方々のご理解とご協力をいただいた。
- 10 調査および報告書作成にあたり以下の方々のご教示をいただいた。記して感謝申し上げる。
（敬称略・順不同） 熊谷公明、辻 秀人（東北学院大学） 樋口知志（岩手大学） 北野博司（東北芸術工科大学） 八木光則、室野秀文、三浦陽一、神原雄一郎（盛岡市教育委員会） 高木 晃（岩手県立博物館） 井上雅孝（滝沢村教育委員会） 高橋千晶（奥州市教育委員会） 佐藤良和（奥州市埋蔵文化財調査センター） 村田晃一（宮城県教育庁） 高橋誠明、大谷基、小林亜矢（宮城県古川市教育委員会） 佐藤敏幸、澤口美幸（宮城県東松島市教育委員会） 宇部則保、大野 亨（青森県八戸市教育委員会） 利部 修（秋田県埋蔵文化財センター） 菅原祥夫（財団法人福島県文化振興財団） 津野 仁（栃木県教育委員会） 小橋健児（財団法人市原市文化財センター）
- 12 本書では、国土地理院発行「盛岡・日誌 1:50,000」地形図を使用した。
- 13 検出遺構の土層注記における七色および出土土器の色調は農林水産省農林水産技術会議事務局・財団法人日本色彩研究所 色票監修『新版 標準土色帖』2002 年度版に準拠した。
- 14 調査で出土した遺物および実測図、写真等の各種記録類の一切は岩手県立埋蔵文化財センターに保管している。広く活用されることを希望する。
- 15 本書発行以前に現地説明会で調査成果を公表したが、公表内容と本書記載事実との不一致、相違に関しては整理作業期間を経ている本書をもって正とする。

目 次

巻頭カラー図版

序

例言

I 調査に至る経緯と経過

II 遺跡の立地と環境

1 地理的環境	1
2 歴理的環境	3
3 過去の調査成果	6

III 調査の方法

1 発掘調査の方法	7
2 整理作業の方法	7
3 記載方法と凡例	7

IV 調査の成果

1 基本層序と遺構配置	10
2 竪穴住居跡	14
3 竪穴住居状遺構	42
4 土 坑	47
5 溝 跡	54
6 遺構外出土遺物	62

V 調査の総括

1 7・8世紀の遺構と遺物	81
2 9・10世紀の遺構と遺物	88
3 中世の遺構と遺物	89
4 ま と め	89

VI 考察 — 台太郎遺跡出土の古代土器における器種細分 —

1 は じ め に	91
2 志波城成立以前の土器	91
3 志波城成立以後の土器	95
4 器種の変化と画期	99
5 まとめにかえて	100

報告書抄録

図版目次

第1図	遺跡位置	2	第33図	RA609 竪穴住居	39
第2図	地形分類図	4	第34図	RA609 竪穴住居出土遺物	40
第3図	周辺の遺跡	5	第35図	RA610 竪穴住居出土遺物	41
第4図	調査区割	9	第36図	RA611 竪穴住居出土遺物	42
第5図	全体遺構配置(Ⅰ区)	11	第37図	RA612 竪穴住居出土遺物	42
第6図	全体遺構配置(Ⅱ区)	12	第38図	RE065 竪穴住居状遺構	43
第7図	全体遺構配置(Ⅲ区)	13	第39図	RE066 竪穴住居状遺構	44
第8図	RA244 竪穴住居	14	第40図	RE067 竪穴住居状遺構	45
第9図	RA244 竪穴住居出土遺物	15	第41図	RE068 竪穴住居状遺構	46
第10図	RA604 竪穴住居	16	第42図	竪穴住居出土鉄製品	46
第11図	RA604 竪穴住居出土遺物	17	第43図	RD1182 ~ 1184 土坑	48
第12図	RA615 竪穴住居	19	第44図	RD1182 土坑出土遺物	49
第13図	RA615 竪穴住居カマド	20	第45図	RD1186 土坑出土遺物	50
第14図	RA615 竪穴住居出土遺物①	21	第46図	RD1181・1189 土坑	50
第15図	RA615 竪穴住居出土遺物②	22	第47図	RD1187 土坑出土遺物	51
第16図	RA615 竪穴住居出土遺物③	22	第48図	RD1190・1191	52
第17図	RA616 竪穴住居	24	第49図	RD1192・1193	53
第18図	RA616 竪穴住居カマド	25	第50図	RG507 ~ 509, RD1181 溝	55
第19図	RA616 竪穴住居出土遺物①	26	第51図	RG201・224・492 溝	56
第20図	RA616 竪穴住居出土遺物②	27	第52図	RG267・200 溝	58
第21図	RA614 竪穴住居	28	第53図	RG515 溝	59
第22図	RA614 竪穴住居出土遺物	29	第54図	RG512 ~ 514	60
第23図	RA605 竪穴住居	30	第55図	RG318・517	61
第24図	RA605 竪穴住居出土遺物	30	第56図	溝出土遺物	62
第25図	RA606 竪穴住居	32	第57図	遺構外出土遺物	62
第26図	RA606 竪穴住居出土遺物	33	第58図	台太郎遺跡全体図	82
第27図	RA607 竪穴住居	34	第59図	台太郎遺跡全体図	83
第28図	RA607 竪穴住居カマド	35	第60図	台太郎遺跡全体図	84
第29図	RA607 竪穴住居出土遺物	35	第61図	RE038 出土土師器・柴遺跡出土土師器	85
第30図	RA608 竪穴住居	36	第62図	台太郎遺跡第35次出土土器①	86
第31図	RA608 竪穴住居カマド	37	第63図	台太郎遺跡第35次出土土器②	87
第32図	RA608 竪穴住居出土遺物	38			

表目次

表1	検出遺構一覧	63	表3	掲載遺物一覧(その他)	80
表2	掲載遺物一覧(土器)	64			

写真图版目次

写真图版 1	航空写真①	103	写真图版 34	RE068 竖穴住居状遺構	136
写真图版 2	航空写真②	104	写真图版 35	RD1181 ~ 1183 土坑	137
写真图版 3	I A 区	105	写真图版 36	RD1184、1186、1187 土坑	138
写真图版 4	I B 区	106	写真图版 37	RD1188 ~ 1193 土坑	139
写真图版 5	I C 区	107	写真图版 38	RG507、508 溝	140
写真图版 6	I D・F 区	108	写真图版 39	RG509、201、224 溝	141
写真图版 7	II A 区	109	写真图版 40	RG510 溝	142
写真图版 8	I C 区②、II B 区	110	写真图版 41	RG345、511 溝	143
写真图版 9	III 区	111	写真图版 42	RG267、200、512 溝	144
写真图版 10	RA244 竖穴住居	112	写真图版 43	RG513、514、515 溝	145
写真图版 11	RA604 竖穴住居①	113	写真图版 44	RG328、516、517 溝	146
写真图版 12	RA604 竖穴住居②	114	写真图版 45	RG264、作業風景	147
写真图版 13	RA615 竖穴住居①	115	写真图版 46	RA604 遺物	148
写真图版 14	RA615 竖穴住居②	116	写真图版 47	RA615 遺物①	149
写真图版 15	RA616 竖穴住居①	117	写真图版 48	RA615 遺物②	150
写真图版 16	RA616 竖穴住居②	118	写真图版 49	RA615 遺物③	151
写真图版 17	RA614 竖穴住居	119	写真图版 50	RA615 遺物④	152
写真图版 18	RA605、RA606 ①	120	写真图版 51	RA615 遺物⑤	153
写真图版 19	RA606 竖穴住居②	121	写真图版 52	RA616 遺物①	154
写真图版 20	RA607 竖穴住居①	122	写真图版 53	RA616 遺物②	155
写真图版 21	RA607 竖穴住居②	123	写真图版 54	RA616 遺物③	156
写真图版 22	RA608 竖穴住居①	124	写真图版 55	RA616 遺物④	157
写真图版 23	RA608 竖穴住居②	125	写真图版 56	RA616 遺物⑤	158
写真图版 24	RA609 竖穴住居①	126	写真图版 57	RA605、606 遺物	159
写真图版 25	RA609 竖穴住居②	127	写真图版 58	RA607 ~ 609 遺物	160
写真图版 26	RA610 竖穴住居①	128	写真图版 59	RA610、611 遺物	161
写真图版 27	RA610 竖穴住居②	129	写真图版 60	RA612 遺物	162
写真图版 28	RA612 竖穴住居	130	写真图版 61	RA614、RD1182 遺物	163
写真图版 29	RA611 竖穴住居①	131	写真图版 62	RD1186、1187 遺物①	164
写真图版 30	RA611 竖穴住居②	132	写真图版 63	RD1187 遺物②	165
写真图版 31	RE065 竖穴住居状遺構	133	写真图版 64	RD1187 遺物③、溝遺物①	166
写真图版 32	RE066 竖穴住居状遺構	134	写真图版 65	溝遺物②、遺構外出土遺物	167
写真图版 33	RE067 竖穴住居状遺構	135			

I 調査に至る経緯と経過

盛岡南新都市開発計画は、現在の既成市街地の他に市域の南部地域を新市街地として開発し、両者が有機的に結びついた軸状都心を形成するために策定された都市区画整理事業である。平成3年度から平成17年度までの15年間で事業予定として、対象面積313haに及ぶ土地区画整理事業が進められている。

この間、事業対象地域に係わる埋蔵文化財の取り扱いについても協議が重ねられた。その結果、盛岡市教育委員会が試掘調査をおこない調査必要範囲を確定し、本調査は、財団法人岩手県文化振興事業団の受託事業として実施することとなった。

台太郎遺跡は過去多数の調査がおこなわれている。この区画整理事業に伴う台太郎遺跡の調査は、第9次～第53次調査が該当する。調査は盛岡市教育委員会と(財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センターにより実施されており、特に平成9年度実施された第15次調査では、古代の遺構が濃密に分布する区域が明らかになった。また、平成10年度受託事業として財団法人岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センターが第18次調査をおこなった。その後、平成11年度の第23次、平成12年度の第26次、平成13年度の第35次、平成14年度の第44次、平成16年度の第51次調査が大規模な調査としておこなわれた。これらの調査はいずれも調査報告書がすでに刊行されている。

今回の発掘調査は、第53次・第54次が平成15年度受託事業として契約された。そのうち第53次調査が独立行政法人都市再生機構委託分として都市計画道路予定地240㎡の範囲で、第54次調査が盛岡市都市整備部盛岡南整備課委託分として宅地予定地内4,845㎡の範囲でそれぞれ予定された。しかし、予定された面積より、これまでの調査区に隣接する地区で未調査となっていた部分が存在し、これを加えた調査範囲内で調査を終えた。これにより実質の調査面積は、第53次調査においては当初予定通り240㎡、第54次調査は予定面積より207㎡増の5,052㎡と変更された。

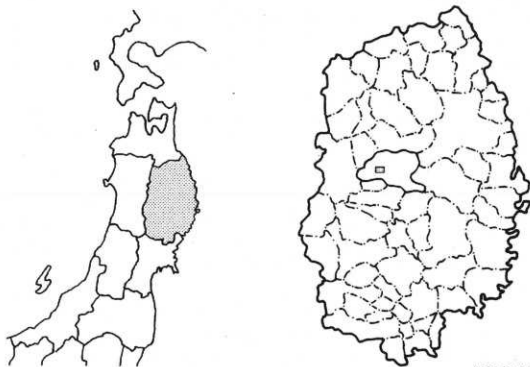
今回本書にて報告する第54次と合わせて調査した第53次調査は「岩手県埋蔵文化財発掘調査報告書(平成16年度)」に本報告とし調査成果のすべてを収録している。なお、第53次調査と連続する遺構も存在するが、それぞれ振り分けて報告する。

II 立地と環境

1 地理的環境

台太郎遺跡は、岩手県盛岡市向中野字向中野から同向中野字千刈田にかけて所在する。遺跡の東には北上川、北には雫石川がそれぞれ流れ、北西には岩手山を望むことができる。奥羽山脈東側に位置する岩手川は標高2,038mを測り、雫石川北岸で火山噴出物を堆積させている。

岩手県北部から県内を南へ貫流する北上川は、蛇行を繰り返しながら岩手県南端を抜け宮城県に至る。宮城県北部を抜けた北上川は、宮城県石巻湾より太平洋に注ぎ出る。この東北地方を代表する大川は西に連なる奥羽山脈、東に連なる北上山地の間を流れ、その流域に多くの沖積平野を形成している。この北上川の沖積作用によって形成された平野は、特に中・下流域において発達が顕著であり、その平野部面積は岩手県内に存在するその他の河川流域よりも広大である。中流域北部に位置する盛岡では、西から雫石川、東から中津川、梁川がそれぞれ北上川に合流する。



(平成16年1月31日現在)



第1図 遺跡位置

平石川は、秋田県境、岩手県西部に端を発し、東へ流れ北上川に合流する。この平石川は、盛岡盆地西半において広い沖積地を形成しており、特にこの南岸と北上川西岸にあたる一帯は沖積段丘面が層状に重なる。

台太郎遺跡は、この段丘面の自然堤防上に位置する。この段丘は砂礫層によって構成され、起伏を持ちながら一帯に広がっている。また、段丘面には平石川から北上川に向けて幾つかの氾濫源を持ちながら後背湿地を形成している。遺跡南限付近では、低地部分が検出されており、古くから湿地と隣接する立地であったと考えられる。

台太郎遺跡周辺は、平石川の氾濫原による低地部分と自然堤防状低位段丘面が複雑に入り組んだ地形を成している。現在でもこの地形は水田、宅地、道路などに反映している場所も随所にみられる。このような微地形は、遺跡の分布・立地と大きく関わるものと考えられ、両者の関連性については今後開発が進むこの地域の重要なテーマの一つであると考えられる。

2 歴史的環境

平石川北岸の台地上には、縄文時代の遺跡が多数確認されている。特に大館遺跡群は県内でも有数の縄文時代集落である。一方、平石川南岸に広がる平野部には古代の遺跡が顕著である。古墳時代の様子は遺跡がほとんどなく未解明であるが、この地域も奈良時代になると古代の人々の活動がみられ始める。

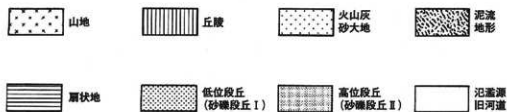
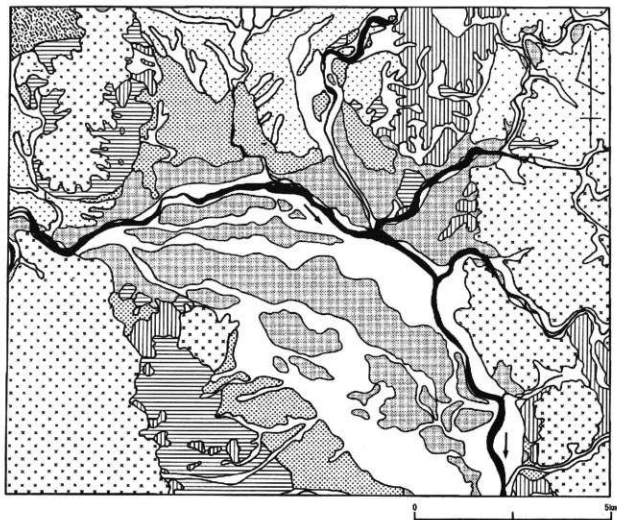
平石川より北約1kmに位置する太田蝦夷森古墳群は8世紀に営まれた古代の墳墓群である。これまでの調査で和同開珎や厭手刀などが出土している。また、太田蝦夷森古墳群の約1.5km西には志波城跡が存在する。この志波城跡は803年に成立したと考えられており、古代盛岡地域も中央政府の枠組みに組み込まれたとされている。この志波城は存続期間が短く、10年でその実質的な機能を徳丹城に移される。これまでの志波城跡の発掘調査では、築地基跡などの城構としての機能を持つ遺構が確認されている。また、城柵機能を想定できる搬入遺物や墨書土器も出土している。

志波城跡の周辺および南側の広い範囲では、古代の集落が多数高い密度で分布する。志波城の所在する太田地区では、志波城並行期の集落と考えられている松ノ木、館遺跡が調査されている。また、志波城以降では林崎遺跡などが確認されている。

太田地区の南に位置する本宮地区では本宮熊堂B遺跡、野古A遺跡など150棟以上の竪穴住居が調査されており、奈良～平安時代の拠点的な集落の全容が明らかになりつつある。また、その周辺では鬼柳A遺跡、小幡遺跡など志波城以降の平安時代集落も調査されている。

本宮地区の南に位置する向中野・飯岡地区では、台太郎遺跡を中心に多くの古代の集落が調査されている。台太郎遺跡の西側に隣接する飯岡沢田遺跡では、古代の竪穴住居のみならず、古代の墳墓群が調査されている。この南に隣接する飯岡才川遺跡でも墳墓群、平安時代の竪穴住居が調査されている。台太郎遺跡の南に位置する細谷地遺跡、向中野館遺跡の調査では、飯岡才川遺跡と同様に平安時代の竪穴住居が多く調査されている。以上のように現在進められている盛南開発区域は古代の集落遺跡が高密度で存在しており、本書で報告する台太郎遺跡と同様に発掘調査によって古代集落像の解明に寄与すると考えられる。

この地域では古代に続く中世は古代に比べると遺構、遺物ともに少ないのが現状である。台太郎遺跡や向中野館遺跡などで中世の遺構が調査されているが、全容はまだまだ不明である。台太郎遺跡では、これまで中世の大規模な堀や墓群が調査されている。また、向中野館遺跡は、中世の館跡と考えられており、館を区画する堀跡が検出されている。この向中野館遺跡は、周辺を統治したと考えられる飯



第2図 地形分類図



- | | | | |
|--------------------|---------------------|--------------------|-------------------|
| 1. 網田 (平安) | 36. 銀岡沢田 (古代) | 71. 中屋敷 (古代) | 106. 本館 (平安) |
| 2. 松ノ木 (古代～近世) | 37. 網岡才川 (古代) | 72. 西田 B (古代) | 107. 葺千代 (奈良) |
| 3. 箭 (太田郡) (古代～近世) | 38. 矢塚 (古代) | 73. 前田 (古代) | 108. 四幡 (縄文・古代) |
| 4. 上野無敵 (古代) | 39. 古太郎 (古代) | 74. 鹿岡林崎 II (古代) | 109. 新井田 I (古代) |
| 5. ハツコ (古代) | 40. 向中野崎 (古代・中世) | 75. 鹿岡林崎 I (平安) | 110. 新井田 II (古代) |
| 6. 八幡 (奈良・平安) | 41. 藤谷地 (古代) | 76. 上新田 (平安) | 111. 新田 (平安) |
| 7. 太田銀興古墳群 (奈良) | 42. 南仙北 (縄文・古代) | 77. 深淵 I (平安) | 112. 下羽場 (平安) |
| 8. 一本木 (平安) | 43. 向中野帯 (古代) | 78. 深淵 II (平安) | 113. 下湯沢 (古代) |
| 9. 天沼 (古代) | 44. 小和田館 (縄文・弥生・中世) | 79. 高屋敷 I (古代) | 114. 新井田 I (古代) |
| 10. 畑中 (古代) | 45. ニツ沢 (縄文・古代) | 80. 高屋敷 II (平安) | 115. 小田 I (古代) |
| 11. 五兵衛前田 (古代) | 46. 蟹沢下 (古代) | 81. 西 (平安) | 116. 小田 II (平安) |
| 12. 竹鼻 (古代) | 47. 蟹沢 (縄文・古代) | 82. 飯岡館堂 I (縄文・古代) | 117. 森子 (古代) |
| 13. 小沼 (平安) | 48. ヘビ堂 (縄文・古代) | 83. 飯岡館堂 II (平安) | 118. 網渡 II (古代) |
| 14. 志波城 (平安) | 49. オミ坂 (縄文・古代) | 84. 飯岡館堂 II (平安) | 119. 湯沢大館 (古代～中世) |
| 15. 竹花堂 (平安) | 50. 山中 (縄文・古代) | 85. 南谷地 (平安) | 120. 一本松 (平安) |
| 16. 田貝 (古代) | 51. 月見山 (縄文・古代) | 86. 法領権現塚 (近世) | 121. 大島 (古代) |
| 17. 新龜塚 (縄文・平安) | 52. 大ヶ森 (縄文) | 87. 下久根 I (縄文・古代) | 122. 鹿木 (古代) |
| 18. 石仏 (古代) | 53. 細越 (縄文) | 88. 石神 (古代) | 123. 永井前田 (古代) |
| 19. 上地場 A (縄文・古代) | 54. 飯岡山館 (中世) | 89. 下久根 II (縄文・古代) | 124. 神田 (古代) |
| 20. 林崎 (平安) | 55. 飯岡館 (中世) | 90. 松島 (古代) | 125. 神田屋 (近世) |
| 21. 太田田中 (平安) | 56. 飯岡本坂 I (古代) | 91. 田中 (平安) | 126. 下永井 (近世) |
| 22. 大宮北 (古代) | 57. 飯岡本坂 II (古代) | 92. 夕賀 (古代) | 127. 永井経塚 (近世) |
| 23. 大宮 (古代～近世) | 58. 堤 (縄文・古代) | 93. 横塚 (古代) | 128. 碓塚 (奈良) |
| 24. 小林 (古代) | 59. 高館古墳跡 (奈良～平安) | 94. 少野 (古代) | 129. 津志田イタク屋 (近世) |
| 25. 水門 (古代) | 60. 高館 (縄文) | 95. 悪本 (古代) | 130. 西渡渡 (古代) |
| 26. 小幡 (古代) | 61. 大柳 II (古代) | 96. 津志田 (古代) | 131. 百目本 (縄文・古代) |
| 27. 宮沢 (古代) | 62. 大柳 I (古代) | 97. 陣当 (古代) | 132. 坂の下 (縄文) |
| 28. 鬼柳 A (古代) | 63. 野野前 (縄文) | 98. 長沼 (古代) | 133. 下永林 (縄文) |
| 29. 鬼柳 B (古代) | 64. 辻屋敷 (古代) | 99. 津志田権屋 (古代) | 134. 中島 (古代) |
| 30. 鬼柳 C (古代) | 65. 藤島 II (平安?) | 100. 塙田 (古代) | 135. 二本柳幅 (古代) |
| 31. 野古 B (古代) | 66. 藤島 I (縄文・平安) | 101. 羽場いたこ塚 (近世) | 136. 大宮西 (古墳) |
| 32. 本宮熊堂 A (古代) | 67. 上地場 B (縄文・古代) | 102. 羽場館 (中世) | 137. 高橋 A (古代) |
| 33. 本宮熊堂 B (古代) | 68. 二又 (平安) | 103. 羽澤百目木 (縄文) | 138. 高橋 B (古代) |
| 34. 榎岡 (古代) | 69. 舊田 A (古代) | 104. 砂子塚 (古代) | 139. 萬福田 (古代) |
| 35. 野古 A (古代) | 70. 内村 (平安) | 105. アイノ野 (縄文) | 140. 荒塚 (古代) |

第3図 周辺の遺跡

岡氏あるいはその関連氏族の居館が現段階では想定されている。

3 過去の調査成果

前節で述べたとおり、台太郎遺跡では過去の調査成果より古代～中世に属する遺構が多く存在することが明らかになっている。本節では、これまでの遺跡範囲の約70～80%の調査を終えた台太郎遺跡の発掘調査成果を概略的に述べ、今回の調査成果の導入としたい。

もっとも多数確認されている古代の遺構は、竪穴住居が中心である。おもに、7世紀後半～10世紀初頭までの竪穴住居が約600棟検出されている。古代集落の居住域であると言えることができる。しかし、この存続期間内で600棟の竪穴住居が断絶することなく存在したのではなく、現段階では若干の空白期間が存在するようである。現段階では、竪穴住居がみられない時期は9世紀初頭であると考えられている。この断絶期9世紀初頭を境にした前後の竪穴住居の数は、7世紀後半～8世紀代約120棟、9世紀～10世紀初頭約480棟の内訳をみることができる。仮に前者をⅠ期、後者をⅡ期とした場合、両者の竪穴住居分布域はそれぞれの時代が重なる部分もあるが、大まかに区分可能である。便宜的に東西南北の4ブロックで区分すると、Ⅰ期とした7～8世紀代の約120棟は、おもに南東地区に集中する傾向がある。一方、Ⅱ期とした9世紀以降の竪穴住居約480棟は、密度の差はあるが、おもに南西・北東・北西地区で多くみられる傾向である。

古代における竪穴住居以外の遺構は溝や土坑などが挙げられるが、性格も含め詳細なことはわかっていない。しかし、古代の遺物が出土し、古代のものと考えられる溝は、そのほとんどが地形に沿って存在し、Ⅰ期の竪穴住居を切っている例が多く、Ⅱ期の竪穴住居群の間を縫うように存在していることから推察して、Ⅱ期に存在したのと考えられる。

次に中世では、詳細な時期は明らかでないが、建物が多く検出されている。また、建物に関連すると考えられている堀もみられ、周辺を支配したような階層の拠点であったと考えられる。堀の出土遺物からみて13～14世紀の所産と考えられている。台太郎遺跡での12～15世紀に該当する中世をⅢ期とする。また、中世の墓群が遺跡南西地区で多数確認されている。遺物の出土が少ないためすべての墓の時期を特定することは不可能であるが、北宋銭や中国産青磁片が出土している墓も存在するため、これらについてもⅢ期の墓群であったと推測できる。

引用・参考文献

- 高橋義介¹⁾ 1999『台太郎遺跡第15次発掘調査報告書』岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第309集(財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター
- 高橋義介・金子佐知子²⁾ 2001『台太郎遺跡第18次発掘調査報告書』岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第369集(財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター
- 杉沢昭太郎³⁾ 2003『台太郎遺跡第23次発掘調査報告書』岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第415集(財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター
- 杉沢昭太郎⁴⁾ 2003『台太郎遺跡第26次発掘調査報告書』岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第416集(財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター
- 西澤正明⁵⁾ 2003『台太郎遺跡第35次発掘調査報告書』岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第417集(財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター
- 阿部眞澄⁶⁾ 2003『台太郎遺跡第35次発掘調査報告書』岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第422集(財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター

Ⅲ 調査の方法

1 発掘調査の方法

調査開始時、試掘トレンチを掘削し、その土層断面によって調査区全域での遺構検出面を確認した。その後表土をバックホーにより除去し、それ以降の掘削作業は人力でおこなった。調査中は適宜、写真撮影および実測をおこない記録の保存に努めた。

調査区割とグリッドの設定および遺構名称は、盛岡市教育委員会の方針に従っている。正方形グリッド最小単位を $2 \times 2\text{m}$ とした。グリッド(区画点)の設定および実測に用いた基準点は表のとおりである。

遺構出土遺物は遺構・位置・層位の各単位で取り上げ、遺構外出土遺物はグリッド(区画点)・層位単位で取り上げた。

調査区は、大きく3地区に分かれるためそれぞれの大地区をⅠ・Ⅱ・Ⅲ区とした。その大地区をさらに細分しⅠ区をA～Dに、Ⅱ区をA・Bと区切った。いずれも便宜的な名称であるが、本文の記載もこれに従う。

遺構名は遺跡内統一の連番であるため、調査時に付与したものが欠番になることもあったが、統一連番にするべく新しい遺構名・番号を与え報告した。また、過年度調査されている遺構の続きは、過年度調査の遺構名および遺構番号をそのまま踏襲した。遺構名略号は、竪穴住居(RA)・竪穴住居状遺構(RE)・土坑(RD)・性格不明遺構、その他(RZ)である。本文中の記載については略号のみの表現で統一した。

2 整理作業の方法

発掘調査中に作成した遺構実測図は必要に応じて合成および修正をおこない、デジタル処理をおこなった。遺構名は、発掘調査時のものと整理作業・報告書用のものとで新旧の対応表を作成した。発掘調査中に撮影した遺構写真は、35mmモノクロ・35mmカラーリバーサル・ 6×7 版モノクロを使用し、それぞれファイルに整理し台帳を作成した。本書では、そのうち必要な遺構写真について紙焼き、トリミングをおこない写真図版に掲載した。

出土した遺物は、水洗後注記・接合し、必要な遺物に関しては石膏による復元をおこなった。それから作業過程、本書に掲載するものを選出し実測および写真撮影を実施した。実測した遺物は捺書をおこない押図版として掲載し、撮影した遺物写真についてもすべてを写真図版に掲載した。掲載した遺物は、原則的に実測に堪え得るもの、体部みの破片は器職の傾きが判明する遺物のみを選出した。遺物写真は、立面での撮影を原則としたが、立面での撮影が不可能な破片については平面的な俯瞰撮影をおこなった。

3 記載方法と凡例

記載の順序は時代順を基本とし、同時代の遺構については遺構番号の順による。本書で使用する方位は、座標による方位である。よって平面図中に付されている北方位印はすべて座標による北である。検出した遺構の欠損部分は、波線による推定線を加えて表現した。また、調査において任意で設定したトレンチ掘方、調査区境および現代の擾乱は一点鎖線とし、トレンチおよび擾乱の平面はケバを交

えて遺構のそれと区別した。

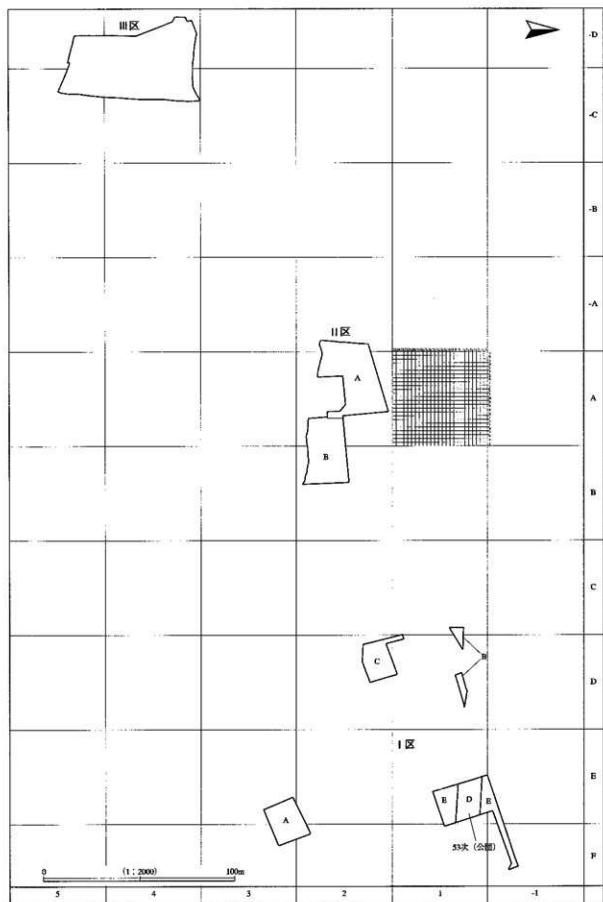
個々の遺構平面図は、基本的に遺構主軸を重視して配置したが、主軸の定まらない不定形、円形の平面形帯を呈する遺構については、北が上になるように掲載した。竪穴住居の平面図はカマドのある側を上向きに配置し主軸に合わせレイアウトした。

出土した土器は、本書では以下の通りに分類し報告することとした。

従来のかみやき土器とされている坏類は土師器（非黒色処理、ミガキなし）とした。この分類は客観性を持たせることが目的であるが、非黒色処理でミガキの施されない坏と焼成不良の須恵器坏とは極めて不分明であると言わざるを得ない。両者の決定的な差異は焼成に他ならない。よって、一部で還元が進んでいるものや須恵器の形態・製作技法がみられるものは本来須恵器を指向したと考えられ、器表面に黒斑が顕著にみられるものは本来土師器を指向していたと考えられるため、部分的に還元不足が認められる土器や黒斑を有する土器は遺物観察表中の備考欄に表記した。

掲載した土器実測図は、奈良平城京跡、京都平安京跡の調査報告書に準じて1/4の縮尺で統一した。先述した分類により須恵器の断面は黒塗り、土師器の断面は白抜き、黒色処理されている土師器は外半分にアミをかけ表現した。調整の痕跡は、一部例外を除き内外面ともに中央半分のみ表現にとどめた。口縁部に施されるヨコナデは、図の煩雑さを避けるため表現していない。また、土器実測図における稜線は弱い屈曲や口縁端部、底端部の稜を一点抜き直線、強い屈曲や明瞭な調整の変化点は実線、ロクロ等の回転力を利用した回転ナデは、その凹凸の凸部に二点抜き直線で表現した。また、調整の表現は細谷地遺跡第8次調査報告書に準拠した。

竪穴住居出土遺物は、原則的に住居毎のまとまりで図・写真を掲載した。各遺物における図の番号と写真の番号は一致しないが、いずれもIV章末の掲載遺物一覧に表記している。



第4図 調査区割

IV 調査の成果

1 基本層序と遺構配置

今回調査した範囲の基本層序は過去の調査と大きく変わるものではない。Ⅰ区については50次調査、Ⅱ区については第23次および第26次調査、Ⅲ区については第26次調査を参考とする。

まず、最上層であるⅠ層は近現代以降の攪乱層、盛土層、耕作土層、表土である。層厚は調査区によって異なるが、概ね10～50cm程度である。雑物を多く含み、土質は地点によって異なる。

Ⅰ層直下のⅡ層は、黒色のシルトである。調査区全体を通して、削平等によりほとんど残存していない。Ⅱ区では一部で残存している。残存している地点では、この上面で古代から中世の遺構が検出できる。この面での遺構検出は、遺構埋土とこの層との色調差が少ないため、遺構検出は容易ではない。遺物・火山灰・ブロック土などが遺構埋土を認識する手掛かりとなることが多い。これより上層に包含層等が本来堆積しているはずであるが、今回の調査では残存していなかった。層厚は、残存している地点で20cm程度である。

Ⅱ層から漸的に変化しているのが、Ⅲ層である。いわゆる漸位層と呼ばれ、Ⅱ層とは色調が異なるのみで、土質等は同じである。層厚は数cm～10cm程度であり、遺物は含まれない。

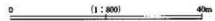
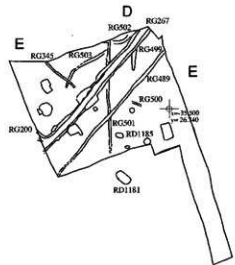
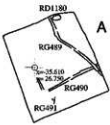
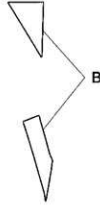
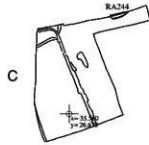
Ⅲ層の直下のⅣ層は黄色のシルトである。Ⅲ区ではほとんど尖われているが、それ以外では削平が及んでおらず概ね良好に残存している。前述したⅡ、Ⅲ層が残存していなければ、このⅣ層上面で残存している地点では、上面で古代から中世の遺構が検出できる。この面での遺構検出は、遺構埋土とこの層との色調差が顕著であるため、遺構検出は比較的容易である。層厚は概ね数cm～20cm程度であり、遺物は含まれない。

Ⅳ層の直下であるⅤ層は、わずかな黄色シルトの中に砂礫が主体を占める。砂礫とシルトとは密着度が高く、一部湧水する地点も認められる。下位になればなるほどシルトはみられなくなり、礫の粒度は大きくなるようである。このⅤ層は段丘礫層で、層厚は不明である。また、遺物は含まれない。以上のように機械掘削の対象層であるⅠ層以外は、いわゆる地山層で無遺物の自然堆積層である。台太郎遺跡は近現代に削平されているエリアが広いので、ほとんどの地点で地山を遺構検出面とする。次に、検出遺構について概略の説明を調査区毎に述べ、個別の遺構に関する記載の導入部とする。

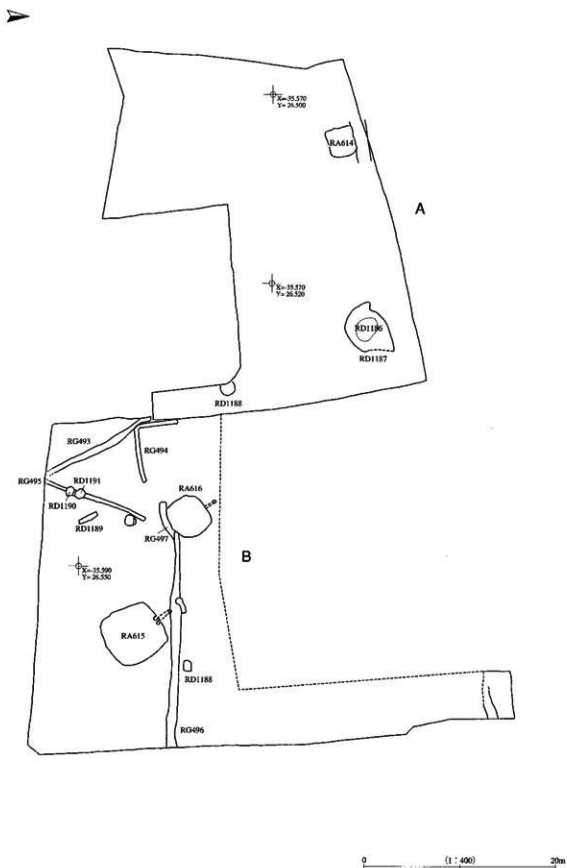
Ⅰ区は遺跡の西側に位置し、A～D区の5小区に分けている。ただし、ⅠD区は第53次調査区であるためここでは割愛する。ⅠA区ではⅠ層直下がⅣ層である。Ⅳ層上面を遺構検出面とし、溝・土坑などを検出した。ⅠB区ではⅠ層直下がⅣ層である。Ⅳ層上面を遺構検出面とし、堀の一部を検出した。ⅠC区ではⅠ層直下がⅢ～Ⅳ層である。このⅢ～Ⅳ層上面を遺構検出面とし、竪穴住居・土坑・溝などを検出した。ⅠE区ではⅠ層直下がⅣ層である。Ⅳ層上面を遺構検出面とし、竪穴住居・土坑・溝などを検出した。

Ⅱ区は遺跡の中央部西側に位置し、東西で2小区に分けている。東側をⅡA区、西側をⅡB区とした。ⅡA区ではⅠ層直下がⅡ～Ⅳ層である。このⅡ～Ⅳ層上面を遺構検出面とし、竪穴住居・竪穴住居状遺構・土坑・溝・堀などを検出した。ⅡB区ではⅠ層直下がⅢ～Ⅳ層である。このⅢ～Ⅳ層上面を遺構検出面とし、竪穴住居・土坑・溝・堀などを検出した。

Ⅲ区は遺跡東側に位置し、Ⅰ層直下がⅣ～Ⅴ層である。このⅢ～Ⅴ層上面を遺構検出面とし、竪穴住居・竪穴住居状遺構・土坑・溝・堀などを検出した。

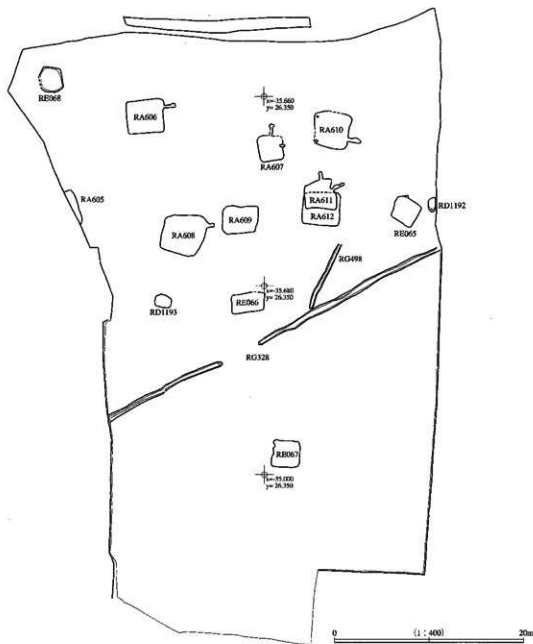


第5図 遺構配置 (I区)



第6図 遺構配置 (I区)

A



第7図 遺構配置(Ⅲ区)

2 竪穴住居跡

RA244 竪穴住居跡 (第8図、写真図版11)

位置は、I C区東側調査区境、区画点近くに位置する。第23次調査区で主体となる部分が調査されており、今回はその東側壁を検出した。

検出面はI層直下、標高124.200mを測る。その他の遺構との切り合いはみられない。

主軸方向は23次調査の成果を援用すると北西を指向すると考えられ、これは今回の成果と矛盾するものではない。

規模は東西4.8mを測り、形態は23次調査の成果と合わせると平面方形であると考えられる。方形の2箇所の隅がみられるが、北側隅における曲線はやや緩やかである。

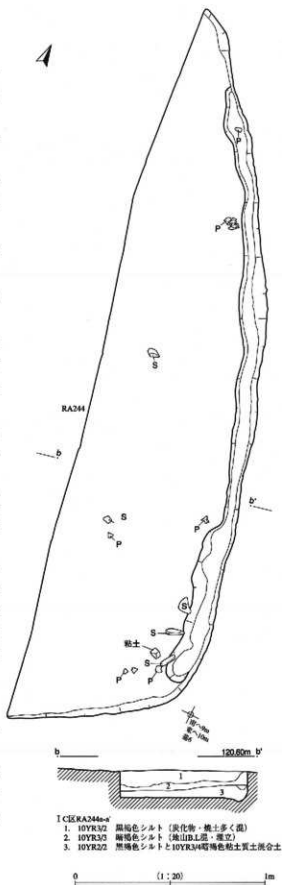
埋土はいくらか攪乱が及んでおり、堆積状況は良好ではなかったが、概ね2層のシルトが堆積している。埋土中からは土師器片や縄文土器と考えられる細片が出土した。

壁は南側壁で垂直気味に立ち上がり、検出したいずれの壁も比較的良好に遺存している。

カマドおよび煙道・煙出しは今回の調査区ではみられなかったが、23次調査区では北壁に1基確認されている。

床面は、あまり堅く締まったものではないが、概ね平坦である。床面施設壁に沿って溝が存在する。23次調査ではこのような溝が確認されていないため、東側だけに施された施設であったと考えられる。貼床は約10cmの厚さのシルトで施されている。貼床を除去すると1次的な構築面である凹凸がみられる。

出土遺物は、土製丸玉が埋土中より1点出土した。土器は土師器細片のみで実測に堪え得るものではなかった。RA244は今回の調査では時期を特定し得ないが、23次調査で竪穴住居の主体部分が調査されている。この調査では奈良時代に属すると考えられている。



第8図 RA244 竪穴住居

RA604 竪穴住居跡 (第 10・11 図、写真図版 12)

I D 区中央、区画点近くに位置する。検出面は I 層直下である。大規模に掘られた南西方向に長く延びる RG345 溝に住居中央を切られる。主軸方向は北西を指向する。

規模は南北 4.2m、東西 4.4 を測る。平面形は概ね平面正方形を呈する。

埋土はシルトの堆積が認められ、埋土中には普遍的に焼土ブロックや炭化物細粒が混入している。

壁は RG345 に切られている箇所以外は良好に残存している。また、壁はどの箇所においても垂直気味に立ち上がる。

カマドはそのほとんどが RG345 によって破壊されているが、東側袖部は良好に残存している。この東側袖部は土器がまとまって出土した。これは、土師器甕であり袖部に埋め殺された芯材が露出したものと考えられる。このカマド周辺では焼土化した床面がみられなかったため、RG345 に破壊された部分に燃焼部が存在したと推察できる。

煙道も大半が RG345 によって攪乱されている。この RG345 の東側肩部法面でわずかに残存した状態で確認した。

煙出しは、同様に RG345 によって攪乱されているため位置、形状ともに不明である。明瞭に検出できなかったことより、本来の煙出し部分は RG345 の溝範囲内に取まっていたと考えられる。

床面は非常に堅く締まり、平坦である。東側床面では坏、壺などの土師器がまとまって出土した。西側床面では土師器壺が土圧で潰れたかのようにまとまって出土した。床面施設はみられなかった。貼床は除去すると凹凸を持つ構築面が存在する。貼床はおもにシルトで構成され、平均すると約 10cm 程度の層厚を持つ。

出土遺物は、竪穴住居埋土中や床面などから土師器が出土した。これらのうち、凶化可能なものは坏が 3 点、甕が 2 点、壺 3 点である。(第 12 図、写真図版 46)

1～3 は土師器坏である。1・2 は 1 の方がやや小振りであるが、形態の特徴、胎土、焼成具合が両方で酷似している。さらに、底部に「十」字状の焼成前に施されたヘラ記号がみられることも共通する。これら共通する特徴より、両者の土器がほぼ同時性を示すものと考えられる。3 は 1・2 に比べるとやや大振りである。

4・5 は土師器壺である。4 は体部下半～底部が残存する。底部は平滑で、木葉痕等はみられない。5 は口縁部～体部上半が残存する。口縁部は緩く外反し、口縁端部はシャープで端面を持つ。頸部は明瞭な段を有し、体部と口縁部の境界が明瞭である。

6～8 は土師器甕である。いずれも煮沸の痕跡は認められない。6 は大形の甕である。最大径は体部中位に位置し、体部上半ではあまり張りがみられない。口縁部はやや直立気味に外傾し、端部は上方に直立する。体部上半には器面調整によって消されているが、タタキと思われる痕跡が微かにみられる。

出土した遺物は、台太郎遺跡ではほとんどみられない形態をしており、その形態は台太郎遺跡で多くみられる 7 世紀後半～8 世紀前葉の土師器に先行するとみられる。よって、この土器群は 7 世紀代前葉～中葉に属すると考えられる。

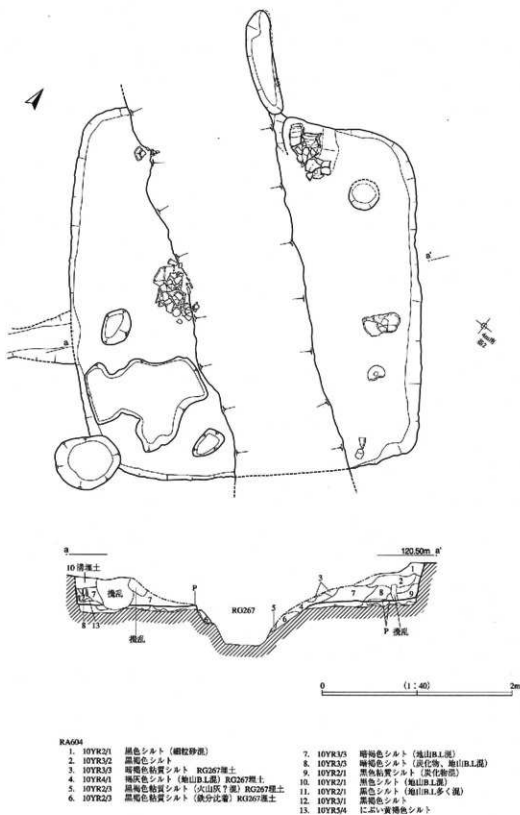
6・8 はカマド袖芯材であり、その他はいずれも住居床面より出土した。したがって、これらの遺物の出土状況は原位置に近いと考えられ、竪穴住居の廃棄時期を特定し得る一括資料である。

この遺構は、遺構の形態や規模、カマド・床面から出土した遺物より 7 世紀前葉～中葉の竪穴住居であると考えられる。

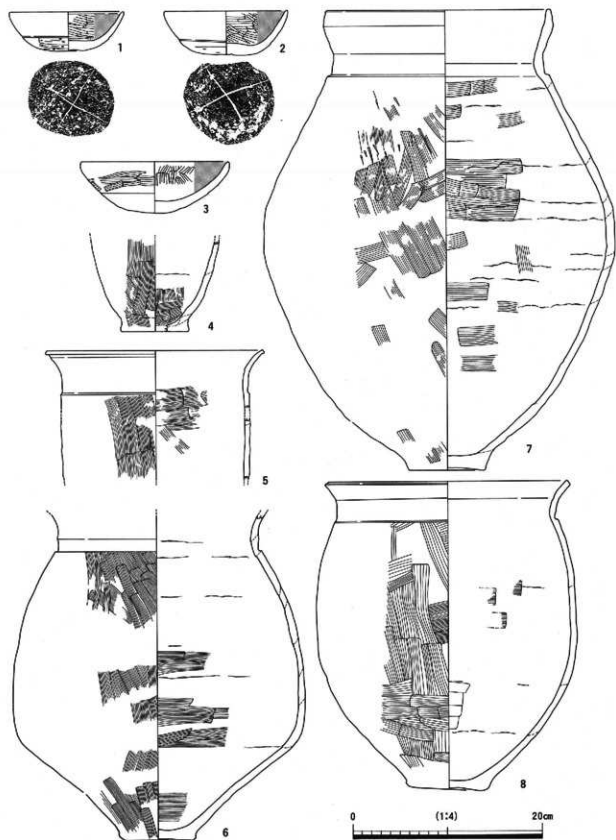


1 (S=1:2)

第 9 図 RA244
竪穴住居出土遺物



第10図 RA604 聖穴住居



第 11 図 RA604 竪穴住居出土遺物

RA615 竪穴住居跡 (第12・13図、写真図版13・14)

II B区はほぼ中央に位置し、検出面はI層直下の平坦な面である。直接的な切り合い関係は認められないが、RA616と近い位置関係にある。主軸方向はほぼ南北を指向する。

規模は、概ね南北6.3m、東西6.5mを測り、平面は方形を呈する。

埋土は、大きく分けて5層からなり、いずれも炭化物や焼土粒を含んだ暗褐色のシルトである。埋土最上層からも若干量の遺物の出土が認められるが、下層になるほどその量が増加する。

壁は四方いずれにおいても良好に残存する。場所によっては垂直に近い角度を持って立ち上がる。

カマドは北側壁に設置されており、やや崩れた状態で袖部を検出した。燃焼部は不規則な広がりがあり、炭化物層に覆われていた。この炭化物層や燃焼部の焼土からは肉眼でも確認が困難な程微細な骨片が出土した。骨片の分析や同定はおこなわなかったので詳細については不明である。

煙道は、断面円形トンネル状に掘り込まれており、総長1.5mを測る。煙出しは深さ80cmを測る。

床面は、全体的に固く締まった平坦なものである。しかし、南西部分にやや硬化が認められない箇所が広がる。また、カマド東袖部付近や南東隅の壁際には土器を中心に多量の遺物がまがもって出土した。

床面施設としては、柱穴を6基検出した。南北方向に3基ずつ2列並ぶ。

貼床は炭化物や焼土粒を含むシルトで、ほぼ床面全域で確認された。

出土遺物は竪穴住居埋土中および床面などから土師器が多量に出土した。これらのうち、図化可能なものは坏8点、鉢1点、甕19点、壺3点である。(第14図、写真図版47～51)

1～8は土師器坏である。口径で分類すると1～3は小形、4～7は中形、8は大形である。3～4は明瞭な段がみられない。特に3は扁平な器形で特異な形状である。内面黒色処理されていると考えられるが、ミガキと同様に摩滅によって不明瞭である。

12は土師器鉢である。体部中位にかすかな段があり、底部は尖底気味である。内外面ともにハケ調整であり、黒色処理は施されていない。このような特徴より、形態は大形の坏であるが、用途、機能が異なると考え、器種は鉢とした。2次的な被熱がみられるが、痕跡に不自然な偏りがみられるため煮沸など使用に際しての痕跡ではないようである。

11・13～20・22～31は土師器甕である。

11は湯飲みのような形状の小形甕である。粘土紐巻き上げ成形であるが、手づくねのように粗く稚拙な作りである。

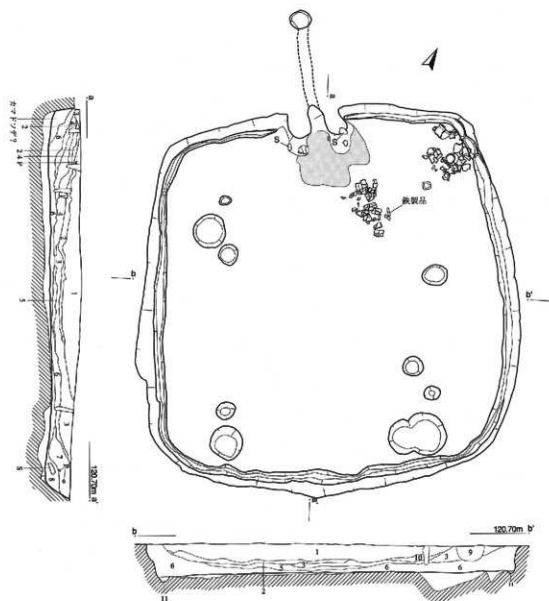
14～20はいずれも器壁が薄く、口縁部に段や稜が認められ、やや受け口状の口縁部を持つ。口縁端部は端面や凹面を持つという共通の特徴を有する。よって、ほぼ同時期に製作された可能性が高い。14は口縁端部の摘み上げが顕著で、二重口縁と呼ぶことができる特徴的な形状である。

一方、13・30・31は器壁が厚く、口縁部もシャープな段や稜は認められない。全体的に鈍い作りである。

その他はいずれも底部片ばかりである。底部から体部の立ち上がりに際して、括れがあるものないものに分かれる。内底面はU字形を呈するものが多い傾向である。25は外面にヘラケズリの痕跡が認められるが、その他は縦方向のハケである。また、24は外底面に木炭痕が認められる。葉脈等が明瞭であり、広葉樹の葉1枚であるとみられる。

9・10・21は煮沸痕跡のみられない土師器甕である。

9は比較的大形の甕であると考えられる。体部下半から底部のみの破片であるため全体の形状は不明であるが、少なくとも下半は球形を呈している。したがって、最大径は体部中位付近にあり、7世

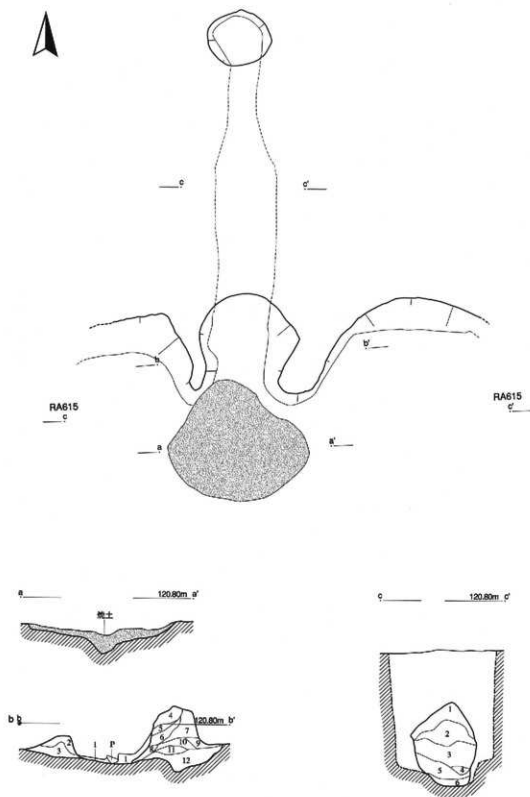


RA615

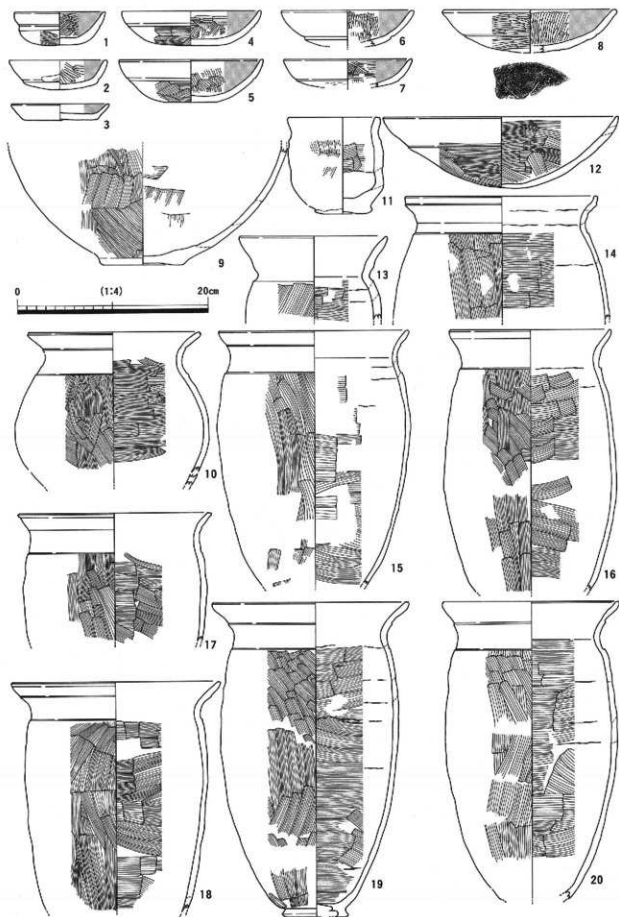
- | | |
|--------------|---------------------------|
| 1. 10YR1.7/1 | 褐色シルト (地山B.L.含む) |
| 2. 10YR2/3 | 黄褐色シルト (地山B.L.含む) |
| 3. 10YR2/1 | 黑色シルト (地山B.L.わずかに含む、炭化物混) |
| 4. 7.5YR3/4 | 暗褐色シルト (中-塊状砂混) |
| 5. 10YR2/2 | 黄褐色粘質シルト (地山B.L.含む) |
| 6. 10YR2/2 | 黄褐色シルト (地山・塊土B.L.少量混) |
| 7. 10YR2/2 | 黄褐色シルト (g-Sand大粒土B.L.混) |
| 8. 7.5YR2/1 | 褐色粘質シルト (塊状砂混) |
| 9. 10YR2/1 | 褐色シルト (中カク) |
| 10. 7.5YR4/2 | 灰褐色シルト (粗粒砂混・地山B.L.含む) |
| 11. 10YR2/2 | 黄褐色粘質シルト |

0 (1:60) 3m

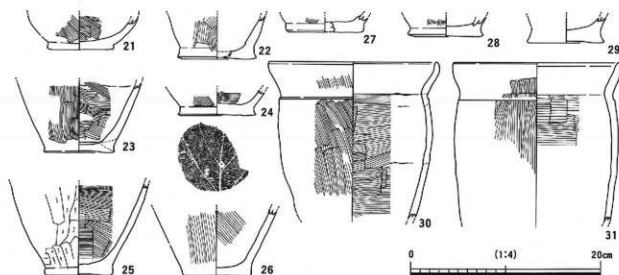
第 12 図 RA615 竪穴住居



第 13 図 RA615 竪穴住居カマド



第 14 図 RA615 竪穴住居出土遺物①



第15図 RA615 竪穴住居出土遺物②

紀中葉頃の壺の特徴である体部下半に最大径のある壺よりも新しい要素が認められる。また、同様に最大径が体部上半部に位置する8世紀中葉以降の壺とも異なるようである。これらのことから、7世紀後半以降8世紀前半までの壺の特徴を有するものと考えられる。

10は先述した14～20の壺と類似する形態の口縁部である。すなわち、頸部の段以外に、口縁部にもう一つの段があり、口縁端部は小さな凹みがある。壺と異なり、受け口状を指向していないが、2段のヨコナデにより上半が外反傾向である。また、底部が欠損しているため全体の形状は不明であるが、比較的小振りな壺である。

21は壺の底部である可能性も考えられるが、その他の底部と異なりやや括れが大きく、現時点では、壺の底部であると考えられる。

その他の遺物では、鉄製録片(第47図)・石製紡錘車(第16)がそれぞれ床面より出土した。

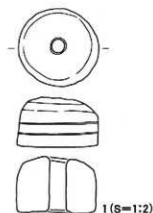
石製紡錘車は、砂岩質の石材を加工したものである。中央に穿孔されており、外側面には細い2条の条線が刻まれ、全周している。

以上、掲載した遺物の大半は、住居床面よりまとまった状況で出土した。良好な一括遺物であると考えられる。また、RA604の坏類に類似した形態を有する2は、厚ぼったく小形の坏である。これは、住居貼床より出土しており、この竪穴住居の使用あるいは廃棄時期より遡る時期の土器である可能性が考えられ、RA604と同時期の7世紀前葉～中葉の所産であると考えられる。その他、床面一括資料は7世紀末～8世紀初頭と考えられる。

この遺構は遺溝の特徴、出土した土器より概ね7世紀末～8世紀初頭のものと考えられる。

RA616 竪穴住居跡(第17・18図、写真図版15・16)

ⅡB区中央に位置し、検出面はI層直下の平坦な面である。切り合い関係はRG516と認められる。



第16図 RA615 竪穴住居出土遺物③

RG516は浅く短い溝であり、この竪穴住居を切る。また、この竪穴住居はRA615と近い位置関係にある。主軸方向はほぼ南北を指向する。

規模は、概ね南北4.3m、東西4.05mを測り、平面形は概ね方形を呈するが、東側でやや膨らむ形態である。

埋土は、大きく分けて3層からなり、いずれも炭化物や焼上粒を含んだ暗褐色のシルトである。埋土層からも若干量の遺物の出土が認められるが、下層になるほどその量が増加する。

壁は四方いずれにおいても良好に残存する。場所によっては垂直に近い角度を持って立ち上がるが、東側壁は開口部で緩やかに開く。

カマドは北側壁に設置されており、袖部が良好に残存している。袖部直上より土器が多く出土し、これらが本来袖部の補強用芯材として利用されていた可能性が高い。

煙道は、断面円形トンネル状に掘り込まれており、総長1.3mを測る。煙出しは深さ75cmを測る。床面は固く締まり平坦であり、床面施設として、周溝が壁際に沿って全周する。また、貼床はほぼ全面で施されており、貼床を除去すると掘り方底の凹凸がみられる。

出土遺物は、竪穴住居埋土中や床面などから土器器が出土した。これらのうち、図化可能なものは坏が11点、甕が22点、壺5点である。(第19・20図、写真図版52～56)

1～11は土器器坏である。

1は外傾する体部および口縁部と平坦な底部を有する。体部下半に相い沈線状の条線が1条巡る。調整は内外面ともミガキが施されている。

3・6・7はやや平底風の底部で、体部には段も稜線もみられない碗形の形態である。いずれも内面はミガキ・黒色処理が施されているが、外面調整は一律ではない。

4・8はいずれも体部の段が明瞭にみられる。底部はやや平底傾向であるが、全体の形状は丸みを帯びている。口縁部はやや内湾気味である。

5は底部に「十」字形のヘラ描きが施されていると考えられる。底部全面が残存していないため断定はできないが、RA604で出土したヘラ描き坏と同様の意匠であると考えられる。

9はやや深い形状の坏である。底部は完存していないが、内底面は上にわずかに盛り上がりが見られ、外底面は剥離したような残存状況である。このようなことから、坏部の下に脚部が取り付けられていた可能性も考えられる。

10は体部に多条の沈線が横走する。底部はやや平底傾向であり、内面はミガキ・黒色処理が施されている。

11は扁平な皿形の器形である。外面はヘラケズリが施されている。

12は土器器高坏である。明るい色調を呈しており、坏部は内外面ミガキが施されている。また、坏部、脚部ともに段が1段ずつ明瞭にみられる。

13～15・35・39は土器器壺である。

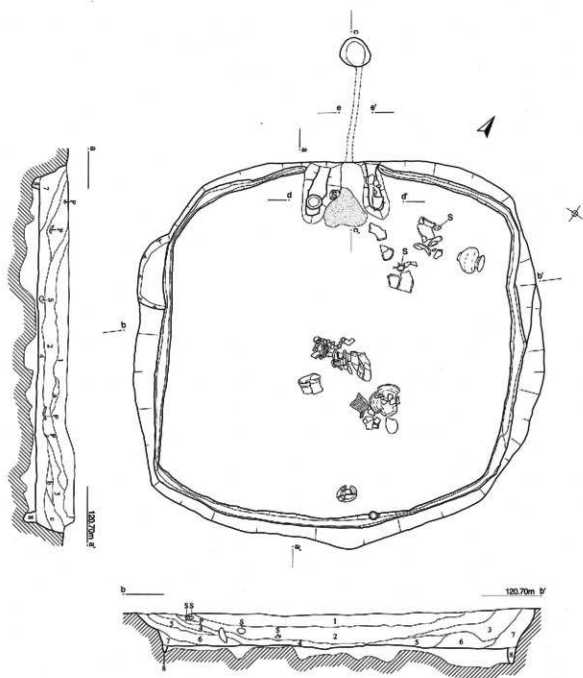
13は小形の壺である。完形で床面直上より出土した。体部と同じくらの長さを持つ口縁部には段が2段みられる。

14は体部下半に最大径を持ち、15は体部中位付近に最大径を持つ。

16～32・34・36～38は土器器甕である。

19は小形の甕である。20・21はそれぞれ大きさが異なるが、径の大きな体部と括れ度の弱い口縁部が特徴的である。いずれも煮沸痕跡が認められる。

25は埋土上層より出土した破片である。この破片はRA615床面出土の15土器器甕との接合が確認

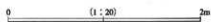
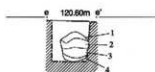
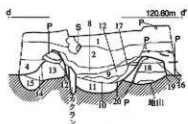


RA616

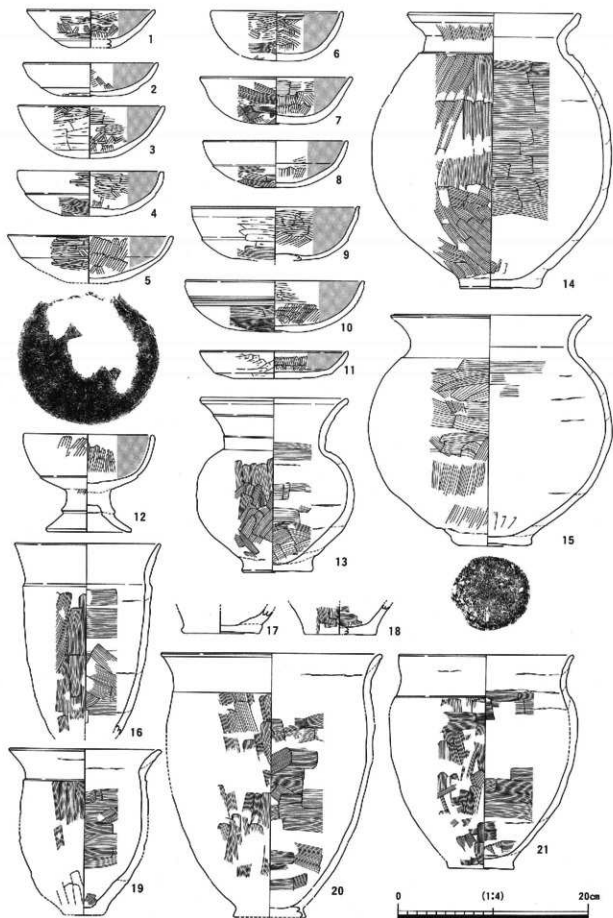
1. 10YR2/1 黒色シルト (中粒砂・地山粘土少し混)
2. 10YR2/0 黒褐色粘質シルト (炭化物多く混)
3. 10YR3/1 黒褐色粘質シルト (地山BL混)
4. 7.5YR3/2 黒褐色粘質シルト (地山BL多く混)
5. 7.5YR3/4 黒褐色粘質シルト (中粒砂・地山BL多く混)
6. 7.5YR3/5 黒褐色粘質シルト
7. 10YR2/1 黒色シルト (中・細粒砂混)
8. 10YR3/0 黒褐色粘質シルト (炭化物混)
- a. 10YR3/1 黒褐色シルト (地山BL多量)
- b. 10YR3/2 黒褐色シルト (炭化物混)
- c. 10YR2/1 黒色シルト (地山・粘土BL少量)

0 (1:40) 2m

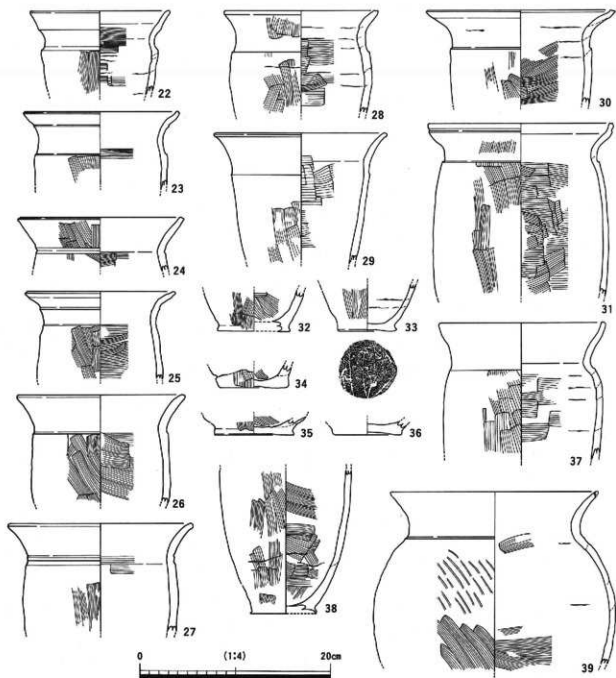
第 17 図 RA616 竪穴住居



第18図 RA616竪穴住居カマド



第 19 図 RA616 竪穴住居出土遺物①



第 20 図 RA616竪穴住居出土遺物②

された。

出土した土器群は、土師器の特徴から現段階では概ね 7 世紀末～ 8 世紀初頭のものであると考えられる。つまり、近くに位置する RA615 とは時期的にも近いと考えられる。しかし、1 点の甕の遺構間接合により層位的にこの RA616 の方が古いと推測される。

本遺構は遺構の形態や規模から古代の竪穴住居であり、カマド・床面から出土した多くの遺物より 7 世紀後半～ 8 世紀にかけての竪穴住居であると考えられる。

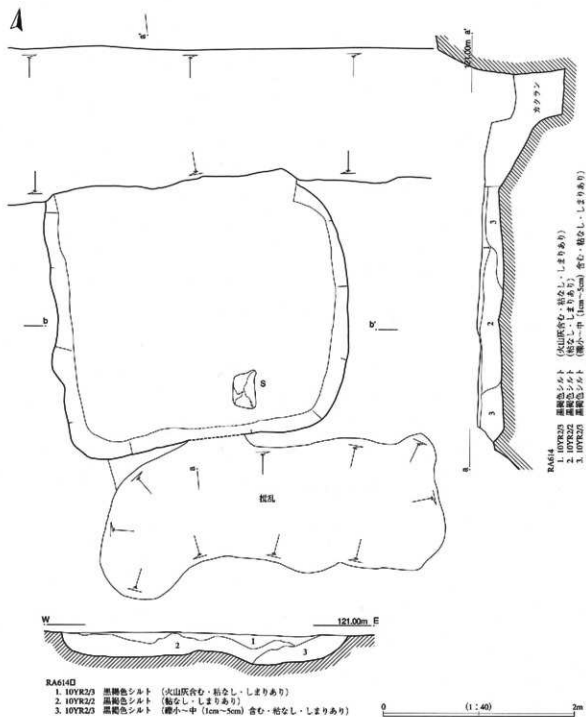
RA614 竪穴住居跡 (第21図、写真図版17)

II A区北端に位置する。検出面は第1層直下である。

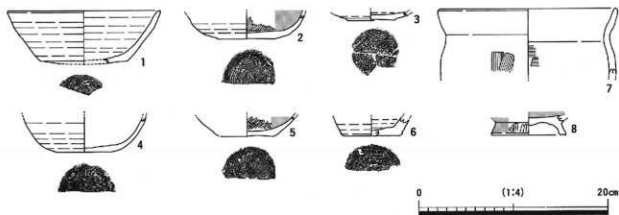
平面形は、ほぼ方形を呈するものと思われるが、北側をRG264に攪乱され、南側を現代の攪乱によって失われている。

規模は、南北長2.6m、東西長2.4、深さ18.5cmを測る。

埋土は、概ね2層のシルトからなる。上層には十和田a降下火山灰とみられるものが粉状に散在する。



第21図 RA614 竪穴住居



第22図 RA614 竪穴住居出土遺物

カマドは、確認できなかった。カマドが存在していたならば、攪乱を受けている南側あるいは北側に位置していた可能性が考えられる。

床面の貼床はみられず、貼床そのものが施されていないと考えられる。また、同様に柱穴は検出されなかった。

出土遺物は、竪穴住居埋土中から土師器が出土した。図化可能なものは8点である。(第22図、写真図版57)

1～5は土師器坏である。

1・3・4はいずれもミガキ・黒色処理が施されていない。また、1・4は比較的大形の坏である。特に4は口縁部が残存しておらず、深く丸みを帯びた特徴的な形状である。

6・7は土師器甕である。

6は底部のみの破片である。調整にはロクロの回転力が用いられており、底径が小さいことから、かなり小形の甕であると考えられる。

7は口縁部である。ロクロの調整は認められない。

8は土師器柄である。高台が付き、内外面ともに黒色処理が施されている。

RA614は、埋土中の火山灰、出土した遺物より、平安時代概ね9世紀後半の竪穴住居であると考えられる。

RA605 竪穴住居跡 (第23図、写真図版15・16)

Ⅲ区西端に位置する。検出面は第1層直下である。

平面形は、ほぼ方形を呈するものと思われるが、大半が調査区外へ続く。

規模は、南北長1.6m、深さ10.6cmを測る。

埋土は、概ね単層のシルトからなるが、南北方向断面の堆積状況と東西方向の堆積状況がやや異なる。上層には十和田a降下火山灰とみられるものが粉状に散在する。

カマドは、調査区内では痕跡すら確認できなかった。

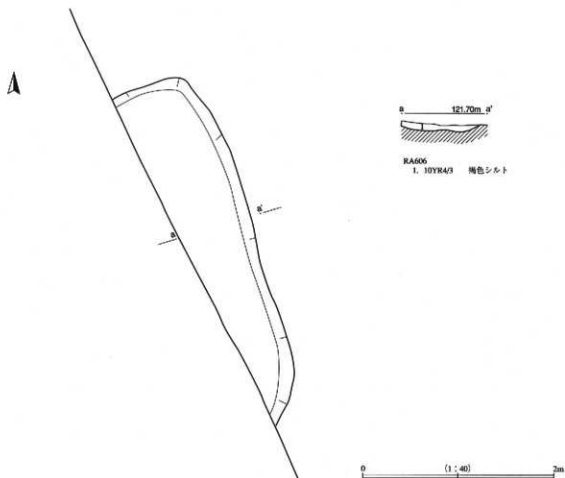
床面の貼床はみられず、貼床そのものが施されていないと考えられる。また、同様に柱穴は検

出されなかった。

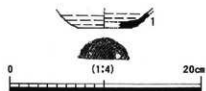
出土遺物は、竪穴住居埋土中から土師器が出土した。図化可能なものは須恵器坏が1点のみである。
(第24図、写真図版57)

この須恵器坏は底部のみの破片である。底部は回転糸切りの痕跡を明瞭に残す。底径は5cmで、9世紀半ば以降のものであると考えられる。

RA605は、埋土中の火山灰、カマド・床面から出土した遺物より、平安時代概ね9世紀後半～10世紀前半の竪穴住居であると考えられる。



第23図 RA605 竪穴住居



第24図 RA605 竪穴住居出土遺物

RA606 竪穴住居跡 (第25・26図、写真図版18・19)

Ⅲ区はほぼ中央に位置する。検出向は第1層直下である。

平面形は、ほぼ方形を呈すると考えられる。規模は南北長5.38m、東西長5.82m、深さ12.6cmを測る。

埋土は、概ね上・中・下3層のシルトからなるが、上層は堆積土よりも火山灰の方が多層である。中～下層は焼土塊を含むシルトの堆積であった。

側壁は、攪乱を受けている南側壁と北西隅を除いてすべて良好に残存している。

カマドは、西側辺のほぼ中央に設置されている。カマド両袖は構築土で覆われた、窯を芯材とするものである。また、カマド天井部はすでに失われていた。燃焼部は両袖の間に存在し、円形の範囲で比較的厚い焼土層を確認した。

床面の貼床は掘り方のわずかな凹凸を解消する程度の薄いものが施されていた。

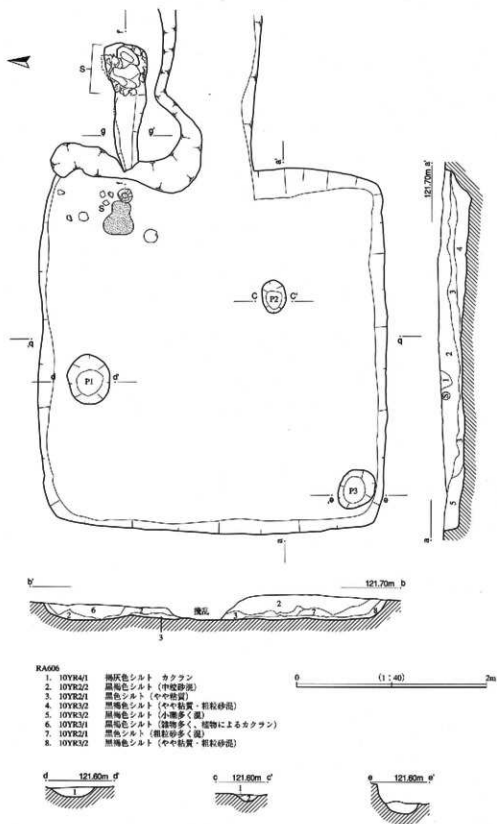
出土遺物は、竪穴住居埋土、床面、カマドなどから土師器、須恵器が出土した。図化可能なものは須恵器坏が2点、土師器坏5点、土師器甕1点である。(第26図、写真図版57)

1・2は須恵器坏である。2は体部に逆位で「木」と墨書が施されている。

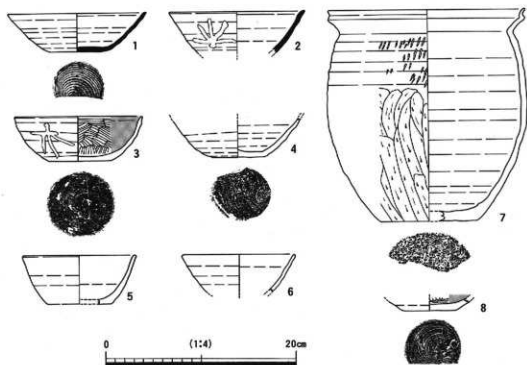
3～6・7は土師器坏である。3は体部に正位で「木」と墨書が施されている。7は煙出し埋土中より出土した土師器甕である。1次調整はタタキや回転ナデ、2次調整はヘラケズリが施されている。底部は多くの砂粒が付着した砂底である。いずれの土器も他の竪穴住居同様9世紀半ば以降のものであると考えられるが、今回調査で得られた平安時代の出土遺物の中ではやや古い特徴がみられるものが含まれる。特に3・5など土師器坏体部の丸み、大きめの底径、土師器甕の形態が挙げられる。

出土した土器は概ね9世紀半ば～10世紀前半のものであると考えられる。

出土した土器群は、土師器の特徴から現段階では平安時代概ね9世紀半ば～10世紀前半のものであると考えられる。



第 25 図 RA606 竪穴住居



第 26 図 RA606 竪穴住居出土遺物

RA607 竪穴住居跡 (第 27・28 図、写真図版 21・22)

Ⅲ区北西隅に位置する。検出面は第 1 層直下である。

平面形は、ほぼ方形を呈し、規模は東西長 3.20m、南北長 3.35m、深さ 14.5cm を測る。

埋土は、概ね上・下 2 層のシルトからなる。上層は砂礫などが多く混じったシルトであり、下層は焼土塊を微量に含むシルトの堆積であった。

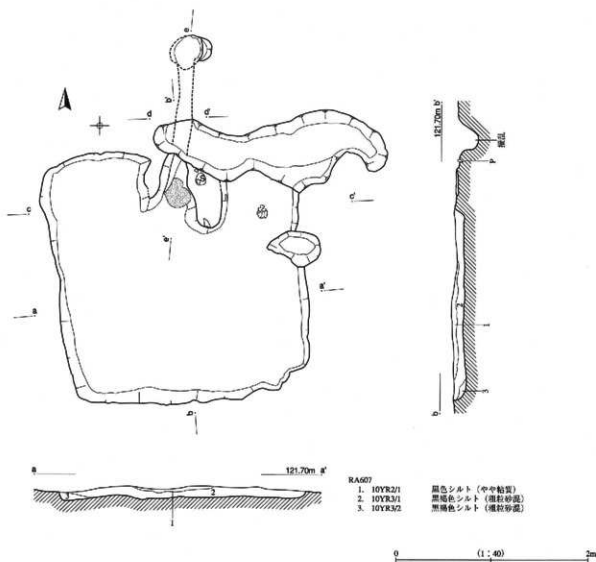
側壁は、大きく攪乱を受けている東側壁を除き比較的良好に残存している。

カマドは攪乱により大半が失われているが、わずかな袖の高まりを検出した。燃焼部は両袖の間に存在し、不整な円形の範囲で比較的厚い焼土層を確認した。

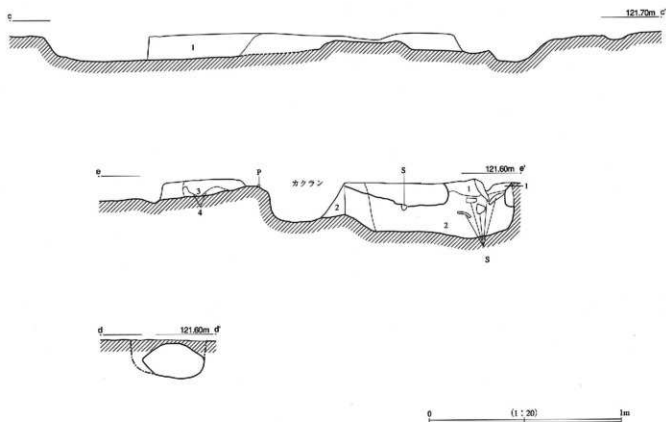
床面の貼床は厚いところで約 10cm を測り、ほぼ床面全体に施されている。床面には焼土が広がる部分もあったが、1 次的なものではなかった。

出土遺物は、カマドから出土した土師器鉢 1 点である。(第 29 図、写真図版 58)

出土した土師器鉢はロクロを用いた土師器甕と同じ形態を呈する。回転ナアの後に外面は縦方向のヘラケズリが施されている点も同じである。しかし、内面に横方向のミガキが密にみられ、黒色処理が施されているため煮沸用の器種である甕ではなく貯蔵用の器種である鉢とした。1 次調整はタタキ



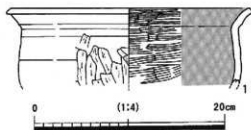
第 27 図 RA607 竪穴住居



第28図 RA607 竪穴住居カマド

や回転ナデ、2次調整はヘラケズリが施されている。

この遺構は、遺構の特徴、出土した土器より平安時代概ね9世紀後半～10世紀前半のものであると考えられる。



第29図 RA607 竪穴住居出土遺物

RA608 竪穴住居跡 (第30・31図、写真図版22・23)

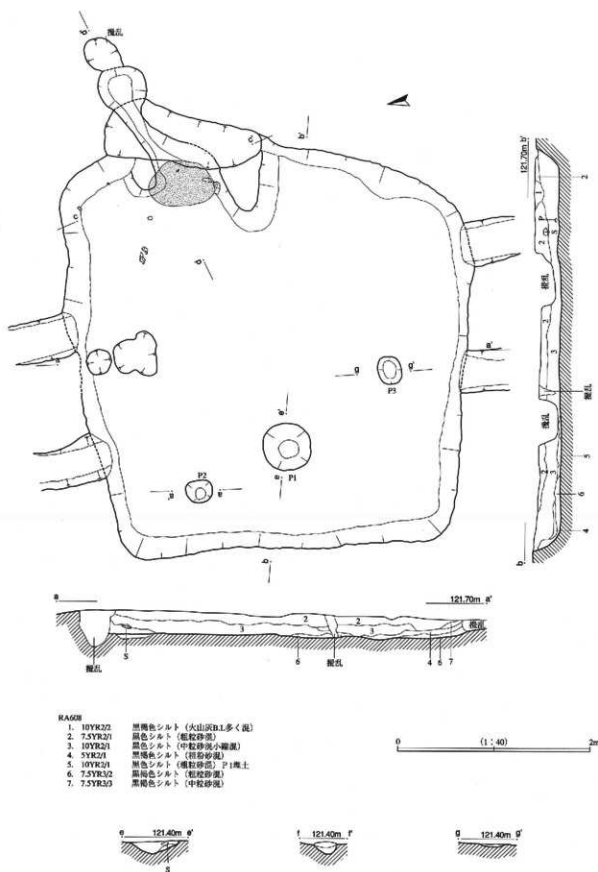
Ⅲ区はほぼ中央に位置する。検出面は第Ⅰ層直下である。

平面形は、ほぼ方形を呈し、規模は南北長の推定値2.91m、東西長2.95m、深さ30.9cmを測る。

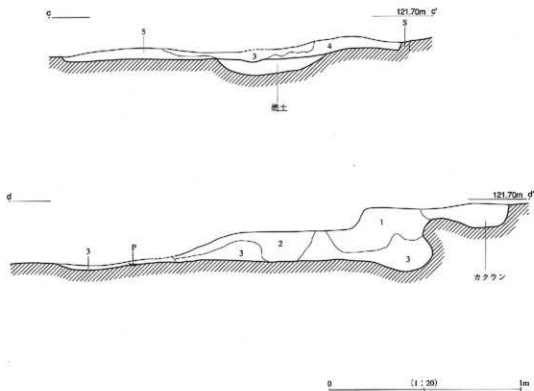
埋土は、概ね上・下2層のシルトからなる。上層は上面の攪乱を受けているが、シルトが堆積している。中～下層はやや締まったシルトの堆積であった。埋土全体に地山のブロック土を含むが、層の単位に不規則性や細かさがみられないため自然堆積の埋土であると考えられる。

側壁は、攪乱を受けている北側壁を除いてすべて非常に良好に残存している。また、側壁立ち上がりが良好で、割平の度合いが極めて少ない。

カマドは、西側辺のほぼ中央に設置されている。カマド両袖はほとんどすでに失われていた。燃焼



第 30 図 RA608 竪穴住居



第31図 RA608 竪穴住居カマド

部は両袖の間よりやや手前に存在し、円形の範囲で焼土層を確認した。

煙道は、天井部が残存していなかったが、トンネル状であったと考えられる。煙道は住居から煙出しに向けてやや登り勾配気味に掘られており、その他の住居とは少し異なる。

煙出しは煙道の方向より、やや北側に逸れた位置で開口部を持つ。

床面の貼床は平均すると約10cmの厚みで住居全体に施されている。この床面は全体的に強固に締まっており、締まっていない南西部分は2次的な焼土が堆積していた。

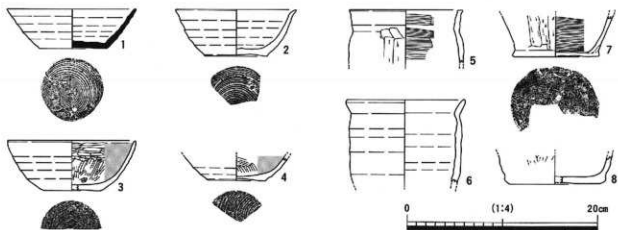
出土遺物は、竪穴住居埋土、床面、カマドなどから土師器、須恵器が出土した。図化可能なものは須恵器坏が1点、土師器坏3点、土師器甕4点である。(第32図、写真図版58)

1は須恵器坏である。底部回転糸切り後無調整であり、底径は7.1cmを測る。

2～4は土師器坏である。2・3はいずれもやや丸みがある体部を持つ。2は黒色処理が施されていない。

5～8は土師器甕である。いずれも全体の形態は不明である。

土器も他の竪穴住居同様9世紀半ば以降のものであると考えられるが、今回調査で得られた平安時代の出土遺物の中ではやや古い特徴がみられるものが含まれる。特に底径の大きな1の須恵器坏、土師器坏体部の丸み、大きめの底径が挙げられる。特に1の須恵器坏は底部ヘラ切りではないため、9世紀初頭の志波城並行期よりは新しい特徴であるが、それに後続する時期のものであると考えられる。



第32図 RA608 竪穴住居出土遺物

出土した土器は須恵器・土師器の特徴から現段階では概ね9世紀前半～9世紀半ばのものであると考えられる。

RA608は、遺構の形態や規模から古代の竪穴住居であることは間違いない。さらに、カマド・床面から出土した遺物より平安時代の竪穴住居であると考えられる。

RA609 竪穴住居跡 (第33図、写真図版26・27)

Ⅲ区南中央に位置する。住居南東隅が区画点2I23qに近接する。検出面は第1層直下、標高122.700mを測る。

平面形態はほぼ方形を呈し、規模は南北長3.90m、東西長4.02m、深さ5.6cmを測る。

埋土は、概ね上・下2層のシルトからなるが、南北方向断面の堆積状況と東西方向の堆積状況がやや異なる。

西側壁は、良好に残存しているが、東側壁は調査区外へ続き、南半のみが残存している。北側壁は、東半がRA050によって失われているため西半のみが良好に残存している。

カマドは、西側辺のほぼ中央部に設置されている。カマド西袖は、床面よりわずかな高まりを確認できたが、東袖は削平されており、確認できなかった。燃焼部は円形の範囲で焼土を確認した。

床面の貼床はみられず、貼床そのものが施されていないと考えられる。また、同様に柱穴もみられなかった。

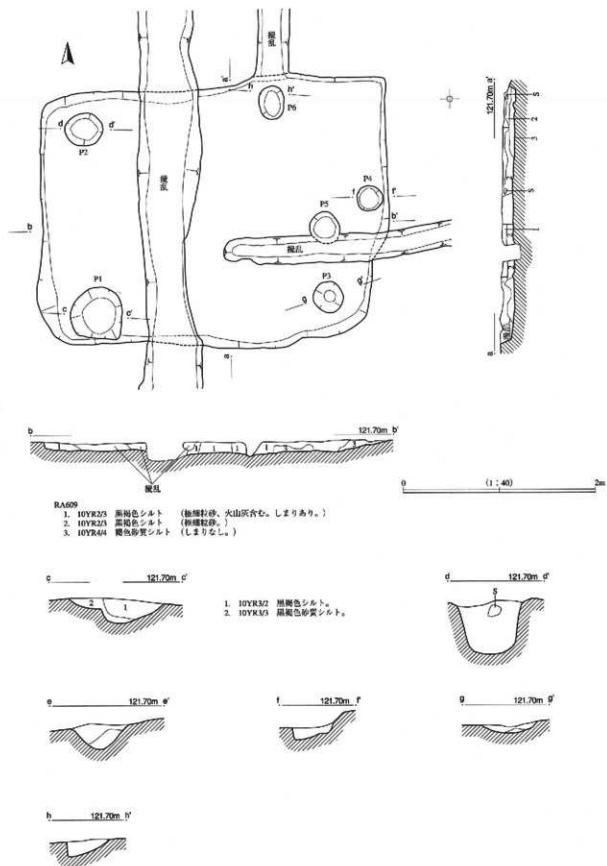
出土遺物は、埋土中から土師器、須恵器が出土した。図化可能なものは須恵器坏が1点、土師器甕1点である。(第34図、写真図版58)

1は須恵器坏である。底部は回転糸切り後無調整である。

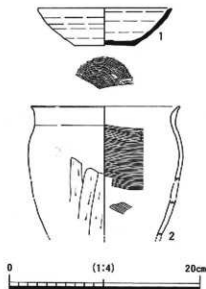
2は土師器甕である。外面調整は縦方向のヘラケズリ、内面は横方向のハケが施されている。底部は残存していない。頸部の括れは弱い。

出土した土器は概ね9世紀後半～10世紀前半のものであると考えられる。

RA609は、遺構の形態や規模から古代の竪穴住居であり、出土した遺物より平安時代の竪穴住居であると考えられる。



第 33 図 RA609 竪穴住居



第34図 RA609 竪穴住居出土遺物

RA610 竪穴住居跡（写真図版26・27）

Ⅲ区北側に位置する。検出面は第1層直下である。

平面形態は、ほぼ方形を呈し、規模は南北長3.33m、東西長3.82m、深さ10.6cmを測る。

埋土は、概ね上・下2層のシルトからなる。下層は焼土、炭化物を含むシルトの堆積であった。

側壁は、攪乱を受けている南側壁と北西隅を除いてすべて良好に残存している。

カマドは、西側辺のほぼ中央に設置されている。カマド両袖は構築土で覆われたものである。また、カマド天井部は失われていた。燃燒部は両袖の間に存在し、円形の範囲で焼土を確認した。また、カマド周辺では多くの遺物が出土した。

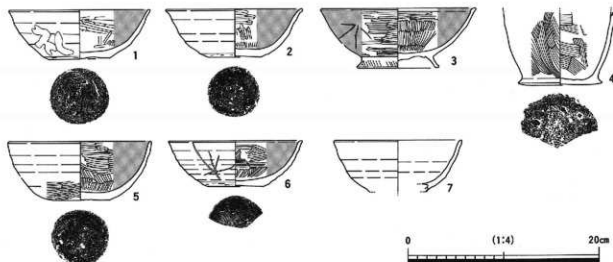
出土遺物は、床面、カマドなどから土師器が出土した。図化可能なものは土師器坏5点、土師器碗1点、土師器甕1点である。（第35図、写真図版59）

1・2・5～7は土師器坏である。1は体部に正位で「札」あるいは「札」と墨書が施されている。6は体部に逆位で「木」と刻書が施されている。

3は土師器碗である。内外面ともにミガキ調整され、黒色処理されている。体部に正位で「木」と刻書が施されている。

4は土師器甕である。体部下半～底部の破片である。内外面ともにハケが施されている。

出土した土器の特徴から概ね平安時代9世紀半ば～10世紀後半のものであると考えられる。



第 35 図 RA610 竪穴住居出土遺物

RA611・RA612 竪穴住居跡（写真図版 28～29）

Ⅲ区南端はほぼ中央に位置する。住居南西隅が区画点 2I22q に近接する。両住居はそれぞれ切り合い関係がある。カマドが良好に残存するのは RA612 である。検出面は第 1 層直下である。

平面形は、北側が東西方向に流れる現代の水路によって攪乱され失われているため不完全であるが、ほぼ方形を呈すると考えられる。規模は東西長 3.44m、深さ 22.8cm を測る。

埋土は、概ね上・下 2 層のシルトからなる。埋土中には地山ブロックを含むが、木の根の浸食作用によって生じたものと考えられ、埋土自体に人為的な様子は窺えない。

側壁は、攪乱を受けている北側壁を除いて概ね良好に残存しているが、南西角は RA043 によって損なわれている。

カマドは、南側辺の東寄りに設置されている。カマド両袖は構築土で作られたものである。東側袖はほとんど残存していないが、西側袖は構築土の高まりが良好にみられた。さらに、この西側袖は基底面を築いてから袖を作ったような様子が断面で観察できた。カマド天井部はすでに失われていた。燃焼部は両袖の間に存在し、円形の範囲で比較的厚い焼土層を確認した。

煙道はカマドから南向きにトンネル状に掘られており、天井部も良好に残存している。出しかし、煙道壁面は焼土化していなかった。

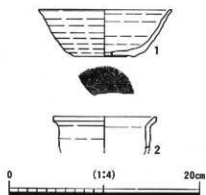
煙出しは直径 40cm を測る円形の開口部を持ち、検出面より約 70cm 深さの掘り込みが認められた。

床面には明瞭な貼床はみられず、床面は大半で地山礫層が露出した状態である。

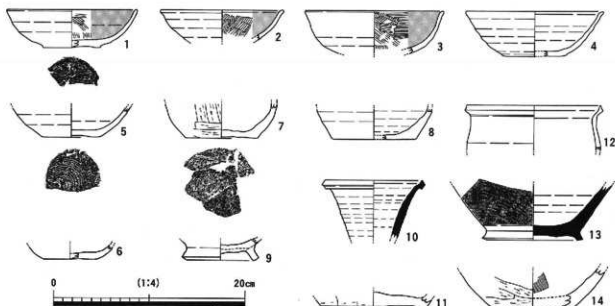
出土遺物は、RA611 埋土から土師器が出土した。図化可能なものは土師器坏 1 点、土師器甕 1 点である。（第 36 図、写真図版 59）

1 は土師器坏である。内外面ともに回転ナデのみの調整で黒色処理はされていない。2 は土師器甕である。小形製品であり回転ナデ調整がみられる。

遺構および遺物から 9 世紀後半～10 世紀前半にかけての竪穴住居であると考えられるが、切り合い関係より RA611 は RA612 よりも古い竪穴住居である。



第36図 RA611 竪穴住居出土遺物



第37図 RA612 竪穴住居出土遺物

3 竪穴住居状遺構

RE065 竪穴住居状遺構 (第38図、写真図版31)

Ⅲ区南端に位置する。竪穴住居状遺構北西隅が区画点2I21yに近接する。検出面は第I層直下、標高122.500mを測る。この検出面は、削平が著しい面であった。平面形はほぼ方形を呈している。規模は南北3.60m、東西長3.89m、深さ22.8cmを測る。

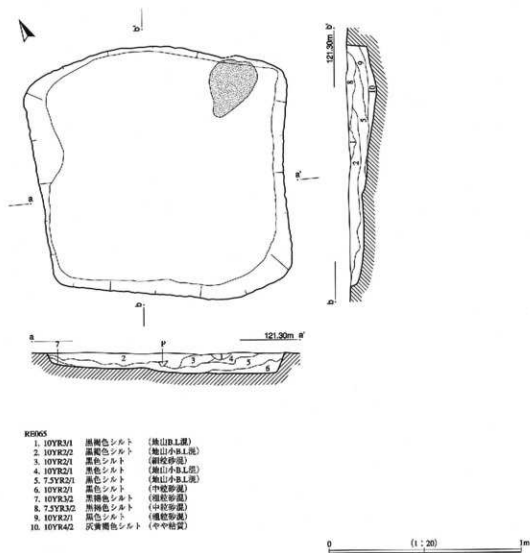
埋土は、概ね上・下2層のシルトからなる。上層は火山灰を含むシルト層、下層は層厚10cmもないシルトである。この下層のシルトは地山に色調が類似するが、明らかに地山よりも締まりがないものであったため地山とは区分した。

壁は一部攪乱を受けている南側壁を除いて概ね良好に残存している。床面には貼床は認められず、他の住居ほど締まりや硬化がみられなかった。

カマド、煙道、煙出しともに存在せず、それら存在の痕跡になり得る焼土や炭化物もまったくみられない。よって、規模および形態からは竪穴住居と大きく隔たりを持つものではないが、カマドが存

在しないため竪穴住居状遺構とした。

また、出土遺物もまったくみられなかった。以上の事実より、この遺構が居住用の施設である可能性は極めて低いと考えられる。



第38図 RE065 竪穴住居状遺構

RE066 竪穴住居状遺構 (第39図、写真図版32)

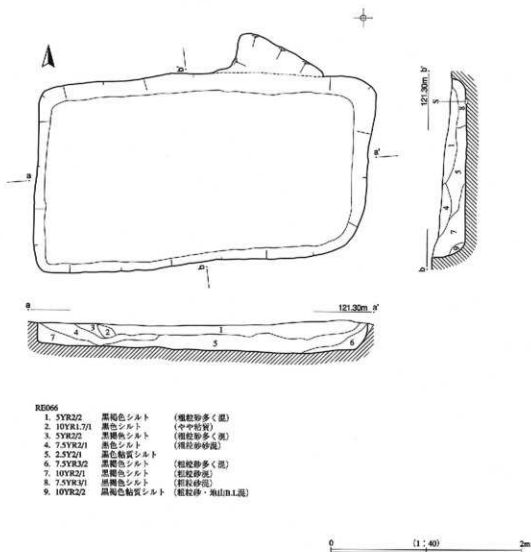
区南端に位置する。竪穴住居状遺構北西隅が区画点3I21gに近接する。検出面は第1層直下、標高122.500mを測る。この検出面は、削平が著しい面であった。平面形はほぼ東西に長い長方形を呈する。規模は南北2.27m、東西長3.93m、深さ23.3cmを測る。

埋土は、概ね上・下2層のシルトからなる。上層は炭化物を含むシルト層である。下層は砂粒を含むシルトである。側壁は概ね良好に残存している。

床面には貼床は認められず、他の住居ほど締まりや硬化がみられなかった。

カマド、煙道、煙出しともに存在せず、それら存在の痕跡になり得る焼土や炭化物もまったくみられない。よって竪穴住居状遺構とした。

また、出土遺物もまったくみられず時期不明である。



第 39 図 RE066 竪穴住居状遺構

RE067 竪穴住居状遺構 (第 40 図、写真図版 35)

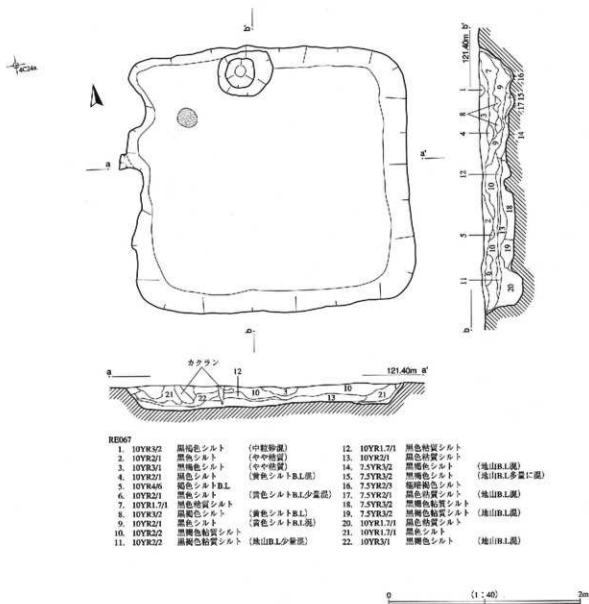
区南端に位置する。竪穴住居状遺構北西隅が区画点 2I18y に近接する。検出面は第 I 層直下、標高 122.500m を測る。この検出面は、削平が著しい面であった。平面形は、ほぼ方形を呈する。規模は南北 3.44m、東西長 3.56m、深さ 23.8cm を測る。

埋土は概ね上・下 2 層のシルトからなる。上層は火山灰を含むシルト層で、下層は層厚 10cm もないシルトである。この下層のシルトは地山に色調が類似するが、明らかに地山よりも締まりがないものであったため、地山とは区分した。側壁は概ね良好に残存している。

床面には貼床は認められず、他の住居ほど締まりや硬化がみられなかった。

カマド、煙道、煙出しともに存在せず、それら存在の痕跡になり得る焼土や炭化物もまったくみられない。よって、規模および形態からは竪穴住居と大きく隔たりを持つものではないが、カマドが存在しないため竪穴住居状遺構とした。

また、出土遺物もまったくみられなかった。以上の事実より、この遺構が居住用の施設である可能性は極めて低いと考えられる。

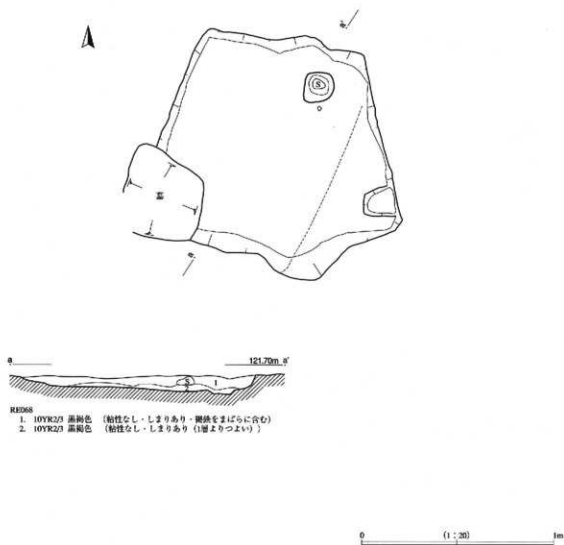


第40図 RE067 竪穴住居状遺構

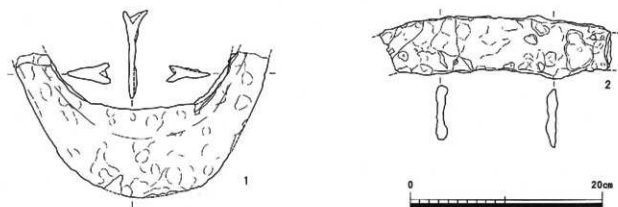
RE068 竪穴住居状遺構 (第41図、写真図版34)

Ⅲ区北西隅に位置する。切り合い関係は現代の墓に攪乱されており、形状と規模は不詳である。

埋土はシルト主体の2層に大別される。埋土中より須恵器の瓦片が1点出土した。出土遺物からのみであるが、平安時代の遺構であると考えられる。



第 41 図 RE068 竪穴住居状遺構



第 42 図 竪穴住居出土鉄製品

4 土 坑

RD1180 土坑 (第 43 図、写真図版)

I A 区に位置する。規模は直径 74cm を測り、平面形は円形を呈する。

埋土は 3 層のシルトからなり、埋土中には多くの炭化物と焼土粒が混入している。

埋土中より土師器片が出土した。この出土遺物より 7 世紀後半～8 世紀の土坑であると考えられるが、性格については不明である。

RD1181 土坑 (第 43 図、写真図版 35)

I 区中央に位置する。他の遺構とは切り合わない。規模、平面形態は 83.2cm の円形である。埋土は暗褐色のシルトに地山のブロックが含まれる。出土遺物はみられず、時期・性格不明である。

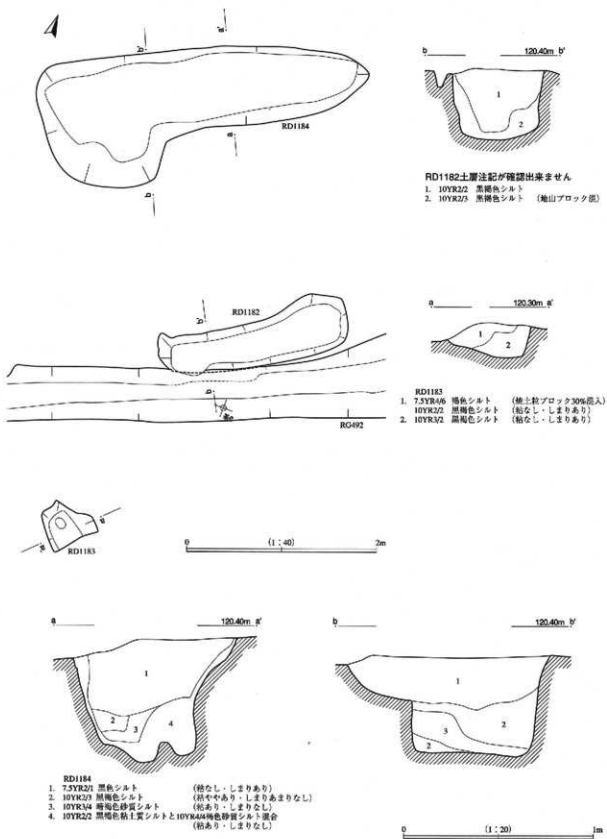
RD1182 土坑 (第 43・44 図、写真図版 35)

II C 区中央よりやや西寄りに位置する。RG224 と切り合い関係が認められる。新旧はこの RD1182 が RG224 にわずかに切られている。規模は長軸 1.2m、短軸 45cm を測り、平面形はやや丸みを帯びた長方形を呈する。

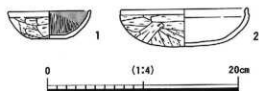
埋土は黒褐色のシルトが堆積しており、ややブロック土の混入が認められる。壁は底面から側壁にかけて緩やかに立ち上がる。

埋土中位から下位にかけて土師器が出土した。出土した土師器に 2 点の関東系土師器坏がある。1 は在地産の関東系土師器であると考えられる。内面はミガキ、黒色処理が施されている点および胎土は在地の土師器の特徴を有するが、外面は不定方向のヘラケズリ、口縁部の断面形態、幅の短いヨコナデは関東産の土師器の特徴を有する。このような 2 面性を鑑み、ここでは在地産関東系土師器とした。2 は北関東に系譜を求められる坏であり、胎土・色調・形態ともにこの地域のものと大きく変わらない。時期は関東では 7 世紀末～8 世紀初頭が考えられており、出土したこの坏に関しても同様の時期のものであると考えられる。

出土遺物より 7 世紀後半～8 世紀の土坑であると考えられる。



第43図 RD1182～1184土坑



第44図 RD1182土坑出土遺物

RD1183 土坑 (写真図版 35)

Ⅱ区中央に位置する。他の遺構とは切り合わない。規模、平面形態は91.5cmの円形である。埋土は暗褐色のシルトの自然堆積である。出土遺物はみられず、時期・性格不明である。

RD1184 土坑 (写真図版 36)

ⅠC区東側に位置する。現代の水路に切られる。規模・形態は東西方向を指向する長方形の土坑である。深さは24.2cmを測る。

埋土はシルトの単層で自然堆積と考えられる。底面は凹凸がみられ、平滑ではない。

RD1187 土坑 (第47図、写真図版 36)

ⅡA区東側に位置する。規模は長軸3.6m、短軸3.2mで、平面形は不整な方形に中央が楕円形を呈する落ち込み部分を有する。竪穴住居並みの規模を有するが、全体的に攪乱が著しく確証がないため土坑として扱ったが、遺物の多さを考えると竪穴住居である可能性も考えられる。

埋土は炭化物、焼土、土器を多く含むシルトの2層に大別される。最上層はRD1186に切られる。

出土遺物は埋土下層を中心に土師器が多く出土した。1～8は土師器坏である。いずれもミガキ、黒色処理が施され、ロクロによる回転力は用いられていない。9～19は甕、壺である。口頸部の残存するものは段を有する。

RD1187は出土遺物より7～8世紀の遺構であると考えられる。

RD1192 土坑 (第49図、写真図版)

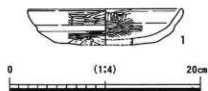
Ⅲ区東端、調査区境に位置する。一部のみを検出のため全体の規模、形状は不明である。検出した規模は、長軸1.2m、短軸76.3mである。さらに、調査区外側には現代の水路が走っており、現況ではこの土坑を検出した面より大きく下がっている。そのため、この土坑は調査区外側ですでに失われているものとみられる。

出土遺物もないため時期は不詳である。

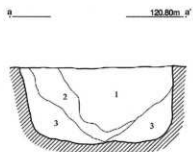
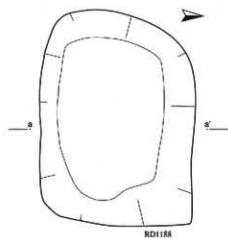
RD1193 土坑 (第49図、写真図版)

Ⅲ区西側に位置する。規模は長軸1m、短軸50cmの不整な楕円形を呈する。埋土はシルトが主体で上下2層堆積している。出土遺物はみられず、時期・性格ともに不明である。

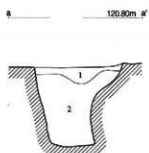
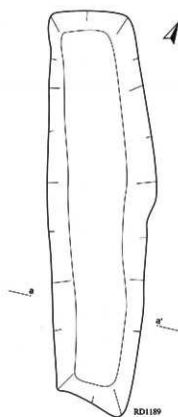
IV 調査の成果



第 45 図 RD1186 土坑出土遺物



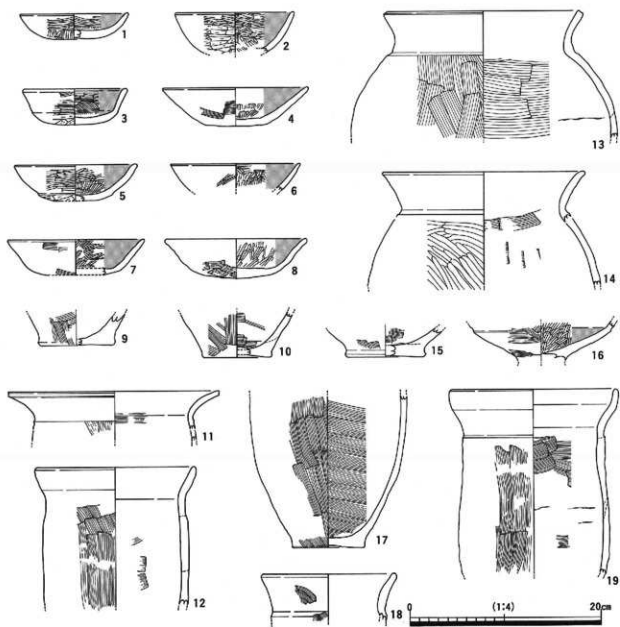
- II B区 RD1188a-a'
1. 10YR2/3 黒褐色砂質シルト主体に10YR5/6黄褐色砂質シルト10%混入 (粘なし・しまりあり)
 2. 10YR2/3 褐色砂質シルト (粘なし・しまりあり)
 3. 10YR2/3 褐色砂質シルト (粘なし・しまりあり・10YR5/6黄褐色砂質シルト20%混入・粘なし・しまりあり)



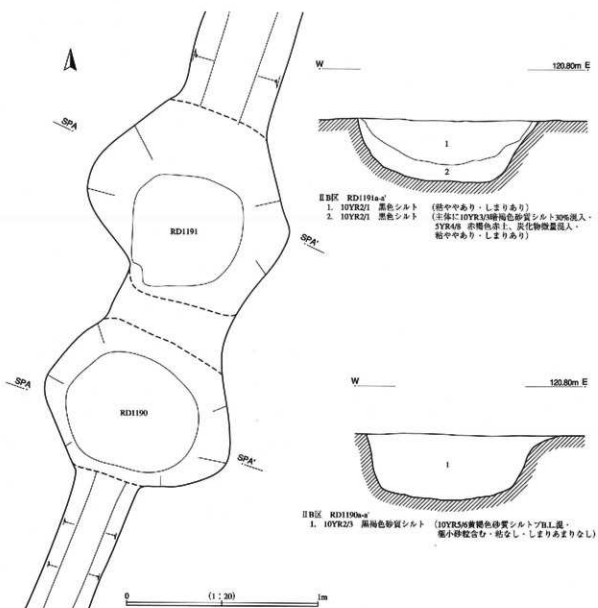
- II B区 RD1189a-a'
1. 10YR2/1 黒色シルト (粘ややあり・しまりあり)
 2. 10YR2/1 黒色シルト主体に10YR3/3暗褐色砂質シルト30%混入 (粘ややあり・しまりあまりなし)

0 (1:20) 1m

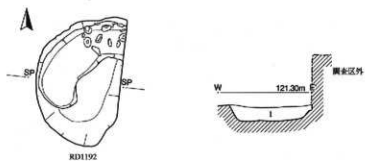
第 46 図 RD1188・1189 土坑



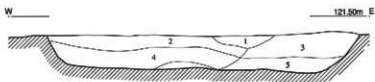
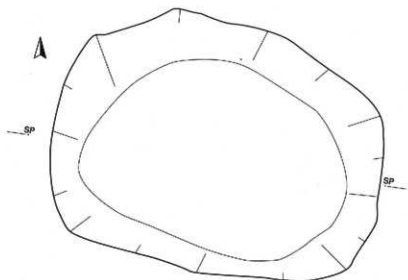
第 47 图 RD1187 土坑出土遗物



第48図 RD1190・1191



RD1192



RD1193

1. 10YR2/1 黒褐色シルト (地山B.L.混)
2. 10YR2/1 黒色シルト (地山B.L.混)
3. 10YR2/1 黒色シルト (礫粒砂混)
4. 10YR2/2 黒褐色シルト (少量の地山B.L.混)
5. 10YR2/1 黒色シルト (地山B.L.多く混)

0 (1:20) 1m

5 溝 跡

RG507 溝跡 (第 50 図、写真図版 38)

I A 区、中央に位置する。幅 71cm、全長 26.3m を測り、南北を指向する。

古代の遺構埋土とは異なり、耕作土によって埋没しているため中世以降の溝であると考えられる。

なお、第 23 次調査区に続いている。

遺物は出土しなかったため時期は不明である。

RG508 溝跡 (第 50 図、写真図版 38)

I A 区を東西に横切る。幅 33cm、長さ 22m を測る。埋土は単層でシルト主体である。時期を特定し得る遺物は出土しなかった。

RG264 堀跡 (写真図版 45)

I B 区および II A 区北端に位置する。I B 区では、幅 3.1m、深さ 1.8m を測る堀である。

埋土は砂質シルト～砂が堆積しているが、ブロック状にシルトも含む。ブロック土の混入が顕著に認められるため人為的な堆積も考えられるが、堆積の様子はごく自然な堆積である。そのため、周囲の人為的な構造物が崩れ流入したと考えられる。しかも、北側からの流入が堆積状況から考えられ、この堀の北側に盛土のような構築物があったと推定される。土塁であったかもしれないが、断定はできない。

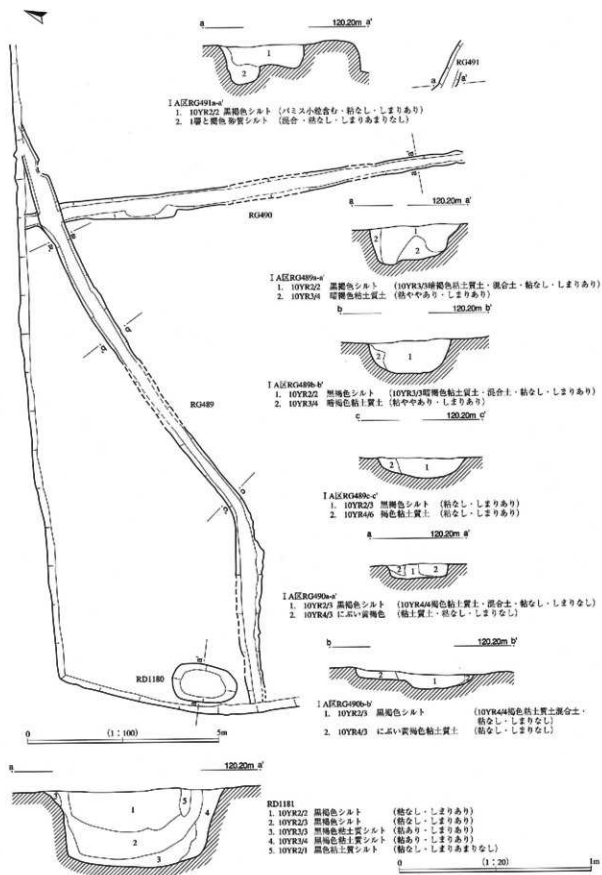
出土遺物は、古代の遺物が埋土上層より、堀底面から陶器片が出土した。13～14 世紀、伊豆沼窪産のものと考えられる。出土遺物、過去の調査成果から 13～14 世紀の堀であると考えられる。

RG510 溝跡 (写真図版 40)

I C 区中央を東西に横切る。幅 42.5cm 長さ 17.3m を測る。埋土は上下 2 層のシルトであるが、時期を特定し得る遺物は出土しなかった。

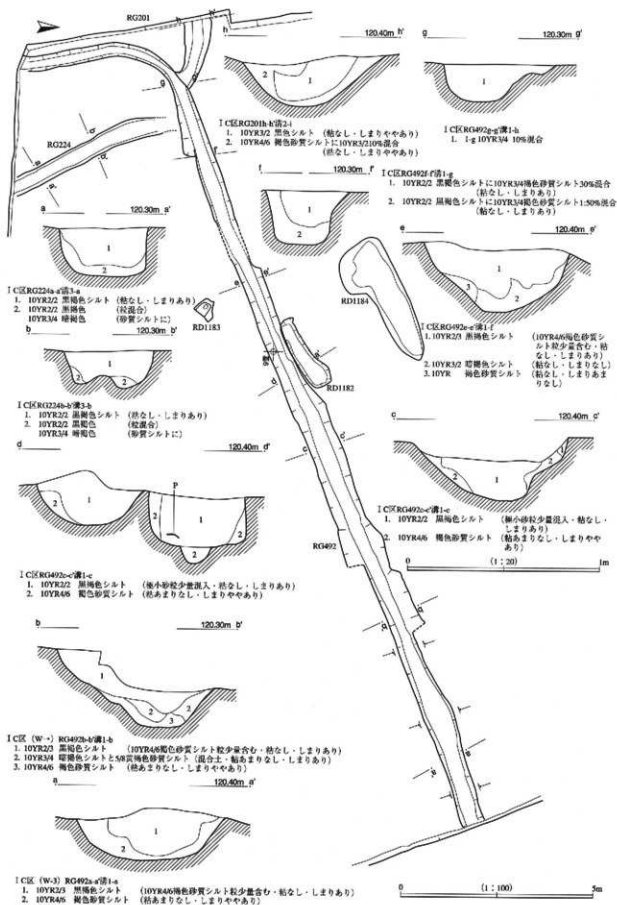
RG511 溝跡 (写真図版 41)

I D 区北側に位置し、53 次調査区にも及ぶ。幅 56.3cm、長さ 7.4m、深さ 15.5cm を測る。埋土は単層のシルトであり、時期を特定し得る遺物は出土しなかった。



第50図 RG507～509, RD1181 溝

IV 調査の成果



第51図 RG201・224・492 溝

RG512 溝跡 (第 54 図、写真図版 42)

I A 区中央を南北に横切る。幅 33.3cm 長さ 4.2m を測る。埋土は上下 2 層のシルトであるが、時期を特定し得る遺物は出土しなかった。

RG513 溝跡 (第 54 図、写真図版 43)

II B 区中央を東西に横切る。RG514 と直交し、これを切る。幅 22.4cm 長さ 5.5m を測る。埋土は上下 2 層のシルトであるが、時期を特定し得る遺物は出土しなかった。

RG514 溝跡 (第 54 図、写真図版 43)

II B 区中央を南北に横切る。RG513 と直交し、これに切られる。幅 33.3cm 長さ 4.2m を測る。埋土は単層のシルトであるが、時期を特定し得る遺物は出土しなかった。

RG515 溝跡 (第 53 図、写真図版 43)

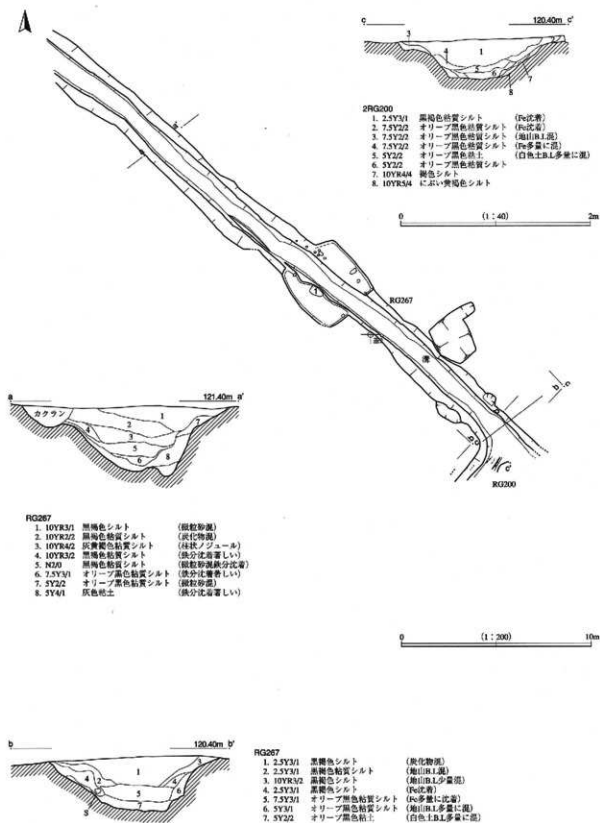
II B 区中央を南北に横切る。幅 42.9cm 長さ 18.8m、深さは 27.6cm を測る。断面形状は箱形を呈する。埋土は上下 2 層のシルトであるが、時期を特定し得る遺物は出土しなかった。

RG516 溝跡 (写真図版 44)

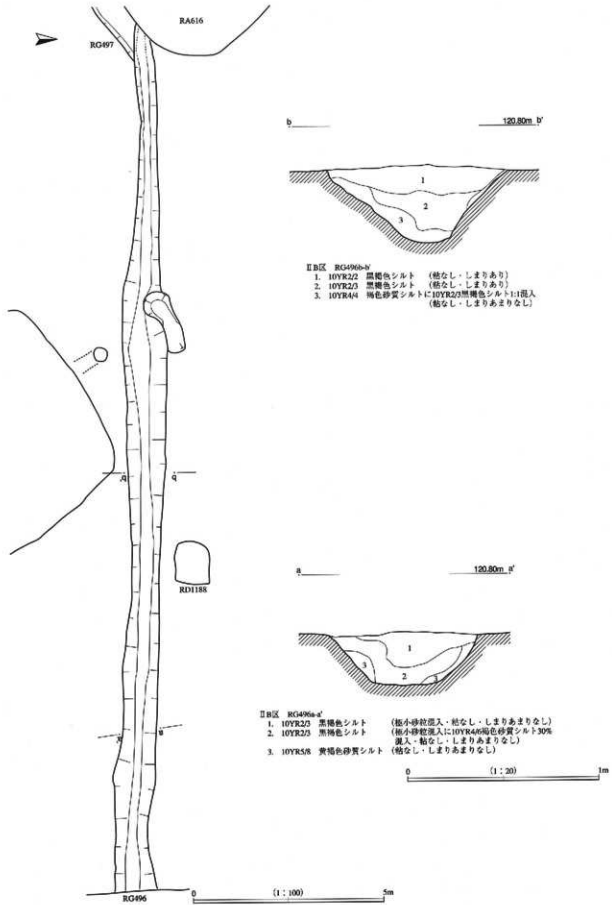
II B 区中央を南北に横切る。RA616 をわずかに切る。幅 32.8cm 長さ 22.8m、深さは 30.2cm を測る。埋土は上下 2 層のシルトであるが、時期を特定し得る遺物は出土しなかったが、奈良時代以降のものである。

RG517 溝跡 (第 55 図、写真図版 44)

III 区東端に位置する。幅 33.3cm 長さ 16.8m、深さは 19.6cm を測る。埋土は上下 2 層のシルトであるが、時期を特定し得る遺物は出土しなかった。

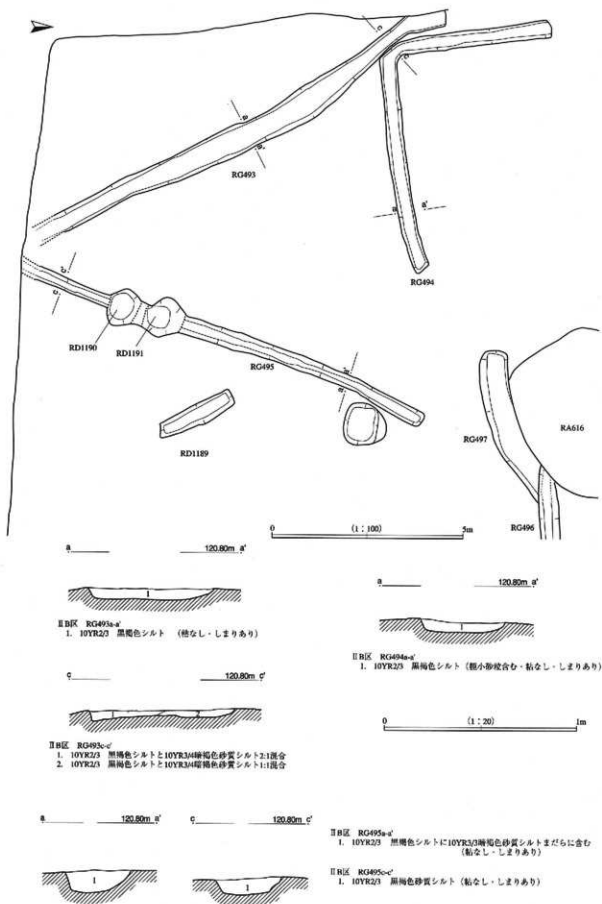


第52図 RG267・200溝

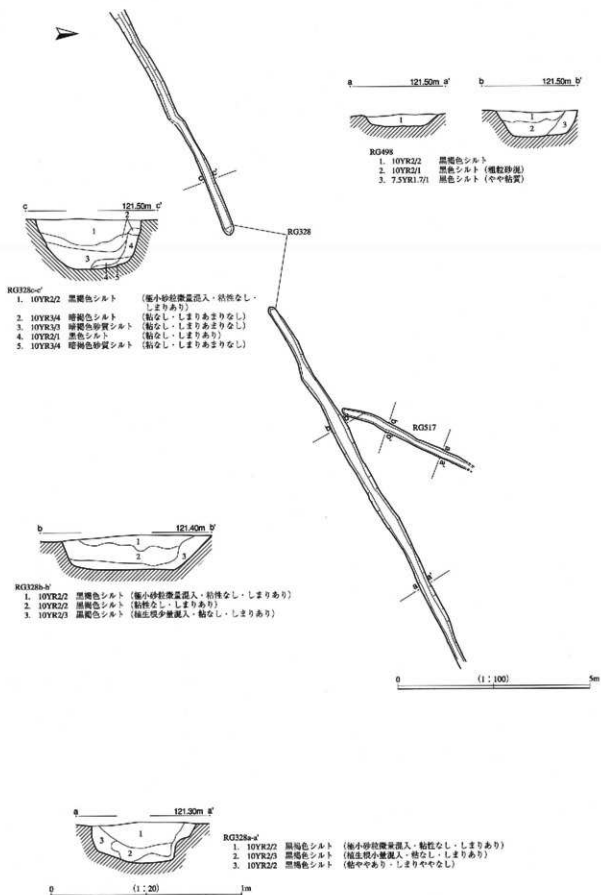


第 53 図 RG515 溝

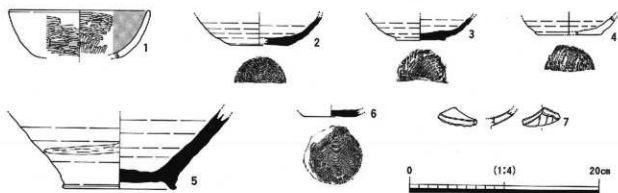
IV 調査の成果



第54図 RG512～514



第55図 RG328・517溝



第56図 溝出土遺物

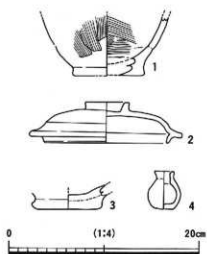
6 遺構外出土遺物

今回の調査で出土した遺物のうち遺構以外(第57図、写真図版)より出土したものをまとめて報告する。1は土師器甕である。Ⅲ区の表土より出土した。形態より飛鳥～奈良時代のものであると考えられる。

2は陶器蓋である。ⅡA区中央の機械掘削中に攪乱より出土した。形態は古代の須恵器坏蓋に似ているが、粗い胎土、内面にまでみられる釉などから、近現代の陶器であると考えられる。

3は土師器壺である。底部のみ残存している。

4は1C区表土直下で出土した。ミニチュア土器である。胎土は古代の土器に近いが時期不明である。



第57図 遺構外出土遺物

表1 検出遺構一覧

	RA	旧名	RE	旧名	RD	旧名	RG	旧名	最新名
I A 区					1181		489		507
							490		508
							491		509
I B 区							264		
I C 区	244				1182		201		
					1183		224		
					1184		492		510
I D 区 (第 53 次)					1185		489		503
							499		504
							500		505
							501		506
I E 区	604						200		
							267		
							345		
							503		511
II A 区	614				1186		264		
					1187				
					1188				
II B 区	615	RA617			1189		493		512
	616				1190		494		513
					1191		495		514
							496		515
						497		516	
III 区	605		065	RA612	1192		328		
	606		066	RA065	1193		498		517
	607		097	RA611					
	608		068	RE050					
	609								
	610								
	611	RA613							
	612	RA614							
	欠 613								

表2 掘載遺物一覽 (土器)

図	12	1	遺構	RA604				口径	12.0	調整	内	ヘラケズリ「下半」	外	10YR7/4 にぶい黄褐色
写真	46	1	位置			法量	底径	4.5		調整	外	ミガキ	色調	内 10YR2/1 黒色
種別	土師器	層位	床面直上			器高	4.1			胎	土	やや粗 (石英、雲母)	断	10YR5/1 褐灰色
器種	坏	焼成	良好			器厚	0.6						時	期 7世紀中葉～7世紀後葉
残存	60	%	黒斑	有り		備考								
図	12	3	遺構	RA604			口径	15.9	調整	内	ハケ「上半」	外	10YR7/4 にぶい黄褐色	
写真	46	2	位置			法量	底径	—		調整	外	ミガキ	色調	内 10YR2/1 黒色
種別	土師器	層位	床面直上			器高	5.45			胎	土	精良 (雲母)	断	10YR5/1 褐灰色
器種	坏	焼成	良好			器厚	0.95						時	期 7世紀中葉～7世紀後葉
残存	65	%	黒斑	底部椎状		備考								
図	12	2	遺構	RA604			口径	13.2	調整	内	ハケ「上半」ヘラケズリ	外	10YR7/3 にぶい黄褐色	
写真	46	3	位置	西平		法量	底径	4.4		調整	外	ミガキ	色調	内 10YR2/1 黒色
種別	土師器	層位	床面直上			器高	4.6			胎	土	やや粗 (白色砂、雲母)	断	10YR5/1 褐灰色
器種	坏	焼成	良好			器厚	0.7						時	期 7世紀中葉～7世紀後葉
残存	70	%	黒斑	底部		備考								
図	12	5	遺構	RA604			口径	(23.2)	調整	内	ハケ (タテ)	外	7.5YR5/4 にぶい褐色	
写真	46	4	位置	西平		法量	底径	—		調整	外	ハケ (ヨコ)	色調	内 7.5YR5/3 にぶい褐色
種別	土師器	層位	埴土			器高	13.7			胎	土	精良 (雲母少量)	断	7.5YR6/2 灰褐色
器種	甕	焼成	良好			器厚	0.6						時	期 7世紀中葉～7世紀後葉
残存	20	%	黒斑	有り		備考								
図	12	4	遺構	RA604			口径	—	調整	内	ハケ (タテ)	外	5YR5/4 にぶい赤褐色	
写真	46	5	位置	西平		法量	底径	(7.1)		調整	外	ハケ (ヨコ)	色調	内 10YR2/1 黒色
種別	土師器	層位	埴土			器高	(9.7)			胎	土	精良 (雲母、白色砂)	断	10YR5/2 灰褐色
器種	甕	焼成	非常に良好			器厚	0.6						時	期 7世紀中葉～7世紀後葉
残存	10	%	黒斑	有り		備考								
図	12	6	遺構	RA604			口径	—	調整	内	細かいハケ (タテ)	外	5YR5/6 明赤褐色	
写真	46	6	位置	カマド芯材		法量	底径	4.1		調整	外	ハケ (ヨコ)	色調	内 10YR5/4 にぶい赤褐色
種別	土師器	層位				器高	(34.5)			胎	土	精良 (白色砂、雲母)	断	5YR6/3 にぶい褐色
器種	甕	焼成	非常に良好			器厚	0.9						時	期 7世紀中葉～7世紀後葉
残存	40	%	黒斑	有り		備考								
図	12	8	遺構	RA604			口径	25.9	調整	内	ハケ (タテ・ヨコ)	外	7.5YR7/3 にぶい褐色	
写真	46	7	位置	カマド、煙道		法量	底径	7.4		調整	外	ハケ (ヨコ)	色調	内 7.5YR7/3 にぶい褐色
種別	土師器	層位	芯材			器高	33.3			胎	土	精良 (雲母少量)	断	7.5YR7/2 明褐色
器種	甕	焼成	良好			器厚	0.8						時	期 7世紀中葉～7世紀後葉
残存	65	%	黒斑	有り		備考								
図	12	7	遺構	RA604			口径	(23.8)	調整	内	タテキ、ハケ (タテ・ヨコ)	外	10YR6/3 にぶい黄褐色	
写真	46	8	位置	西平		法量	底径	8.0		調整	外	ハケ (ヨコ)	色調	内 10YR6/2 灰黄褐色
種別	土師器	層位	床面直上			器高	48.7			胎	土	精良 (雲母、白色砂、スクリヤ)	断	10YR6/1 褐灰色
器種	甕	焼成	良好			器厚	0.9						時	期 7世紀中葉～7世紀後葉
残存	60	%	黒斑	有り		備考								
図	15	1	遺構	RA615			口径	9.5	調整	外	ハケ (不定)	外	5YR5/6 明赤褐色	
写真	47	9	位置	北東隅		法量	底径	4.0		調整	内	ミガキ	色調	内 5YR5/6 明赤褐色
種別	土師器	層位	床面直上			器高	3.5			胎	土	精良 (白色砂、雲母、石英)	断	—
器種	坏	焼成	良好			器厚	~0.9						時	期 7世紀末～8世紀初頭
残存	100	%	黒斑	多数		備考								

図	15	4	遺構	RA615		口径(14.6)	調整	外	ハケ(不定)		外	10YR5/3 にぶい黄褐色	
写真	47	10	位置	北東隅	法量	底径(5.1)		内	ミガキ		色調	内	10YR5/1 褐灰色
種別	土師器	層位	床面直上	器高		3.65	胎	土	精良(雲母多い)		断面	10YR5/1 褐灰色	
器種	坏	焼成	良好	器厚		0.7					時期	7世紀末～8世紀初頭	
残存	55	%	黒斑	有		備考	沈線状の段らしきもの1条						

図	15	2	遺構	RA615		口径	調整	外	ハラケズリ?「下半」		外	10YR6/3 にぶい黄褐色	
写真	47	11	位置	北東隅	法量	底径	7.6	内	ミガキ		色調	内	10YR4/1 褐灰色
種別	土師器	層位	貼床	器高(3.1)			胎	土	やや粗(雲母ほか多量)		断面	N4/1 灰色	
器種	坏	焼成	やや不良	器厚		0.6					時期	7世紀後半～8世紀初頭	
残存	65	%	黒斑	底部		備考	底著しい						

図	15	8	遺構	RA615		口径(18.2)	調整	外	ミガキ(ヨコ・不定)		外	10YR5/3 にぶい黄褐色	
写真	47	12	位置	北東隅	法量	底径	—	内	ミガキ(放射状)		色調	内	10YR2/1 黒色
種別	土師器	層位	貼床	器高(4.8)			胎	土	精良(白色砂、雲母)		断面	10YR3/1 黒褐色	
器種	坏	焼成	良好	器厚		0.65					時期	7世紀後半～8世紀初頭	
残存	40	%	黒斑	有		備考	底部にヘラ記号「+」						

図	15	3	遺構	RA615		口径(10.3)	調整	外	ヨコナデ		外	10YR6/4 にぶい黄褐色	
写真	47	13	位置	貼床、北東隅、北東壁上	法量	底径(8.0)		内	?		色調	内	10YR4/1 褐灰色
種別	土師器	層位	北東壁上	器高		1.7	胎	土	精良(白色砂、雲母、石英)		断面	N4/1 灰色	
器種	坏	焼成	良好	器厚		0.4					時期		
残存	65	%	黒斑	底部		備考							

図	15	5	遺構	RA615		口径	調整	外	ハケ「下半」(不定)		外	10YR7/4 にぶい黄褐色	
写真	47	14	位置	北西	法量	底径	5.2	内	ミガキ		色調	内	7.5YR5/6 明褐色
種別	土師器	層位	埋土下層	器高		4.5	胎	土	精良(白色砂、雲母)		断面	7.5YR5/6 明褐色	
器種	坏	焼成	良好	器厚		0.65					時期	7世紀後半～8世紀前半	
残存		%	黒斑	底部		備考	内黒?						

図	15	6	遺構	RA615		口径(7.0)	調整	外	不明		外	7.5YR7/6 褐色	
写真	47	15	位置	北西	法量	底径	—	内	ミガキ		色調	内	10YR4/1 褐灰色
種別	土師器	層位	埋土上層	器高(3.8)			胎	土	精良(雲母)		断面	10YR6/1 褐灰色	
器種	坏	焼成	良好	器厚		0.5					時期	7世紀後半～8世紀初頭	
残存	20	%	黒斑			備考	底著しい						

図	15	7	遺構	RA615		口径(13.6)	調整	外	ハラケズリ「下半」		外	7.5YR7/3 にぶい褐色	
写真	47	16	位置	西北	法量	底径	—	内	ミガキ		色調	内	7.5YR7/4 にぶい褐色
種別	土師器	層位	埋土上層	器高(2.9)			胎	土	精良(白色砂、雲母)		断面	7.5YR7/3 にぶい褐色	
器種	坏	焼成	やや不良	器厚		0.7					時期	7世紀末～8世紀初頭	
残存	20	%	黒斑			備考	底著しい						

図	15	12	遺構	RA615		口径	調整	外	ハケ(不定)		外	5YR5/8 明赤褐色	
写真	47	17	位置	北西	法量	底径	—	内	ミガキ		色調	内	5YR5/8 明赤褐色
種別	土師器	層位	埋土上層	器高		7.45	胎	土	精良(白色砂、雲母)		断面	5YR5/4 にぶい赤褐色	
器種	钵	焼成	非常に良好	器厚		0.75					時期		
残存	85	%	黒斑	底部		備考							

図	16	28	遺構	RA615		口径	調整	外	ハケ(タテ)?		外	7.5YR6/6 褐色	
写真	48	18	位置	押道	法量	底径	7.9	内			色調	内	7.5YR4/2 灰褐色
種別	土師器	層位	埋土	器高(2.1)			胎	土	精良(雲母、白色砂)		断面	7.5YR6/6 褐色	
器種	甕	焼成	良好	器厚		—					時期		
残存	15	%	黒斑			備考							

図	16	29	遺構	RA615		口径	調整	外	不明		外	10YR6/4 にぶい黄褐色	
写真	48	19	位置	北西	法量	底径	8.1	内	ハケ(ヨコ)?		色調	内	10YR7/4 にぶい黄褐色
種別	土師器	層位	埋土上層	器高(2.7)			胎	土	精良(白色砂、雲母)		断面	10YR7/4 にぶい黄褐色	
器種	甕	焼成	良好	器厚		0.7					時期	7世紀後半～8世紀初頭	
残存	15	%	黒斑			備考							

IV 調査の結果

図	16	24	遺構	RA615		口径	-	調整	外	不明		外	10YR5/3 に近い黄褐色	
写真	48	20	位置	東ベルト	法量	底径	8.0	胎	内	ハケ (ヨコ)	土	色調	内	10YR5/4 に近い黄褐色
種別	十師器	層位	下層	器高		(3.2)	胎		土	精良 (白色砂、雲母)		時期	断	10YR6/4 に近い黄褐色
器種	壺	焼成	良好	器厚		0.6								
残存	10	%	黒斑	備考		底部本葉痕								
図	16	25	遺構	RA615		口径	-	調整	外	ハケズリ (タテ)		外	5YR6/6 褐色	
写真	48	21	位置	南東	法量	底径	6.8	胎	内	ハケ (ヨコ)	土	色調	内	5YR5/1 褐灰色
種別	土師器	層位	床面直上	器高		(4.5)	胎		土	精良 (白色砂、雲母)		時期	断	10YR2/1 黒色
器種	壺	焼成	良好	器厚		0.7								
残存	30	%	黒斑	備考		内面コケ								
図	16	23	遺構	RA615		口径	-	調整	外	ハケ (タテ)		外	5YR5/6 明赤褐色	
写真	48	22	位置	北東	法量	底径	7.4	胎	内	ハケ (ヨコ)	土	色調	内	5YR5/6 明赤褐色
種別	土師器	層位	床面直上	器高		(7.4)	胎		土	精良 (白色砂、雲母)		時期	断	5YR6/4 に近い褐色
器種	壺	焼成	良好	器厚		0.9								
残存	25	%	黒斑	備考										
図	16	26	遺構	RA615		口径	-	調整	外	ハケ (タテ)		外	7.5YR8/4 浅黄褐色	
写真	48	23	位置	東側十坑	法量	底径	7.4	胎	内	ハケ? (ヨコ)	土	色調	内	7.5YR8/4 浅黄褐色
種別	十師器	層位		器高		(6.9)	胎		土	精良 (白色砂、雲母)		時期	断	7.5YR8/4 浅黄褐色
器種	壺	焼成	不良	器厚		0.8								
残存	30	%	黒斑	備考										
図	15	11	遺構	RA615		口径	(9.8)	調整	外	ハケ (タテ)		外	7.5YR6/4 に近い棕色	
写真	48	24	位置	市東	法量	底径	6.0	胎	内	ハケ (ヨコ)	土	色調	内	7.5YR6/4 に近い棕色
種別	土師器	層位	埋土下層	器高		10.2	胎		土	精良 (白色砂、雲母)		時期	断	7.5YR4/1 褐灰色
器種	甕?	焼成	良好	器厚		0.9								
残存	60	%	黒斑	備考		小形粗製品								
図	16	21	遺構	RA615		口径	-	調整	外	ハケ (タテ)		外	10YR6/4 に近い黄褐色	
写真	48	25	位置	床西、北東隅	法量	底径	6.8	胎	内	ハケ (ヨコ)	土	色調	内	10YR6/4 に近い黄褐色
種別	土師器	層位		器高		(3.6)	胎		土	精良 (雲母多い)		時期	断	10YR4/1 褐灰色
器種	壺	焼成	良好	器厚		0.6								
残存	25	%	黒斑	備考		底部本葉痕ナテ消し								
図	16	22	遺構	RA615		口径	-	調整	外	ハケ (タテ)		外	7.5YR6/6 褐色	
写真	48	26	位置	中央	法量	底径	(8.2)	胎	内	不明	土	色調	内	5YR5/6 明赤褐色
種別	土師器	層位	床面直上	器高		(4.6)	胎		土	精良 (白色砂、雲母)		時期	断	7.5YR5/4 に近い褐色
器種	壺	焼成	良好	器厚		0.9								
残存	10	%	黒斑	備考										
図	16	27	遺構	RA615		口径	-	調整	外	不明		外	10YR6/3 に近い黄褐色	
写真	48	27	位置	西ベルト	法量	底径	(7.9)	胎	内	不明	土	色調	内	10YR6/4 に近い黄褐色
種別	土師器	層位	下層	器高		(1.6)	胎		土	精良 (白色砂、雲母)		時期	断	10YR5/1 褐灰色
器種	壺	焼成	良好	器厚		0.8								
残存	10	%	黒斑	備考										
図	15	17	遺構	RA615		口径	24.0	調整	外	ハケ (タテ)		外	7.5YR5/4 に近い褐色	
写真	49	28	位置	北東	法量	底径	-	胎	内	ハケ (ヨコ)	土	色調	内	7.5YR4/4 褐色
種別	土師器	層位	床面直上	器高		(13.5)	胎		土	精良 (白色砂、雲母)		時期	断	7.5YR4/2 灰褐色
器種	壺	焼成	良好	器厚		0.7								
残存	30	%	黒斑	備考										
図	16	31	遺構	RA615		口径	(17.6)	調整	外	ハケ (タテ)		外	7.5YR6/4 に近い褐色	
写真	49	29	位置	南西屋上下層、南壁上	法量	底径	-	胎	内	ハケ (ヨコ)	土	色調	内	7.5YR6/4 に近い褐色
種別	土師器	層位		器高		(16.8)	胎		土	やや粗 (雲母多い)		時期	断	7.5YR4/1 褐灰色
器種	壺	焼成	やや不良	器厚		0.7								
残存	30	%	黒斑	備考		外面スス、内面コケ付着								

図 15	9	遺構 RA615		口径	—	調整	外	ハケ (タテ基調)	外	7.5YR6/4 にぶい橙色	
写真 49	30	位置	南ベルト上層, 南東隅	法量	底径	8.4	調整	内	ハケ? (ヨコ)	色調	7.5YR8/4 浅黄褐色
種別	土師器	層位	土上層, 西内層上下層		器高	(12.4)		胎	土	断面	7.5YR8/4 浅黄褐色
器種	甕	焼成	良好		器厚	0.6				時期	
残存	30	%	黒斑	備考	体部下平~底部						
図 15	14	遺構 RA615		口径	(20.1)	調整	外	ハケ (タテ)	外	7.5YR6/4 にぶい橙色	
写真 50	31	位置	北東	法量	底径	—	調整	内	ハケ (ヨコ)	色調	7.5YR5/4 にぶい褐色
種別	土師器	層位	埋土上層		器高	(13.0)		胎	土	断面	7.5YR7/4 にぶい橙色
器種	甕	焼成	良好		器厚	0.5				時期	
残存	20	%	黒斑	備考	コゲ付着 (内面)						
図 15	13	遺構 RA615		口径	(15.6)	調整	外	ハケ (タテ)	外	7.5YR6/4 にぶい橙色	
写真 50	32	位置	北東隅	法量	底径	—	調整	内	ハケ (ヨコ)	色調	7.5YR7/4 にぶい橙色
種別	土師器	層位	貼床		器高	(8.8)		胎	土	断面	7.5YR6/4 にぶい橙色
器種	甕	焼成	やや不良		器厚	0.85				時期	
残存	20	%	黒斑	備考	内面コゲ付着						
図 15	10	遺構 RA615		口径	(18.1)	調整	外	ハケ (不定)	外	7.5YR7/4 にぶい橙色	
写真 50	33	位置	北東	法量	底径	—	調整	内	ハケ (ヨコ)	色調	5YR6/6 橙色
種別	土師器	層位	床面直上		器高	(16.1)		胎	土	断面	5YR7/3 にぶい橙色
器種	甕	焼成	非常に良好		器厚	0.55				時期	
残存	70	%	黒斑	備考							
図 15	19	遺構 RA615		口径	(20.7)	調整	外	ハケ (タテ)	外	10YR5/3 にぶい黄褐色	
写真 50	34	位置	床直北東隅, 東袖	法量	底径	7.0	調整	内	ハケ (ヨコ)	色調	10YR6/4 にぶい黄褐色
種別	土師器	層位	カマド崩落土		器高	33.5		胎	土	断面	10YR7/3 にぶい黄褐色
器種	甕	焼成	良好		器厚	0.55				時期	7世紀末~8世紀初頭
残存	55	%	黒斑	備考	外面スス、内面コゲ付着						
図 15	20	遺構 RA615		口径	18.1	調整	外	ハケ (タテ)	外	7.5YR8/4 浅黄褐色	
写真 50	35	位置	北ベルト下層	法量	底径	—	調整	内	ハケ (ヨコ)	色調	7.5YR5/4 にぶい褐色
種別	土師器	層位	北東埋土上層		器高	(31.5)		胎	土	断面	7.5YR8/4 浅黄褐色
器種	甕	焼成	やや不良		器厚	0.6				時期	7世紀末~8世紀初頭
残存	85	%	黒斑	備考	体部下平						
図 15	18	遺構 RA615		口径	(22.0)	調整	外	ハケ (タテ)	外	5YR5/6 明赤褐色	
写真 51	36	位置	北東	法量	底径	—	調整	内	ハケ (ヨコ)	色調	7.5YR5/4 にぶい褐色
種別	土師器	層位	床面直上		器高	(24.2)		胎	土	断面	7.5YR5/4 にぶい褐色
器種	甕	焼成	良好		器厚	0.6				時期	
残存	35	%	黒斑	備考							
図 15	16	遺構 RA615		口径	(17.0)	調整	外	ハケ (タテ基調)	外	5YR5/6 明赤褐色	
写真 51	37	位置	龍興寺遺構, 南ベルト上層	法量	底径	—	調整	内	ハケ (ヨコ)	色調	5YR4/6 赤褐色
種別	土師器	層位	埋土上層, 北ベルト上層		器高	(27.9)		胎	土	断面	10YR6/3 にぶい黄褐色
器種	甕	焼成	良好		器厚	0.5				時期	
残存	40	%	黒斑	備考	外面スス、内面コゲ付着						
図 15	15	遺構 RA615		口径	(20.0)	調整	外	ハケ (タテ)	外	10YR7/3 にぶい黄褐色	
写真 51	38	位置	中央北寄	法量	底径	—	調整	内	ハケ (ヨコ)	色調	10YR5/2 灰黄褐色
種別	土師器	層位	床直		器高	(27.2)		胎	土	断面	10YR5/2 灰黄褐色
器種	甕	焼成	良好		器厚	0.5				時期	7世紀末~8世紀初頭
残存	40	%	黒斑	備考	外面スス、内面コゲ付着、RA616の23と接合						
図 16	30	遺構 RA615		口径	17.8	調整	外	ハケ (タテ)	外	10YR7/4 にぶい黄褐色	
写真 51	39	位置	床直北東隅、南	法量	底径	—	調整	内	ハケ (ヨコ)	色調	10YR5/4 にぶい黄褐色
種別	土師器	層位	北朝土上層		器高	(16.4)		胎	土	断面	10YR5/1 褐灰色
器種	甕	焼成	良好		器厚	0.75				時期	
残存	60	%	黒斑	備考	外面円形、棒状						

IV 調査の結果

図	20	4	遺構	RA616	法量	口径	(15.5)	調整	外	ハケ(不定)「下字」	色調	外	10YR7/3 ぶい黄褐色
写真	52	40	位置	南西		底径	(5.5)	調整	内	ミガキ		内	10YR5/1 楊灰色
種別	土師器	層位	Ⅱ上	器高		(5.6)	胎	土	精良(石英、雲母)	断		10YR6/1 楊灰色	
器種	杯	焼成	良好	器厚		0.5				時		期	
残存	40	%	黒斑	底部		備考	段なし						
図	20	3	遺構	RA616	法量	口径	15.4	調整	外	ヘラケズリ(不定)	色調	外	7.5YR6/4 ぶい橙色
写真	52	41	位置	北東理土上層、東東理土最下層		底径	-	調整	内	ミガキ		内	10YR2/1 黒色
種別	土師器	層位	Ⅱ上	器高		5.5	胎	土	精良(白色砂、雲母)	断		10YR4/1 楊灰色	
器種	杯	焼成	良好	器厚		0.6				時		期	
残存	80	%	黒斑	底部		備考							
図	20	6	遺構	RA616	法量	口径	(4.15)	調整	外	ハケ(不定)	色調	外	10YR6/6 橙色
写真	52	42	位置	北西理土上層、南西理土上層		底径	5.1	調整	内	ミガキ		内	7.5YR3/1 黒褐色
種別	土師器	層位	Ⅱ上	器高		5.3	胎	土	精良(白色砂、雲母)	断		10YR5/1 楊灰色	
器種	杯	焼成	良好	器厚		0.6				時		期	
残存	70	%	黒斑	底部		備考	段なし						
図	20	5	遺構	RA616	法量	口径	17.5	調整	外	ミガキ?	色調	外	10YR6/4 ぶい黄褐色
写真	52	43	位置	カマド袖		底径	4.5	調整	内	ミガキ?		内	7.5YR7/6 橙色
種別	土師器	層位	Ⅱ上	器高		5.0	胎	土	精良(石英、長石、白色砂)	断		7.5YR7/6 橙色	
器種	杯	焼成	やや不良	器厚		0.4				時		期	
残存	90	%	黒斑	底部		備考	底部にヘラ記号「+」						
図	20	8	遺構	RA616	法量	口径	(15.6)	調整	外	ハケ(不定)「下字」	色調	外	10YR6/4 ぶい黄褐色
写真	52	44	位置	南ベルト		底径	4.2	調整	内	ミガキ		内	10YR5/2 灰黄褐色
種別	土師器	層位	Ⅱ上	器高		5.0	胎	土	精良(白色砂、雲母)	断		10YR6/1 楊灰色	
器種	杯	焼成	良好	器厚		0.6				時		期	
残存	30	%	黒斑	底部		備考							
図	20	9	遺構	RA616	法量	口径	(17.6)	調整	外	ハケ(不定)	色調	外	10YR6/4 ぶい黄褐色
写真	52	45	位置	床面直上B		底径	(5.0)	調整	内	ミガキ?		内	10YR4/1 楊灰色
種別	土師器	層位	Ⅱ上	器高		5.7	胎	土	精良(白色砂)	断		2.5Y4/1 黄灰色	
器種	杯	焼成	やや不良	器厚		0.5				時		期	
残存	45	%	黒斑	底部		備考							
図	20	17	遺構	RA616	法量	口径	-	調整	外	不明	色調	外	10YR5/3 ぶい黄褐色
写真	52	45	位置	床面直上E		底径	8.1	調整	内	不明		内	7.5YR6/4 ぶい橙色
種別	土師器	層位	Ⅱ上	器高		(2.4)	胎	土	精良(白色砂、雲母)	断		10YR4/1 楊灰色	
器種	壺	焼成	良好	器厚		1.0				時		期	
残存	10	%	黒斑			備考							
図	20	11	遺構	RA616	法量	口径	15.9	調整	外	ヘラケズリ	色調	外	10YR6/2 灰黄褐色
写真	52	46	位置			底径	12.5	調整	内	ミガキ		内	10YR4/1 楊灰色
種別	土師器	層位	Ⅱ上	器高		2.9	胎	土	精良(雲母多い)	断		10YR5/2 灰黄褐色	
器種	杯	焼成	良好	器厚		0.55				時		期	
残存	80	%	黒斑	底部		備考							
図	20	7	遺構	RA616	法量	口径	16.2	調整	外	ハケ(不定)	色調	外	10YR5/4 ぶい黄褐色
写真	52	47	位置	南東		底径	5.0	調整	内	ミガキ		内	N2/0 黒色
種別	土師器	層位	Ⅱ上	器高		5.0	胎	土	精良(白色砂、石英)	断		10YR5/4 ぶい黄褐色	
器種	杯	焼成	良好	器厚		0.8				時		期	
残存	60	%	黒斑	底部		備考	段なし						
図	20	12	遺構	RA616	法量	口径	13.9	調整	外	ミガキ	色調	外	5YR6/6 橙色
写真	52	48	位置	北東理土上層、床面直上E		底径	9.0	調整	内	ミガキ?		内	10YR3/1 黒褐色
種別	土師器	層位	Ⅱ上	器高		10.3	胎	土	精良(白色砂)	断		10YR5/1 楊灰色	
器種	高杯	焼成	良好	器厚		0.7				時		期	
残存	75	%	黒斑			備考							

図	20	10	遺構	RA616		口径	(19.0)	調整	外	ハケ(不定)	色調	外	7.5YR5/4 にぶい褐色
写真	52	49	位置	南西	法量	底径	-		内	ミガキ	色調	内	10YR3/1 黒褐色
種別	土師器	層位	埋土上層			器高	5.3	胎	土	精良(雲母多い)	断面	断	10YR6/4 にぶい黄褐色
器種	坏	焼成	良好			器厚	0.6				時期		
残存	50	%	黒斑	底部	備考	段+沈線2条							
図	20	13	遺構	RA616		口径	15.6	調整	外	ハケ(タテ基調)	色調	外	5YR5/6 明赤褐色
写真	53	50	位置	床面直上A	法量	底径	7.2		内	ハケ(ヨコ)	色調	内	5YR5/6 明赤褐色
種別	土師器	層位				器高	18.6	胎	土	精良(白色砂、雲母)	断面	断	
器種	壺	焼成	良好			器厚	1.1				時期		
残存	100	%	黒斑		備考								
図	21	32	遺構	RA616		口径	-	調整	外	ハケ(タテ)	色調	外	7.5YR5/3 にぶい褐色
写真	53	51	位置	南西	法量	底径	(7.7)		内	ハケ(ヨコ)	色調	内	7.5YR6/4 にぶい褐色
種別	土師器	層位	埋土上層			器高	(4.05)	胎	土	精良(白色砂、雲母)	断面	断	7.5YR5/1 褐灰色
器種	壺	焼成	良好			器厚	0.9				時期		
残存	10	%	黒斑		備考								
図	20	21	遺構	RA616		口径	18.4	調整	外	ハケ(タテ)	色調	外	7.5YR6/4 にぶい褐色
写真	53	52	位置	床面直上C・B、南東埋土下層	法量	底径	6.9		内	ハケ(ヨコ)	色調	内	7.5YR6/4 にぶい褐色
種別	土師器	層位	南東埋土下層			器高	22.9	胎	土	精良(雲母)	断面	断	7.5YR4/1 褐灰色
器種	壺	焼成	良好			器厚	0.55				時期		
残存	90	%	黒斑		備考	外面スス、内面コゲ付着							
図	21	37	遺構	RA616		口径	(17.6)	調整	外	ハケ(タテ)	色調	外	7.5YR5/3 にぶい褐色
写真	53	53	位置	南ベルト下層、床面直上D	法量	底径	-		内	ハケ(ヨコ)	色調	内	7.5YR5/2 灰褐色
種別	土師器	層位				器高	(4.65)	胎	土	精良(白色砂)	断面	断	10YR4/1 褐灰色
器種	壺	焼成	良好			器厚	0.75				時期		
残存	40	%	黒斑		備考	外面スス、内面コゲ付着							
図	20	14	遺構	RA616		口径	18.2	調整	外	ハケ(タテ・ヨコ)	色調	外	5YR6/6 褐色
写真	53	54	位置	南東埋土下層、南東埋土上層、南東埋土中層、南東埋土下層、南東埋土上層、南東埋土中層、南東埋土下層	法量	底径	8.2		内	ハケ(ヨコ)	色調	内	5YR6/4 にぶい褐色
種別	土師器	層位	埋土上層			器高	9.1	胎	土	精良(白色砂、雲母1)	断面	断	5Y3/2 灰褐色
器種	壺	焼成	良好			器厚	0.8				時期		
残存	95	%	黒斑	体部下平(接地)	備考								
図	20	15	遺構	RA616		口径	(20.9)	調整	外	ハケ(不定)	色調	外	5YR5/4 にぶい赤褐色
写真	53	55	位置	南東埋土上・下層、床面直上B、床面	法量	底径	8.4		内	ハケ(ヨコ)	色調	内	5YR5/6 明赤褐色
種別	土師器	層位				器高	24.6	胎	土	精良(白色砂、長石、雲母)	断面	断	7.5YR5/4 にぶい褐色
器種	壺	焼成	良好			器厚	0.7				時期		
残存	85	%	黒斑	底部	備考	底部に切痕							
図	21	26	遺構	RA616		口径	(17.8)	調整	外	ハケ(タテ)	色調	外	10YR8/4 浅黄褐色
写真	54	56	位置	南内埋土、南ベルト下、南内埋土上	法量	底径	-		内	ハケ(ヨコ)	色調	内	10YR6/3 にぶい黄褐色
種別	土師器	層位				器高	(11.5)	胎	土	精良(白色砂、雲母)	断面	断	10YR4/1 褐灰色
器種	壺	焼成	良好			器厚	0.9				時期		
残存	30	%	黒斑		備考	外面スス、内面口縁までコゲ付着							
図	21	38	遺構	RA616		口径	-	調整	外	ハケ(タテ)	色調	外	7.5YR8/4 浅黄褐色
写真	54	57	位置		法量	底径	(6.9)		内	ハケ(ヨコ)	色調	内	7.5YR8/3 浅黄褐色
種別	土師器	層位	床面直上B			器高	(15.2)	胎	土	非常に精良(白色砂)	断面	断	7.5YR8/3 浅黄褐色
器種	壺	焼成	やや不良			器厚	0.8				時期		
残存	45	%	黒斑		備考	外面スス、内面コゲ付着							
図	21	22	遺構	RA616		口径	(14.8)	調整	外	不明	色調	外	5YR6/6 褐色
写真	54	58	位置	南東埋土上層、南東埋土中層、南東埋土下層、南東埋土上層、南東埋土中層、南東埋土下層	法量	底径	-		内	ハケ(ヨコ)	色調	内	7.5YR5/2 灰褐色
種別	土師器	層位				器高	(8.9)	胎	土	精良(雲母多い)	断面	断	5YR6/4 にぶい褐色
器種	壺	焼成	非常に良好			器厚	0.65				時期		
残存	20	%	黒斑		備考								

IV 調査の成果

図	20	19	遺構	RA616	法量	口径	16.1	調整	外	ハケ(タテ)	色調	外	7.5YR7/3 に近い褐色
写真	54	59	位置	床面直上C・E、 山梨埋土下部		底径	(3.0)		内	ハケ(ヨコ)		内	10YR3/2 暗褐色
種別	土師器	層位	焼成	やや不良	器高	17.6	胎	土	精良(雲母)	断	7.5YR7/3 に近い褐色	時期	
器種	壺	焼成	良好		器厚	0.7							
残存	80	%	黒斑		備考	内面口縁部コゲ付着、外器表面剥着							
図	20	16	遺構	RA616	法量	口径	(15.3)	調整	外	不明(タテ)	色調	外	7.5YR5/6 明褐色
写真	54	60	位置	カマド袖直上、 カマド袖芯材		底径	--		内	ハケ(ヨコ)		内	7.5YR5/6 明褐色
種別	土師器	層位	焼成	良好	器高	(20.5)	胎	土	精良(雲母多い)	断	7.5YR8/4 浅黄褐色	時期	
器種	壺	焼成	良好		器厚	0.6							
残存	40	%	黒斑		備考								
図	20	20	遺構	RA616	法量	口径	23.2	調整	外	ハケ(タテ)	色調	外	7.5YR6/3 に近い褐色
写真	54	61	位置	床直上C・南東埋 土下部、床面直上E		底径	(7.6)		内	ハケ(ヨコ)		内	7.5YR7/4 に近い褐色
種別	土師器	層位	焼成	良好	器高	28.0	胎	土	精良(白色砂、雲母)	断	7.5YR8/3 浅黄褐色	時期	
器種	壺	焼成	良好		器厚	0.6							
残存	90	%	黒斑		備考	外面スス、内面コゲ付着							
図	21	35	遺構	RA616	法量	口径	--	調整	外	ハケ?	色調	外	ハケ
写真	55	63	位置	南西 埋土上層		底径	8.2		内	ハケ		内	ハケ
種別	土師器	層位	焼成	良好	器高	(2.0)	胎	土	精良(白色砂)	断		時期	
器種	壺?	焼成	良好		器厚	0.9							
残存	10	%	黒斑		備考								
図	21	34	遺構	RA616	法量	口径	--	調整	外	ハケ(タテ)	色調	外	7.5YR5/6 明褐色
写真	55	64	位置	埋土上層		底径	7.2		内	ハケ?		内	7.5YR5/4 に近い褐色
種別	土師器	層位	焼成	良好	器高	(2.2)	胎	土	精良(白色砂、雲母)	断	10YR7/3 に近い黄褐色	時期	
器種	壺	焼成	良好		器厚	0.9							
残存	10	%	黒斑		備考								
図	21	33	遺構	RA616	法量	口径	--	調整	外	ハケ(タテ)	色調	外	7.5YR5/4 に近い褐色
写真	55	65	位置	床面直上A		底径	6.3		内	不明		内	7.5YR7/3 に近い褐色
種別	土師器	層位	焼成	良好	器高	5.0	胎	土	精良(白色砂、雲母)	断	7.5YR6/1 褐灰色	時期	
器種	壺	焼成	良好		器厚	0.6							
残存	30	%	黒斑		備考	底部にかすかな木葉痕、外面スス、内面コゲ付着							
図	21	39	遺構	RA616	法量	口径	21.5	調整	外	ハケ(タテ?)、タタキ	色調	外	10YR7/4 に近い黄褐色
写真	55	66	位置	東埋土1・中・下層、南 西埋土上層、東3段上層		底径	--		内	ハケ(ヨコ)後ナデ?		内	10YR6/4 に近い黄褐色
種別	土師器	層位	焼成	良好	器高	20.0	胎	土	精良(雲母、スコリア)	断	10YR6/4 に近い黄褐色	時期	
器種	壺	焼成	良好		器厚	0.7							
残存	40	%	黒斑		備考								
図	21	28	遺構	RA616	法量	口径	(16.4)	調整	外	ハケ(タテ)	色調	外	7.5YR6/2 灰褐色
写真	55	67	位置	南ベルト上層、 南西埋土上層		底径	--		内	ハケ(ヨコ)		内	7.5YR6/3 に近い褐色
種別	土師器	層位	焼成	良好	器高	(10.9)	胎	土	精良(雲母多い)	断	7.5YR5/1 褐灰色	時期	
器種	壺	焼成	良好		器厚	0.9							
残存	30	%	黒斑		備考	外面スス付着							
図	21	25	遺構	RA616	法量	口径	(15.9)	調整	外	ハケ(タテ)	色調	外	7.5YR5/3 に近い褐色
写真	55	68	位置	南西		底径	--		内	ハケ(ヨコ)		内	7.5YR5/3 に近い褐色
種別	土師器	層位	焼成	良好	器高	(9.2)	胎	土	精良(白色砂多い)	断	7.5YR6/1 褐灰色	時期	
器種	壺	焼成	良好		器厚	0.6							
残存	30	%	黒斑		備考	外面スス、内面コゲ付着							
図	21	31	遺構	RA616	法量	口径	(19.6)	調整	外	ハケ(タテ)	色調	外	10YR7/3 に近い黄褐色
写真	55	69	位置	南東		底径	--		内	ハケ(ヨコ)		内	7.5YR6/4 に近い褐色
種別	土師器	層位	焼成	良好	器高	18.4	胎	土	精良(白色砂、雲母)	断	7.5YR6/4 に近い褐色	時期	
器種	壺	焼成	良好		器厚	0.6							
残存	35	%	黒斑		備考								

図 20	2	遺構	RA616	口径(14.4)	調整	外	ハケケズリ 下半	外	10YR7/3 にぶい黄褐色
写真 56	70	位置	南東	底径(8.2)	調整	内	ミガキ	内	7.5I0Y7/3 にぶい黄褐色
種別	土師器	層位	埋土上層	器高 3.6	胎	土	精良(白色砂)	断	10YR7/3 にぶい黄褐色
器種	坏	焼成	やや不良	器厚 0.7	胎	土	精良(白色砂)	時	期 7世紀末~8世紀初頭
残存	30 %	黒斑		備考					

図 20	1	遺構	RA616	口径(13.6)	調整	外	ミガキ?	外	10YR5/3 にぶい黄褐色
写真 56	71	位置	北東埋土上層、 東埋土上層	底径(4.6)	調整	内	ミガキ?	内	10YR6/3 にぶい黄褐色
種別	土師器	層位	埋土上層	器高 4.0	胎	土	非常に精良(白色砂)	断	10YR4/1 褐灰色
器種	坏	焼成	良好	器厚 0.7	胎	土	非常に精良(白色砂)	時	期
残存	25 %	黒斑		備考					

図 20	18	遺構	RA616	口径 -	調整	外	ハケ(タテ)	外	7.5YR7/6 褐色
写真 52	72	位置	南西	底径 7.5	調整	内		内	7.5YR5/4 にぶい褐色
種別	土師器	層位	埋土上層	器高(3.0)	胎	土	非常に精良(白色砂)	断	7.5YR6/4 にぶい褐色
器種	壺	焼成	非常に良好	器厚 0.65	胎	土	非常に精良(白色砂)	時	期
残存	10 %	黒斑		備考					

図 21	36	遺構	RA616	口径 -	調整	外	不明	外	10YR6/4 にぶい黄褐色
写真 56	73	位置	北西	底径 7.2	調整	内	不明	内	10YR7/4 にぶい黄褐色
種別	土師器	層位	埋土上層	器高(1.0)	胎	土	精良(白色砂、石英)	断	10YR4/1 褐灰色
器種	壺	焼成	良好	器厚 0.8	胎	土	精良(白色砂、石英)	時	期
残存	10 %	黒斑		備考					

図 21	27	遺構	RA616	口径(19.2)	調整	外	ハケ?(タテ)	外	7.5YR6/4 にぶい褐色
写真 56	74	位置	南東埋土上層、 北東埋土上層	底径 -	調整	内	ハケ?(ヨコ)	内	10YR6/3 にぶい黄褐色
種別	土師器	層位	埋土上層	器高(11.5)	胎	土	精良(白色砂、長石)	断	10YR6/1 褐灰色
器種	壺	焼成	良好	器厚 0.9	胎	土	精良(白色砂、長石)	時	期
残存	20 %	黒斑		備考					

図 21	29	遺構	RA616	口径(18.4)	調整	外	不明(タテ)	外	7.5YR6/2 灰褐色
写真 56	75	位置	床面直上E、北西埋土 上層、北ベルト下層	底径 -	調整	内	ハケ(ヨコ)	内	7.5YR6/3 にぶい褐色
種別	土師器	層位	埋土上層	器高(13.9)	胎	土	精良(白色砂、雲母)	断	7.5YR4/1 褐灰色
器種	壺	焼成	良好	器厚 0.8	胎	土	精良(白色砂、雲母)	時	期
残存	30 %	黒斑		備考					

図 21	23	遺構	RA616	口径(16.6)	調整	外	ハケ(タテ)	外	10YR7/2 にぶい黄褐色
写真 56	76	位置	南ベルト	底径 -	調整	内	不明	内	10YR8/3 浅黄褐色
種別	土師器	層位	上層	器高(8.2)	胎	土	精良(白色砂、石英)	断	10YR8/3 浅黄褐色
器種	壺	焼成	良好	器厚 0.6	胎	土	精良(白色砂、石英)	時	期 7世紀末~8世紀初頭
残存		黒斑		備考					

図 21	30	遺構	RA616	口径(20.0)	調整	外	ハケ	外	10YR8/3 浅黄褐色
写真 56	77	位置	南西	底径 -	調整	内	ハケ(ヨコ)	内	10YR7/4 にぶい黄褐色
種別	土師器	層位	埋土上層	器高(10.0)	胎	土	精良(石英)	断	10YR8/3 浅黄褐色
器種	壺	焼成	良好	器厚 0.75	胎	土	精良(石英)	時	期 7世紀末~8世紀初頭
残存		黒斑		備考					

図 21	24	遺構	RA616	口径(17.5)	調整	外	ハケ(タテ)	外	10YR7/3 にぶい黄褐色
写真 56	78	位置	北西	底径 -	調整	内	ハケ(ヨコ)	内	10YR7/3 にぶい黄褐色
種別	土師器	層位	埋土上層	器高(5.5)	胎	土	精良(白色砂、雲母)	断	10Y4/1 褐灰色
器種	壺	焼成	良好	器厚 0.7	胎	土	精良(白色砂、雲母)	時	期
残存	20 %	黒斑		備考					

図 25	1	遺構	RA605	口径 -	調整	内	回転ナデ	外	2.5YR6/1 黄灰色
写真 57	79	位置		底径(5.6)	調整	外	回転ナデ	内	5Y6/1 灰色
種別	須恵器	層位	埋土	器高(1.7)	胎	土	精良(白色砂)	断	5Y6/1 灰色
器種	坏	焼成	良好	器厚 0.5	胎	土	精良(白色砂)	時	期 9世紀半~10世紀初頭
残存	20 %	黒斑		備考					

IV 調査の成果

図	28	8	遺構	RA606		口徑	-	調整	内	回転ナデ		外	7.5YR5/4 に近い褐色
写真	57	80	位置	南西	法量	底徑	5.4		外	ミガキ		色調	内 7.5YR4/2 灰褐色
種別	土師器	層位	床面直上	器高		(1.4)	胎	土	非常に精良	断	7.5YR5/3 に近い褐色		
器種	盃	焼成	良好	器厚		0.6				時期	9世紀半ば～10世紀初頭		
残存	30	%	黒斑	備考		底部回転系り後無調整							
図	28	3	遺構	RA606		口徑	13.4	調整	内	回転ナデ		外	10YR6/4 に近い黄褐色
写真	57	81	位置	カマド内?	法量	底徑	6.7		外	ミガキ		色調	内 10YR2/1 黒色
種別	土師器	層位		器高		4.8	胎	土	精良(白色砂、雲母、スコリア)	断	10YR7/3 に近い黄褐色		
器種	坏	焼成	良好	器厚		0.5				時期	9世紀半ば～10世紀初頭		
残存	90	%	黒斑	備考		器蓋「木」、底部切り離し後回転ヘラケズリ							
図	28	4	遺構	RA606		口徑	-	調整	内	回転ナデ		外	7.5YR6/6 褐色
写真	57	82	位置	カマド支脚	法量	底徑	5.5		外	回転ナデ		色調	内 7.5YR6/6 褐色
種別	土師器	層位		器高		(5.0)	胎	土	やや粗(白色砂、スコリア)	断	7.5YR7/3 に近い褐色		
器種	壺	焼成	やや不良	器厚		0.5				時期	9世紀半ば～10世紀初頭		
残存	25	%	黒斑	備考		底部回転系り後無調整							
図	28	1	遺構	RA606		口徑	(14.6)	調整	内	回転ナデ		外	5B5/1 青灰色
写真	57	83	位置	pH	法量	底徑	(6.0)		外	回転ナデ		色調	内 N50 灰色
種別	須恵器	層位		器高		4.1	胎	土	精良	断	N30 暗灰色		
器種	坏	焼成	良好	器厚		0.3				時期	9世紀半ば～9世紀後葉		
残存	40	%	黒斑	備考		底部回転系り後無調整、やや焼け強み気味							
図	28	5	遺構	RA606		口徑	(12.1)	調整	内	回転ナデ		外	7.5YR7/6 褐色
写真	57	84	位置	北端	法量	底徑	(6.8)		外	回転ナデ		色調	内 7.5YR7/6 褐色
種別	土師器	層位	垣上	器高		5.2	胎	土	精良(石英、スコリア)	断	7.5YR7/6 褐色		
器種	坏	焼成	良好	器厚		0.7				時期	9世紀半ば～10世紀初頭		
残存	40	%	黒斑	備考									
図	28	6	遺構	RA606		口徑	11.8	調整	内	回転ナデ		外	7.5YR8/4 浅黄褐色
写真	57	85	位置	床面直上、カマド脇	法量	底徑	-		外	回転ナデ		色調	内 7.5YR5/6 明褐色
種別	土師器	層位		器高		(4.1)	胎	土	精良(石英、スコリアなど)	断	7.5YR5/6 明褐色		
器種	坏	焼成	やや不良	器厚		0.35				時期	9世紀半ば～10世紀初頭		
残存	30	%	黒斑	備考		内外面ともに摩滅著しく、黒色処理器か不明							
図	28	2	遺構	RA606		口徑	(14.4)	調整	外	回転ナデ		色調	内 2.5GY6/1 オリーブ灰色
写真	57	86	位置	カマド	法量	底徑	-		胎	土	精良(白色砂)	断	5GY6/1 オリーブ灰色
種別	須恵器	層位		器高		(4.5)				時期	9世紀		
器種	坏	焼成	良好	器厚		0.4							
残存	30	%	黒斑	備考		器蓋「木」							
図	28	7	遺構	RA606		口徑	(20.7)	調整	内	タケキ、回転ナデ		外	7.5YR4/2 灰褐色
写真	57	87	位置	運出し埋土	法量	底徑	(10.0)		外	回転ナデ		色調	内 7.5YR5/2 灰褐色
種別	土師器	層位	上～中層	器高		22.5	胎	土	精良(石英、白色砂、スコリア)	断	7.5YR4/1 褐色		
器種	盃	焼成	良好	器厚		0.6				時期	9世紀		
残存	40	%	黒斑	備考		砂底							
図		1	遺構	RA607		口徑	(25.0)	調整	内	回転ナデヘラケズリ(タケ)		外	10YR5/4 に近い黄褐色
写真	58	89	位置	カマド	法量	底徑	-		外	回転ナデ・ミガキ(ヨコ)		色調	内 10YR3/1 黒褐色
種別	土師器	層位	埋土	器高		(8.1)	胎	土	非常に精良(白砂、雲母)	断	10YR6/4 に近い黄褐色		
器種	鉢	焼成	良好	器厚		0.7				時期	9世紀		
残存	30	%	黒斑	備考		内面黒色処理							
図	34	1	遺構	RA608		口徑	(13.7)	調整	内	回転ナデ		外	5Y5/1 灰色
写真	58	89	位置	カマド	法量	底徑	(7.1)		外	回転ナデ		色調	内 5Y5/1 灰色
種別	須恵器	層位	埋土	器高		4.2	胎	土	やや粗(白色砂、石英)	断	5Y6/1 灰色		
器種	坏	焼成	良好	器厚		0.6				時期	9世紀前半		
残存	40	%	黒斑	備考									

図 34	7	遺構 RA608	口径	調整	外	ハラケズリ (タテ)	外	10YR5/3 にぶい黄褐色		
写真 58	90	位置 押道、カマド	法量	底径 9.3	調整	内	ハケ (ヨコ)	色調	内	10YR5/4 にぶい黄褐色
種別	土師器	層位	周土	器高 4.4	胎	土	やや粗 (白色砂、石英など)	断面	10YR6/4 にぶい黄褐色	
器種	甕	焼成	非常に良好	器厚 0.4				時期		
残存	20 %	黒斑	底部内面	備考	底部木葉痕ナゲ消し、底部内面に火色					
図 34	8	遺構 RA608	口径	調整	外	ハラケズリ	外	7.5YR4/6 褐色		
写真 58	91	位置 北東	法量	底径 (9.6)	調整	内	不明	色調	内	7.5YR6/3 にぶい褐色
種別	十師器	層位	埋土	器高 (3.1)	胎	土	精良 (石英多い)	断面	7.5YR6/6 褐色	
器種	甕	焼成	良好	器厚 0.6				時期		
残存	15 %	黒斑		備考	砂底					
図 34	2	遺構 RA608	口径 (12.6)	調整	外	回転ナデ	外	5YR6/6 褐色		
写真 58	92	位置 押道	法量	底径 (6.6)	調整	内	回転ナデ	色調	内	7.5YR6/4 にぶい褐色
種別	土師器	層位	周土	器高 5.0	胎	土	非常に精良	断面	7.5YR6/4 にぶい褐色	
器種	坏	焼成	良好	器厚 0.7				時期	9世紀	
残存	35 %	黒斑		備考	底部回転糸切り後無調整、須恵器?					
図 34	4	遺構 RA608	口径	調整	外	回転ナデ	外	7.5YR7/6 褐色		
写真 58	93	位置 南内	法量	底径 (6.1)	調整	内	ミガキ	色調	内	7.5YR2/1 黒色
種別	土師器	層位	埋土	器高 (2.4)	胎	土	精良 (白色砂)	断面	7.5YR7/3 にぶい褐色	
器種	坏	焼成	やや不良	器厚 0.6				時期	9世紀	
残存	20 %	黒斑		備考	底部回転糸切り後無調整					
図 34	3	遺構 RA608	口径 (13.7)	調整	外	回転ナデ	外	10YR6/4 にぶい黄褐色		
写真 58	94	位置	法量	底径 (6.2)	調整	内	ミガキ	色調	内	10YR2/1 黒色
種別	土師器	層位	周土	器高 5.35	胎	土	精良 (白色砂、石英)	断面	10YR7/2 にぶい黄褐色	
器種	坏	焼成	良好	器厚 0.4				時期	9世紀	
残存	50 %	黒斑		備考	底部回転糸切り後無調整					
図 34	5	遺構 RA608	口径 (12.0)	調整	外	ハラケズリ (タテ)	外	7.5YR4/3 褐色		
写真 58	95	位置 カマド、カマド周辺	法量	底径	調整	内	ハケ (ヨコ)	色調	内	7.5YR5/4 にぶい褐色
種別	須恵器	層位	床面直上	器高 (5.8)	胎	土	精良 (石英)	断面	7.5YR5/4 にぶい褐色	
器種	甕	焼成	良好	器厚 0.6				時期		
残存	10 %	黒斑		備考	スス付着、No.157 と接合					
図 58	6	遺構 RA608	口径 (12.4)	調整	外	回転ナデ	外	7.5YR8/4 浅黄褐色		
写真 58	96	位置 カマド周辺	法量	底径	調整	内	回転ナデ	色調	内	7.5YR8/4 浅黄褐色
種別	土師器	層位	床面直上	器高 (9.2)	胎	土	やや粗 (白色砂、スコリア)	断面	7.5YR8/4 浅黄褐色	
器種	甕	焼成	良好	器厚 0.7				時期		
残存	30 %	黒斑		備考	No.25 と接合 (89)					
図 36	1	遺構 RA609	口径 (13.9)	調整	外	回転ナデ	外	7.5YR5/1 灰色		
写真 58	97	位置 バルト中、	法量	底径 (6.1)	調整	内	回転ナデ	色調	内	7.5YR5/1 灰色
種別	須恵器	層位	埋土	器高 4.0	胎	土	精良 (白色砂多い)	断面	7.5YR5/1 灰色	
器種	坏	焼成	良好	器厚 0.4				時期	9世紀	
残存	20 %	黒斑		備考	底部回転糸切り後無調整					
図 36	2	遺構 RA609	口径 (15.5)	調整	外	ハラケズリ (タテ)	外	7.5YR7/4 にぶい褐色		
写真 58	98	位置 北東	法量	底径	調整	内	ハケ (ヨコ)	色調	内	7.5YR6/6 褐色
種別	土師器	層位	埋土	器高 13.6	胎	土	粗 (様々な粒径多い)	断面	7.5YR7/3 にぶい褐色	
器種	甕	焼成	やや不良	器厚 0.5				時期	9世紀	
残存	30 %	黒斑		備考						
図 39	3	遺構 RA610	口径 16.4	調整	外	ミガキ	外	10YR2/1 黒色		
写真 59	99	位置	法量	底径 8.45	調整	内	ミガキ	色調	内	10YR2/1 黒色
種別	土師器	層位		器高 6.3	胎	土	精良 (雲母など)	断面	10YR5/1 褐色	
器種	坏	焼成	良好	器厚 0.4				時期	9世紀	
残存	60 %	黒斑		備考	尚黒、刺青「木」					

IV 調査の成果

図 39	1	遺構	RA610	位置 床面直上より 10cm 上	法量	口径	14.9	調整	外	ミガキ	色調	外	10YR7/4 に近い黄褐色
写真	59	100	位置			口径	14.9		調整	外		ミガキ	色調
種別	土師器	層位	堀上	口径	14.9	調整	外	ミガキ	色調	内	10YR2/1 黒色	時期	9世紀
器種	坏	焼成	良好	口径	14.9	調整	外	ミガキ	色調	内	10YR2/1 黒色	時期	9世紀
残存	95 %	黒斑	底部	備考	温香「札」、底部回転糸切り後回転ヘラケズリ								
図 39	2	遺構	RA610	位置 床より 10cm 上	法量	口径 (14.2)	調整	外	回転ナデ	色調	外	10YR7/6 明黄褐色	
写真	59	101	位置			口径	14.2	調整	外		回転ナデ	色調	内
種別	土師器	層位	埴土	口径	14.2	調整	外	回転ナデ	色調	内	10YR2/1 黒色	時期	9世紀
器種	坏	焼成	良好	口径	14.2	調整	外	回転ナデ	色調	内	10YR2/1 黒色	時期	9世紀
残存	50 %	黒斑		備考	底部切り離し後回転ヘラケズリ								
図 39	2	遺構	RA610	位置 カマド脇	法量	口径 (15.2)	調整	外	ミガキ	色調	外	10YR7/4 に近い黄褐色	
写真	59	102	位置			口径	15.2	調整	外		ミガキ	色調	内
種別	土師器	層位	床面直上	口径	15.2	調整	外	ミガキ	色調	内	10YR2/1 黒色	時期	9世紀
器種	坏	焼成	良好	口径	15.2	調整	外	ミガキ	色調	内	10YR2/1 黒色	時期	9世紀
残存	45 %	黒斑		備考	両黒? 底部回転糸切り離し後無調整、厚減著しい								
図 39	4	遺構	RA610	位置 墓室、東側、キョウボロ	法量	口径	調整	外	ハケ (タテ)	色調	外	10YR4/1 褐灰色	
写真	59	103	位置			口径	(8.9)	調整	外		ハケ (ヨコ)	色調	内
種別	土師器	層位	良好	口径	(8.9)	調整	外	ハケ (ヨコ)	色調	内	10YR6/1 褐灰色	時期	9世紀
器種	壳	焼成	良好	口径	(8.9)	調整	外	ハケ (ヨコ)	色調	内	10YR6/1 褐灰色	時期	9世紀
残存	20 %	黒斑		備考	砂底 (中央部のみ)								
図 39	7	遺構	RA610	位置	法量	口径 (13.6)	調整	外	回転ナデ	色調	外	10YR6/4 に近い黄褐色	
写真	59	104	位置			口径	(13.6)	調整	外		回転ナデ	色調	内
種別	土師器	層位	良好	口径	(13.6)	調整	外	回転ナデ	色調	内	10YR6/4 に近い黄褐色	時期	9世紀
器種	坏	焼成	良好	口径	(13.6)	調整	外	回転ナデ	色調	内	10YR6/4 に近い黄褐色	時期	9世紀
残存	20 %	黒斑		備考	底部回転糸切り後無調整								
図 39	6	遺構	RA610	位置 カマド袖	法量	口径 (14.0)	調整	外	回転ナデ	色調	外	7.5YR7/4 に近い褐色	
写真	59	105	位置			口径	(14.0)	調整	外		回転ナデ	色調	内
種別	土師器	層位	良好	口径	(14.0)	調整	外	回転ナデ	色調	内	10YR2/1 黒色	時期	9世紀
器種	坏	焼成	良好	口径	(14.0)	調整	外	回転ナデ	色調	内	10YR2/1 黒色	時期	9世紀
残存	30 %	黒斑		備考	測者「木」								
図 42	1	遺構	RA611	位置 北西隅焼土周	法量	口径	13.9	調整	外	回転ナデ	色調	外	10YR8/3 浅黄褐色
写真	59	106	位置			口径	13.9	調整	外	回転ナデ		色調	内
種別	土師器	層位	やや不良	口径	13.9	調整	外	回転ナデ	色調	内	10YR8/3 浅黄褐色	時期	9世紀前～中
器種	坏	焼成	やや不良	口径	13.9	調整	外	回転ナデ	色調	内	10YR8/3 浅黄褐色	時期	9世紀前～中
残存	30 %	黒斑		備考	底部回転糸切り後無調整								
図 42	2	遺構	RA611	位置 北東	法量	口径 (10.6)	調整	外	回転ナデ	色調	外	7.5YR6/4 に近い褐色	
写真	59	107	位置			口径	(10.6)	調整	外		回転ナデ	色調	内
種別	土師器	層位	埴土	口径	(10.6)	調整	外	回転ナデ	色調	内	7.5YR6/6 褐色	時期	9世紀
器種	坏	焼成	やや不良	口径	(10.6)	調整	外	回転ナデ	色調	内	7.5YR6/6 褐色	時期	9世紀
残存	10 %	黒斑		備考									
図 43	4	遺構	RA612	位置 北東角埴土、床面直上、北東角隅集中	法量	口径 (14.4)	調整	外	回転ナデ	色調	外	7.5YR7/6 褐色	
写真	60	108	位置			口径	(14.4)	調整	外		回転ナデ	色調	内
種別	土師器	層位	やや不良	口径	(14.4)	調整	外	回転ナデ	色調	内	7.5YR7/6 褐色	時期	9世紀
器種	坏	焼成	やや不良	口径	(14.4)	調整	外	回転ナデ	色調	内	7.5YR7/6 褐色	時期	9世紀
残存	50 %	黒斑		備考	底部切り離し不明								
図 43	8	遺構	RA612	位置 床面直上、カマド壁土	法量	口径	調整	外	回転ナデ	色調	外	7.5YR7/4 に近い褐色	
写真	60	109	位置			口径	(8.6)	調整	外		回転ナデ	色調	内
種別	土師器	層位	やや不良	口径	(8.6)	調整	外	回転ナデ	色調	内	7.5YR8/3 浅黄褐色	時期	9世紀
器種	壳	焼成	やや不良	口径	(8.6)	調整	外	回転ナデ	色調	内	7.5YR8/3 浅黄褐色	時期	9世紀
残存	20 %	黒斑		備考	底部回転糸切り後無調整								

図 43	7	遺構 RA612	口径	—	調整	外	ヘラケズリ(タテ)	外	5YR6/6 橙色
写真 60	110	位置 北カマド燃焼部	底径	(7.6)		内	ナデ?	色調	内 7.5YR7/2 明褐色
種別	土師器	層位	器高	(3.6)	胎	土	やや粗(様々な砂粒)	断面	5YR6/6 橙色
器種	甕	焼成	器厚	~1.0				時期	
残存	10 %	黒斑	備考	底部木葉痕?					

図 43	13	遺構 RA612	口径	—	調整	外	タタキ(平行)	外	5B5/1 青灰色
写真 60	111	位置 雨水隅上器集中	底径	10.55		内	ナデ	色調	内 N7/0 灰白色
種別	須恵器	層位	器高	5.8	胎	土	精良(白色砂)	断面	N7/0 灰白色
器種	甕? 甗?	焼成	器厚	1.15				時期	9世紀
残存	20 %	黒斑	備考	外面に自然釉、内底面に降灰					

図 43	10	遺構 RA612	口径	(10.1)	調整	外	回転ナデ	外	10YR5/1 褐色
写真 60	112	位置 ベルト	底径	—		内	回転ナデ	色調	内 10YR5/1 褐色
種別	須恵器	層位	器高	(6.2)	胎	土	精良(白色砂)	断面	7.5YR4/3 褐色
器種	長頸甕	焼成	器厚	0.7				時期	9世紀
残存	30 %	黒斑	備考						

図 43	2	遺構 RA612	口径	(12.4)	調整	外	回転ナデ	外	10YR5/4 にぶい黄褐色
写真 60	113	位置 南東隅土器集中	底径	—		内	ミガキ	色調	内 10YR2/1 黒色
種別	土師器	層位	器高	(3.2)	胎	土	精良(雲母多量)	断面	10YR4/1 褐色
器種	坏	焼成	器厚	0.4				時期	
残存	30 %	黒斑	備考						

図 43	1	遺構 RA612	口径	(13.4)	調整	外	回転ナデ	外	7.5YR6/6 橙色
写真 60	114	位置 カマド	底径	(6.0)		内	ミガキ	色調	内 7.5YR6/4 にぶい橙色
種別	土師器	層位	器高	4.0	胎	土	精良(雲母多量)	断面	7.5YR6/6 橙色
器種	坏	焼成	器厚	0.5				時期	9世紀
残存	40 %	黒斑	備考	内黒? 底部回転系切り後無調整					

図 43	6	遺構 RA612	口径	—	調整	外	回転ナデ	外	7.5YR7/6 橙色
写真 60	115	位置 カマド	底径	5.5		内	回転ナデ	色調	内 7.5YR8/4 浅黄褐色
種別	土師器	層位	器高	(1.3)	胎	土	やや粗(石英、大粒スコリア)	断面	7.5YR8/4 浅黄褐色
器種	坏?	焼成	器厚	0.5				時期	
残存	%	黒斑	備考	摩滅著しい					

図 43	9	遺構 RA612	口径	—	調整	外	回転ナデ	外	5YR6/6 橙色
写真 60	116	位置 埋土上層	底径	(8.0)		内	回転ナデ	色調	内 5YR7/6 橙色
種別	土師器	層位	器高	(2.2)	胎	土	精良(白色砂)	断面	7.5YR7/4 にぶい橙色
器種	高台付坏	焼成	器厚	0.6				時期	9世紀
残存	20 %	黒斑	備考						

図 43	5	遺構 RA612	口径	—	調整	外	回転ナデ	外	7.5YR6/6 橙色
写真 60	117	位置 カマド	底径	5.95		内	回転ナデ	色調	内 7.5YR6/4 にぶい橙色
種別	土師器	層位	器高	(3.1)	胎	土	精良(白色砂、石英)	断面	7.5YR6/6 橙色
器種	坏	焼成	器厚	0.5				時期	9世紀
残存	20 %	黒斑	備考	底部回転系切り後無調整、一部還元					

図 43	3	遺構 RA612	口径	(14.4)	調整	外	回転ナデ	外	10YR6/2 灰黄褐色
写真 60	118	位置 北西	底径	—		内	ミガキ	色調	内 10YR5/1 灰褐色
種別	土師器	層位	器高	(4.5)	胎	土	精良(雲母多い)	断面	10YR6/2 灰黄褐色
器種	坏	焼成	器厚	0.6				時期	9世紀
残存	30 %	黒斑	備考						

図 43	11	遺構 RA612	口径	—	調整	外	ヘラケズリ	外	10YR5/3 にぶい黄褐色
写真 60	119	位置 北東隅埋土、北東角隅集中	底径	(11.0)		内		色調	内 10YR4/2 灰黄褐色
種別	土師器	層位	器高	(1.5)	胎	土		断面	10YR5/3 にぶい黄褐色
器種	甕	焼成	器厚	0.85				時期	
残存	10 %	黒斑	備考						

図 50 1	遺構 RD1182・RG492	口径 (9.0)	調整	外 ヘラケズリ	外 7.5YR6/4 にぶい褐色
写真 61 130	位置	底径 (4.0)	調整	内 細かなミガキ(放射状)	色調 内 10YR2/1 黒色
種別 土師器	層位 埋土	器高 (3.0)	胎 土	精良(白色砂、雲母)	断 10YR5/1 褐灰色
器種 杯	焼成 良好	器厚 0.5			時 期 7世紀末～8世紀初頭
残存 35 %	黒斑	備考	関東系土師器 (在地産)		

図 50 2	遺構 RD1182	口径 13.6	調整	外 ヘラケズリ(不定)	外 7.5YR5/6 明褐色
写真 61 131	位置	底径 -	調整	内 ナデ	色調 内 7.5YR5/6 明褐色
種別 土師器	層位 埋土	器高 3.95	胎 土	精良(石灰多い、長石)	断 7.5YR5/4 にぶい褐色
器種 杯	焼成 非常に良好	器厚 0.45			時 期 7世紀後半
残存 75 %	黒斑	備考	関東系土師器		

図 52 1	遺構 RD1186	口径 (16.4)	調整	外 ヘラケズリ(不定)	外 7.5YR6/2 灰黄褐色
写真 62 132	位置	底径 -	調整	内 ミガキ	色調 内 10YR2/1 黒色
種別 土師器	層位 埋土	器高 (3.8)	胎 土	やや粗(石灰、長石、雲母)	断 10YR4/1 褐灰色
器種 杯	焼成 良好	器厚 0.6			時 期
残存 45 %	黒斑	備考	底部調整はヘラケズリがハケに鈍化		

図 54 3	遺構 RD1187	口径 (11.0)	調整	外 ヘラケズリ「下半」 ミガキ	外 10YR7/3 にぶい黄褐色
写真 62 133	位置	底径 -	調整	内 ミガキ	色調 内 10YR2/1 黒色
種別 土師器	層位 埋土上～中	器高 3.8	胎 土	精良(雲母)	断 10Y5/1 褐灰色
器種 杯	焼成 良好	器厚 0.5			時 期 7世紀後半～8世紀初頭
残存 55 %	黒斑 底部	備考			

図 54 4	遺構 RD1187	口径 (15.6)	調整	外 不明	外 10YR6/2 灰黄褐色
写真 62 134	位置	底径 (6.4)	調整	内 ミガキ?	色調 内 10YR2/1 黒色
種別 土師器	層位 埋土	器高 4.1	胎 土	精良(雲母多い)	断 10YR4/1 褐灰色
器種 杯	焼成 良好	器厚 0.6			時 期 7世紀後半～8世紀初頭
残存 45 %	黒斑 底部	備考	段なし		

図 54 7	遺構 RD1187	口径 (14.4)	調整	外 不明	外 10YR7/4 にぶい黄褐色
写真 62 135	位置	底径 -	調整	内 ミガキ?	色調 内 10YR2/1 黒色
種別 土師器	層位 埋土	器高 (3.8)	胎 土	精良(白色砂、雲母)	断 10YR3/1 黒褐色
器種 杯	焼成 良好	器厚 0.6			時 期 7世紀後半～8世紀初頭
残存 40 %	黒斑 口縁～底部	備考	段なし		

図 54 16	遺構 RD1187	口径 -	調整	外 ハケ(不定)	外 7.5YR6/4 にぶい褐色
写真 62 136	位置	底径 -	調整	内 ミガキ	色調 内 10YR2/1 黒色
種別 土師器	層位 埋土	器高 (3.8)	胎 土	精良(白色砂、スロリア)	断 10YR5/1 褐灰色
器種 高杯	焼成 良好	器厚 0.7			時 期 7世紀後半～8世紀初頭
残存 30 %	黒斑	備考			

図 54 6	遺構 RD1187	口径 (13.4)	調整	外 不明	外 7.5YR5/4 にぶい褐色
写真 62 137	位置 北西	底径 -	調整	内 ミガキ?	色調 内 10YR2/1 黒色
種別 土師器	層位 埋土	器高 (2.9)	胎 土	精良(白色砂)	断 7.5YR5/3 にぶい褐色
器種 杯	焼成 良好	器厚 0.55			時 期 7世紀後半～8世紀初頭
残存 20 %	黒斑	備考	段なし		

図 54 2	遺構 RD1187	口径 (12.6)	調整	外 ヘラケズリ「下半」	外 7.5YR6/6 褐色
写真 62 138	位置	底径 -	調整	内 ミガキ	色調 内 7.5YR3/1 黒褐色
種別 土師器	層位 埋土下位	器高 (4.3)	胎 土	精良(白色砂、雲母)	断 7.5Y4/1 褐灰色
器種 杯	焼成 良好	器厚 0.6			時 期 7世紀後半～8世紀初頭
残存 20 %	黒斑	備考	段なし		

図 54 5	遺構 RD1187	口径 (12.8)	調整	外 ヘラケズリ「下半」	外 10YR5/2 灰黄褐色
写真 62 139	位置	底径 -	調整	内 ミガキ	色調 内 10YR2/1 黒色
種別 土師器	層位 埋土	器高 (3.8)	胎 土	精良(白色砂、雲母)	断 10Y5/1 褐灰色
器種 杯	焼成 良好	器厚 0.6			時 期 7世紀後半～8世紀初頭
残存 20 %	黒斑 底部	備考	段不明		

IV 調査の結果

図 54 1	遺構 RD1187	口径 11.4	調整	外 ミガキ	外 10YR2/1 黒色
写真 62 140	位置	底径 -		内 ミガキ	内 10YR2/1 黒色
種別 土師器	層位 埋土	器高 2.65	胎 土	精良 (雲母)	断 10Y5/1 褐灰色
器種 壺	焼成 良好	器厚 0.65			時期 7世紀後半～8世紀初頭
残存 45 %	黒斑	備考	同照、関東系後統器?		
図 54 15	遺構 RD1187	口径 -	調整	外 ハケ (タテ)	外 10YR5/2 灰黄褐色
写真 63 141	位置	底径 8.5		内 ハケ (ヨコ)	内 7.5YR6/4 にぶい橙褐色
種別 土師器	層位 埋土	器高 (2.7)	胎 土	精良 (雲母多い)	断 10Y3/1 黒褐色
器種 壺	焼成 良好	器厚 0.8			時期
残存 20 %	黒斑	備考			
図 54 8	遺構 RD1187	口径 (15.0)	調整	外 ミガキ?	外 7.5YR6/4 にぶい橙褐色
写真 63 142	位置 埋土	底径 -		内 ミガキ	内 10YR2/1 黒色
種別 土師器	層位 埋土	器高 4.2	胎 土	精良 (白色砂、雲母)	断 10YR5/1 褐灰色
器種 坏	焼成 良好	器厚 0.5			時期 7世紀後半～8世紀初頭
残存 40 %	黒斑 体部	備考	段なし		
図 54 10	遺構 RD1187	口径 -	調整	外 ハケ (タテ)	外 10YR5/1 褐灰色
写真 63 143	位置 北西	底径 (7.4)		内 ハケ (ヨコ)	内 10YR6/4 にぶい黄褐色
種別 土師器	層位 埋土	器高 (4.5)	胎 土	精良 (白色砂、雲母)	断 10YR6/1 褐灰色
器種 壺	焼成 やや不良	器厚 0.7			時期
残存 20 %	黒斑	備考			
図 54 9	遺構 RD1187	口径 -	調整	外 ハケ (タテ)	外 10YR7/3 にぶい黄褐色
写真 63 144	位置	底径 7.6		内 ハケ	内 10YR6/3 にぶい黄褐色
種別 土師器	層位 埋土	器高 3.7	胎 土	精良 (白色砂)	断 10YR6/1 褐灰色
器種 壺	焼成 良好	器厚 1.0			時期
残存 20 %	黒斑	備考			
図 54 11	遺構 RD1187	口径 (22.2)	調整	外 ハケ (タテ)	外 10YR6/3 にぶい黄褐色
写真 63 145	位置	底径 -		内 ハケ (ヨコ)	内 10YR6/3 にぶい黄褐色
種別 土師器	層位 埋土	器高 (5.2)	胎 土	精良 (白色砂、雲母)	断 10YR6/3 にぶい黄褐色
器種 壺	焼成 良好	器厚 0.6			時期
残存 30 %	黒斑	備考			
図 54 18	遺構 RD1187	口径 (14.1)	調整	外 ハケ (タテ)	外 10YR5/3 にぶい黄褐色
写真 63 146	位置 北西	底径 -		内 不明	内 10YR6/3 にぶい黄褐色
種別 土師器	層位 埋土	器高 (5.1)	胎 土	精良 (白色砂、雲母)	断 10YR5/1 褐灰色
器種 壺	焼成 良好	器厚 0.9			時期
残存 10 %	黒斑	備考			
図 54 19	遺構 RD1187	口径 (17.4)	調整	外 ハケ (タテ)	外 10YR5/3 にぶい黄褐色
写真 63 147	位置	底径 -		内 ハケ (ヨコ)	内 10YR5/3 にぶい黄褐色
種別 土師器	層位 埋土上位	器高 (19.6)	胎 土	精良 (白色砂)	断 10YR6/3 にぶい黄褐色
器種 壺	焼成 良好	器厚 0.9			時期
残存 35 %	黒斑	備考			
図 54 13	遺構 RD1187	口径 (21.0)	調整	外 ハケ (タテ)	外 10YR6/3 にぶい黄褐色
写真 63 148	位置	底径 -		内 ハケ (ヨコ)	内 10YR6/3 にぶい黄褐色
種別 土師器	層位 埋土	器高 (15.0)	胎 土	精良 (白色砂、雲母)	断 10YR7/2 にぶい黄褐色
器種 壺	焼成 良好	器厚 0.7			時期
残存 %	黒斑	備考			
図 54 14	遺構 RD1187	口径 (21.3)	調整	外 ミガキ	外 10YR7/3 にぶい黄褐色
写真 63 149	位置 埋土	底径 -		内 ハケ (ヨコ)	内 10YR7/3 にぶい黄褐色
種別 土師器	層位	器高 (12.5)	胎 土	精良 (白色砂、スクリア)	断 10YR7/1 灰白色
器種 壺	焼成 良好	器厚 0.7			時期 7～8世紀
残存 20 %	黒斑	備考			

図 54	12	遺構 RD1187	口径 (16.6)	調整	外	ハケ (タテ)	外	7.5YR6/4 に近い褐色	
写真 64	150	位置	底径	—	内	ハケ (ヨコ)	内	7.5YR6/3 に近い褐色	
種別	十部器	層位	器高 (14.6)	胎	土	精良 (白色砂、雲母)	断		
器種	壺	焼成	器厚 0.8				時	期	
残存	35 %	黒斑	備考						
図 54	17	遺構 RD1187	口径	—	調整	外	ハケ (タテ)	外	10YR5/3 に近い黄褐色
写真 64	151	位置	底径 (7.5)	—	内	ハケ (ヨコ)	内	10YR6/6 褐色	
種別	十部器	層位	器高 (16.0)	胎	土	精良 (白色砂、雲母)	断	10YR5/1 褐灰色	
器種	壺	焼成	器厚 0.6				時	期	
残存	35 %	黒斑	備考						
図 63	1	遺構 RG264	口径 (15.0)	調整	外	ミガキ	外	10YR8/1 灰白色	
写真 64	152	位置	底径	—	内	ミガキ	内	10YR5/1 褐灰色	
種別	土師器	層位	器高 (5.0)	胎	土	精良 (白色砂、雲母)	断	10YR4/1 褐灰色	
器種	壺	焼成	器厚 0.6				時	期	
残存	20 %	黒斑	備考					7 ~ 8 世紀	
図 63	2	遺構 RG264	口径	—	調整	外	回転ナデ	外	5BG5/1 青灰色
写真 64	153	位置	底径 6.3	—	内	回転ナデ	内	5BG6/1 青灰色	
種別	須恵器	層位	器高 (3.05)	胎	土	精良 (白色砂)	断	7.5YR6/1 褐灰色	
器種	杯	焼成	器厚 0.5				時	期	
残存	30 %	黒斑	備考	底部回転糸切り後無調整				9 世紀	
図 63	4	遺構 RG267	口径	—	調整	外	回転ナデ	外	7.5YR6/6 褐色
写真 64	154	位置	底径 (6.6)	—	内	回転ナデ	内	7.5YR6/6 褐色	
種別	十部器	層位	器高 (2.0)	胎	土	精良 (白色砂)	断	7.5YR6/3 に近い褐色	
器種	杯	焼成	器厚 0.6				時	期	
残存	20 %	黒斑	備考	底部回転糸切り後無調整				9 ~ 10 世紀	
図 63	3	遺構 RG264	口径	—	調整	外	回転ナデ	外	10YR8/1 灰白色
写真 64	155	位置	底径 (5.0)	—	内	回転ナデ	内	10YR8/1 灰白色	
種別	須恵器	層位	器高 (2.4)	胎	土	精良 (白色砂)	断	2.5YR8/2 灰白色	
器種	杯	焼成	器厚 0.4				時	期	
残存	30 %	黒斑	備考	底部回転糸切り後無調整				9 世紀	
図 63	6	遺構 RG264	口径	—	調整	外	回転ナデ?	外	5BG6/1 青灰色
写真 64	156	位置	底径 5.5	—	内	回転ナデ	内	10BG7/1 明青灰色	
種別	須恵器	層位	器高 (0.3)	胎	土	精良 (白色砂)	断	5BG6/1 青灰色	
器種	杯	焼成	器厚 0.6				時	期	
残存	20 %	黒斑	備考	底部回転糸切り後無調整				9 世紀	
図 63	7	遺構 RG267	口径	—	調整	外	—	外	5GY6/1 緑灰色
写真 65	158	位置	底径	—	内	—	内	5GY6/1 緑灰色	
種別	磁器	層位	器高 (1.4)	胎	土	非常に精良	断	5GY7/1 明緑灰色	
器種	碗	焼成	器厚 0.7				時	期	
残存	5 %	黒斑	備考	龍泉窯産瀬越片文青磁碗				13 世紀	
図 64	3	遺構 遺構外	口径	—	調整	外	ナデ	外	7.5YR6/6 褐色
写真 65	159	位置	底径 7.3	—	内	ナデ	内	7.5YR5/4 に近い褐色	
種別	十部器	層位	器高 (1.7)	胎	土	精良	断	7.5YR7/4 に近い褐色	
器種	壺	焼成	器厚 1.05				時	期	
残存	10 %	黒斑	備考					7 ~ 8 世紀	
図 64	1	遺構 遺構外	口径	—	調整	外	ハケ (タテ)	外	7.5YR7/3 に近い褐色
写真 65	160	位置	底径 7.5	—	内	ハケ (ヨコ)	内	7.5YR7/4 に近い褐色	
種別	十部器	層位	器高 (6.2)	胎	土	精良 (石英)	断	7.5YR6/4 に近い褐色	
器種	壺	焼成	器厚 0.7				時	期	
残存	20 %	黒斑	備考					7 ~ 8 世紀	

IV 調査の成果

図	64	2	遺構	カクラン		口径	16.1	調整	外	回転ナデ		外	2.5GY3/1	暗オリーブ灰色	
写真	65	161	位置		法量	底径	4.65	調整	内	回転ナデ		色調	内	2.5YG3/1	暗オリーブ灰色
種別	陶器	層位		器高		4.4	胎土		やや粗	断	2.5YR3/6	暗赤褐色			
器種	壺	焼成	良好	器厚	0.6			時	期	近世以降?					
残存	99 %	黒斑		備考	内外面ともに施釉										

図	64	4	遺構	遺構外		口径	2.0	調整	外	ミガキ?		外	10YR7/2	にぶい黄褐色	
写真	65	162	位置	包含層	法量	底径	2.0	調整	内			色調	内	10YR7/2	にぶい黄褐色
種別	土師器	層位		器高		4.0	胎土		精良(白色砂、石英 嵩母)	断					
器種	ヒシチノフタ	焼成	良好	器厚	0.4			時	期						
残存	100 %	黒斑		備考	時期不明										

掲載遺物一覧の凡例

- ・「法量」数値の単位はcm
- ・「法量」の()付数値は推定値
- ・「器厚」の数値は最大値
- ・「胎土」の()内は含有鉱物
- ・「胎土」の含有鉱物は肉眼観察のみ
- ・「黒斑」は1次焼成のものに限定し、その場所を示した

表3 掲載遺物一覧(その他)

図		出土遺構	23次RA071
写真		出土位置	埋土2層
材質	土製	残存率(%)	100
器種	紡錘車	重量(g)	

V 調査の総括

1 7・8世紀の遺構と遺物

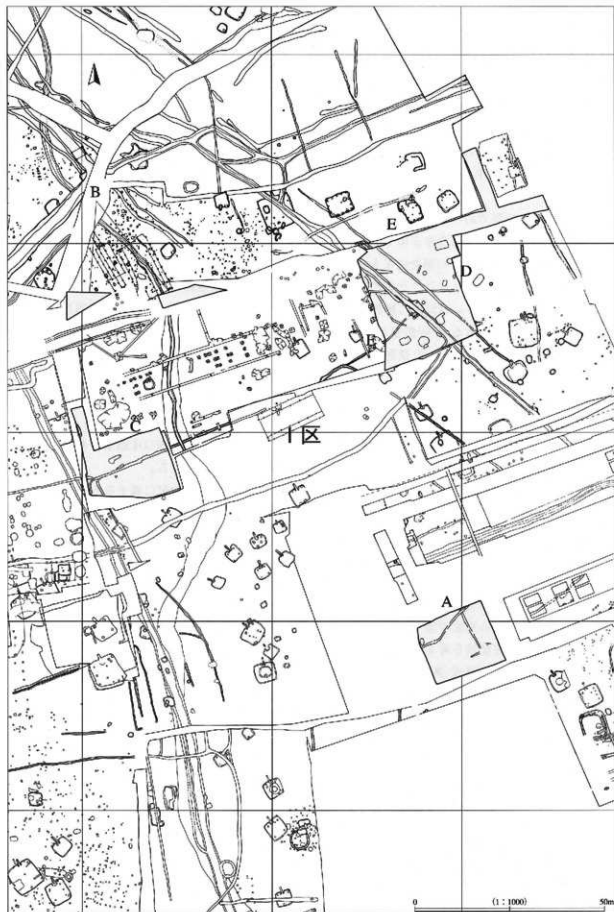
今回の調査で検出した7～8世紀の遺構は、竪穴住居、竪穴住居状遺構、土坑である。竪穴住居は4棟を数え、そのうち隣接する過年度調査区ですでに調査されているRA244を除く3棟が今回新たな検出である。I D区 RA604、I C区 RA244、II B区 RA615・616の竪穴住居4棟が7～8世紀に属する。

当該期の竪穴住居である4棟はいずれも台太郎遺跡の東側に位置し、北西方向にカマドが設置されている。この傾向は台太郎遺跡全体でも同様であり、当該期の竪穴住居は遺跡東側に集中して分布する。このように、これまでの調査成果を合わせると台太郎遺跡では、7～8世紀における居住中心域が遺跡南東側エリアに限られることが判明しつつある。なお、遺跡範囲南端部は低湿地が広がっていることが確認されており、当該期の居住城南東側は自然地形によって規制されながら展開し、そして終息していると考えられる。今回調査したI C区 RA244は過去の調査で検出した竪穴住居と同一の遺構である。今回の調査で出土した遺物が上製の土1点のみで詳細な時期を特定することは難しい。しかし、過去の調査では、この竪穴住居より床面より7～8世紀の土師器が出土している。

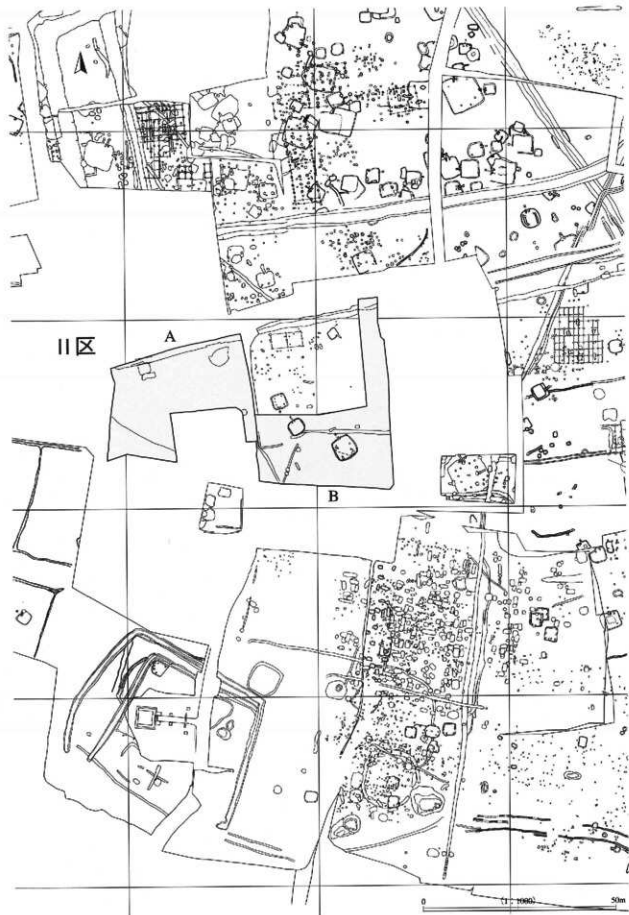
I E区 RA604は、後世の溝に中央部を破壊されているが、残存する床面より土師器が出土した。これらの遺物より7～8世紀の竪穴住居であると考えられる。

II B区で検出したRA615・616はそれぞれが近在する。この竪穴住居2棟は床面より多量の土師器が出土した。これらの遺物により7～8世紀の竪穴住居であると考えられる。

以上のように、今回の調査で検出した竪穴住居のうち、4棟が7～8世紀に属するものである。これら4棟の詳細な新古関係については、それぞれの竪穴住居間での切り合い関係が認められないため遺構から判断できない。したがって、これら竪穴住居の出土遺物から新古関係を探ってみたい。RA604出土土器群はすべて床面直上あるいはカマド袖出土のものである。したがって、それぞれの土器同士における時間幅が小さく、なおかつより竪穴住居使用時期に近い良好な一括資料である。これらの土器群は、近年資料の増加が顕著なこの地域においても編年的位置付けが難しい。しかし、比較的土器編年が整備されている東北南部（福島県域・宮城県域）、東北北部（主に八戸市域）と比較することで時期を推定できる可能性を考えた。東北南部では7～8世紀の土器編年は栗園式（概ね7世紀中心）、その次段階の国分寺下層式（概ね8世紀中心）などが比定されている。これまでの先行研究よりRA604資料は栗園式期の範疇に収まるものと考えられる。坏は非常に厚手で、わずかな有段とやや平底風であるという形態的特徴を備える。東北地方南部では、同様の形態を有する坏はみられない。しかし、八戸市では酒美平遺跡や堤沢遺跡などの集落遺跡では同様の形態を有する坏がみられる。これらの八戸では坏は7世紀中頃の年代が与えられている。八戸地域での年代の決め手となるのは古墳などから出土する長頸壺など東海地方産の須恵器類である。一方、RA604出土の壺や甕類は大形の菱形を呈する壺、壺と甕の中間の形態を呈する壺とが出土している。これらのセットは栗園式のⅢb期の標式資料とされている。Ⅲb期とは現在の宮城県域での編年研究で栗園式古段階（7世紀前半）とされている。台太郎遺跡では近年資料が増加しているが明確な編年は整備されていないのが現状である。したがって、現段階では八戸での編年観と宮城での編年観に照らし合わせ、RA604の土器群を7世紀前半～中葉としておきたい。



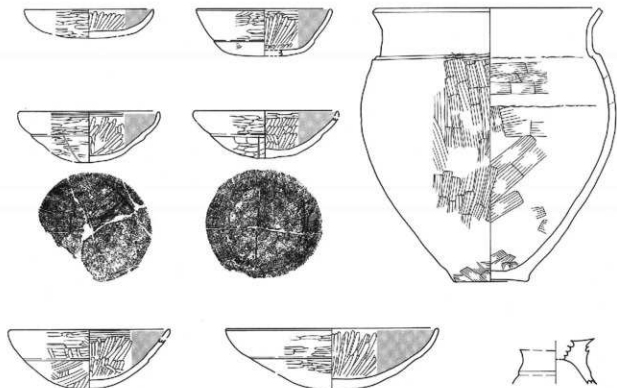
第 58 図 台太郎遺跡全体図



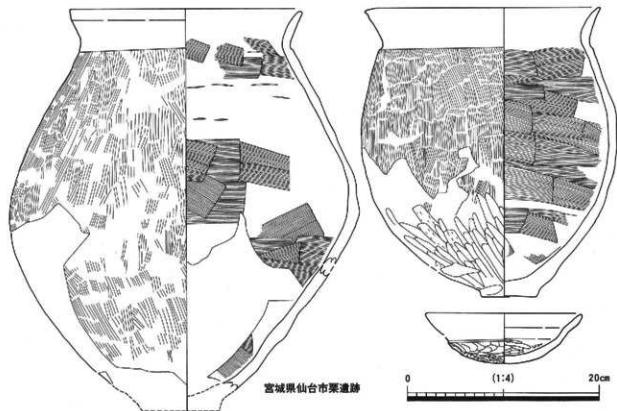
第 59 図 台太郎遺跡全体図



第 60 図 台太郎遺跡全体図

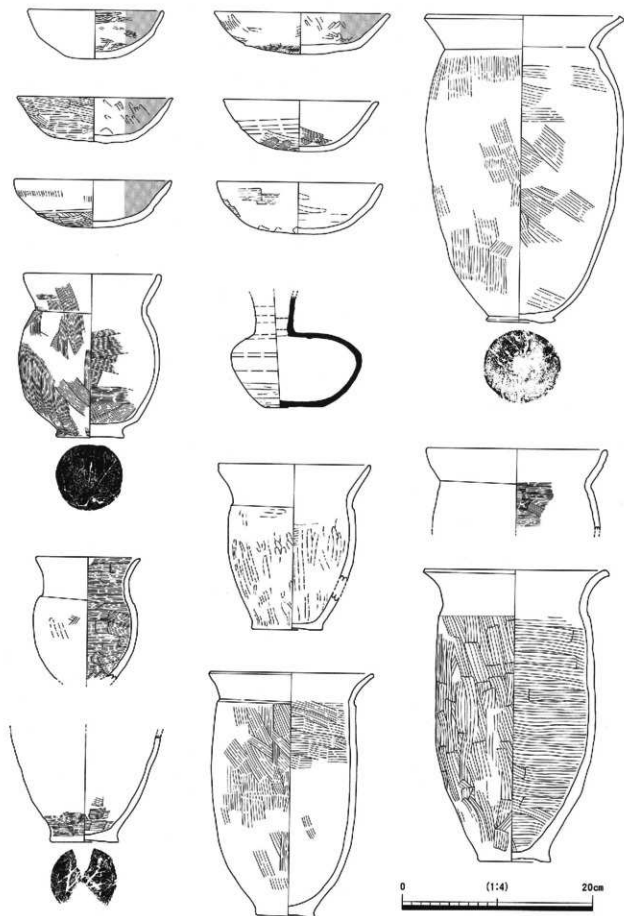


台太郎遺跡第26次RE038

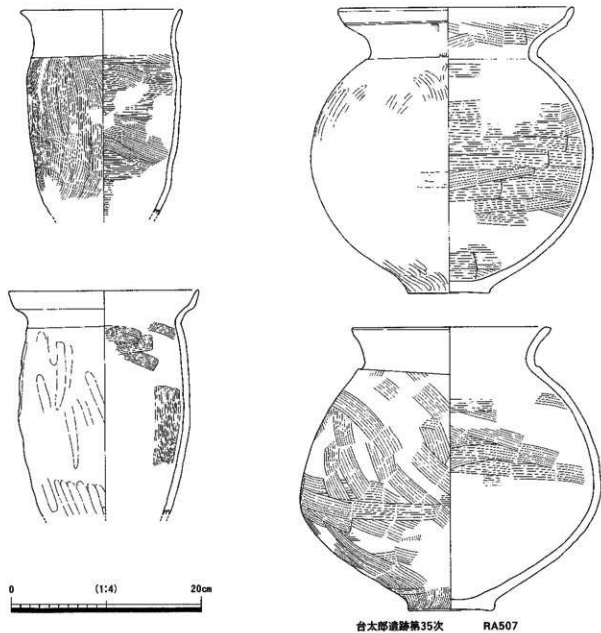


宮城県仙台市栗遺跡

第 61 図 RE038出土土師器・栗遺跡出土土師器



第 62 図 台太郎遺跡第35次出土土器①



第 63 図 台太郎遺跡第35次出土土器②

次にRA615、616の2棟の竪穴住居は、位置関係、形態、出土土器群ともに非常に近い関係にある。竪穴住居間距離は5mしか離れておらず、軸方向も同じである。平面的な規模は異なるが、深さやその埋土も非常に似ている。このような遺構の特徴からも近い時期に存在したことが推察される。この2棟から多量に出土した土器をみていくと遺構間で接合が認められる土器が存在する。RA615の床面直上出土の15土器器壺とRA616の埋土上層出土の25土器器壺が掲載遺物の中で唯一接合し、同一個体であることを確認した。この接合関係を層位でみると、RA615の床面が埋没していなかった時期にRA616はすでにある程度まで埋没が進んでいたとみられ、RA615よりRA616の方が古いと考えられる。また、これら土器群は先述したRA604よりも台太郎遺跡で多く見られる特徴を有する土器群である。現段階では7世紀中葉～後葉であると考えられる。

RD1182より関東系土器器壺が2点出土した。関東地方でも特に北関東の資料に類似性が認められる。同様の形態の壺が多く出土している埼玉県熊野遺跡では、畿内産土器器壺などもみられ、在地の土器も実年代が明らかになりつつある。編年を採用すると出土した関東系土器は7世紀第4四半期と考えられる。今回は在地の土器と併用していないため、在地の土器編年に反映できない。これは、岩手県域を超え南に位置する地域との何らかの交流が想定される貴重な資料である。

2 9・10世紀の遺構と遺物

ⅡA区RA614、RA605～612の9棟は平安時代に属すると考えられる。Ⅲ区で集中して検出した。竪穴住居の軸角は大きく異なることはないがカマドの設置方位は不統一である。台太郎遺跡では、近現代の削平のため古代の遺構を検出できる面はほぼ平坦である。しかしながら、発掘調査によって微地形を推定する手がかりもある。この手がかりは台太郎遺跡の基本層序にある。台太郎遺跡一帯でこれまでの調査で得られた基盤層のデータは有効である。削平などもありすべて一様ではないが、台太郎遺跡の基本層序は概ね以下の通りである。古代の遺構検出面は黒色のシルト層である。大半が後世の削平などにより失われている場合が多い。この層を本節では便宜上、「1層」と呼ぶ。1層より上位においても当然堆積が認められるが、いわゆる地山（無遺物自然堆積層）だけを対象としたためここでは割愛する。次に1層が漸移的に変化したと考えられる暗褐色のシルト層が1層の下位に認められ、これを「2層」とする。さらに、この下層には黄色のシルト層がみられ、これを「3層」とする。さらに下層には礫層があり、これを「4層」とする。台太郎遺跡では平安時代に属する竪穴住居の床は概ね4層の礫にまで達している点で一致する。さらに、検出される竪穴住居の埋土厚さは20cmを下回る場合が多い。しかし、前代である7～8世紀の竪穴住居の在り方とは異なる。これは、7～8世紀より平安時代は後世の削平を受け易いエリアに立地していたと推定される。すなわち、古代の旧地形において7～8世紀は比較的低い位置に居住域があり、平安時代は比較的高い位置に居住域が展開していたと考えられる。両者の分布域が大きく重ならない点もこのことを物語っている。このような現象の要因として考えられるのは、平安時代になり低地の耕作地利用が拡大したことや周辺環境の変化など様々な可能性が考えられるが、今後の課題としておきたい。

出土した土器は、概ね9世紀中頃～10世紀初頭までのものと考えられる。ただし、1点のみ9世紀前半のものと考えられる須恵器壺が出土している。また、土器器壺の中にも9世紀後半より古い特徴を有するものみられる。これまで台太郎遺跡ではこの時期の遺物はほとんど出土しておらず、空白期であった感も否めなかったが、まったく無いわけではないことが明らかになった。

平安時代の土器は用途および機能差として3形態に分類できる。前代と大きく異なるのは、技術的側面でも土器にもロクロの使用が認められる点、須恵器が一定含まれる点である。以上の2点はそ

それぞれ連動しているものとみられ、台太郎遺跡周辺の土器生産においては大きな両期となるものである。

供膳形態は坏が主体を占める。しかし、それに加えて碗と呼ぶことができるものも存在する。以上のように供膳形態に新しい器種が加わることは土器様式の中で重要な意味があると考えられる。

また、土師器坏には「木」と墨書あるいは刻書されたものが出土した。これらは、過去の調査においても多く出土しており、平安時代の台太郎遺跡のシンボリックな象徴と考えられる。

土器以外では古代の鉄製品や石製品も出土した。今回出土した鉄製品は鋤先など農耕具のみである。居住域の周辺で農耕が営まれていた証左であろう。

3 中世の遺構と遺物

これまでの発掘調査で検出された中世の遺構は墓塚、堅穴建物、掘立柱建物、堀などが挙げられる。これらの多くはおもに第15次調査、第23次調査、第26次調査において検出されている。これらの遺構のうち、今回の調査では堀を検出した。堀(RG264)は第15次調査において橋脚と考えられるピットが検出されている(RZ001)。これは堀北東コーナー付近に位置する。第23・26次調査でもRG264は検出されており大まかな形状が確認されている。この堀はおおむね不整な多角形を呈しながら全周していると考えられた。

今回の調査ではこのRG264の南側のラインをⅠ区とⅡ区で検出した。いずれも多角形の変化点付近である。

Ⅱ区では予想された通り現地割に沿ってコーナーを検出した。しかし、Ⅰ区ではこの堀がコーナーを持たず途切れることが判明した。よって、この途切れた部分は掘削当初より土橋状に残された部分である可能性が考えられる。これまでの調査で堀に伴う橋脚の痕跡も確認されているため、今後全体の構造について検討を加える必要がある。

また、堀から出土した遺物は、古代のものが埋土中に混入していたが、ⅡA区の堀埋土下層より1点陶器が出土した。この陶器は、体部下半～底部にかけての破片であるが、いわゆる瓷器系陶器の鉢あるいは甕である。胎土・色調・形態などから宮城県伊豆沼宮で生産されたものと考えられ、時期は13後半～14世紀前半であると考えられる。よって、この堀の機能した時期はおおよそ14世紀を前後するあたりであった可能性が高く、堀内部に居た集団を考える上で重要な手掛かりとなりうる。また、出土遺物は時期不明の溝であるがⅠ区では龍泉窯産青磁碗片が1点出土している。先の陶器と同時代の資料であり、居館と関係する遺物であると考えられる。現段階で想定されている氏族は葛西氏やその近臣飯岡氏などとされているが、詳細は不明である。

4 ま と め

今回の調査では、古代の集落および中世の堀の様子がこれまでの調査以上に明らかになった。古代では、奈良時代(一部奈良以前)と平安時代の2時期の遺構を確認した。

奈良時代の堅穴住居が多く存在するエリアで3棟の堅穴住居を調査した。そのうちRA604は、大規模に展開、発展するこの地域の古代集落の中でも最古段階の堅穴住居である可能性が考えられる。この時期は出土遺物の検討より7世紀前半～中葉が想定される。この堅穴住居は台太郎遺跡の集落開始時期のものであり、同時期と考えられる数棟の堅穴住居とともにこの集落を成立させた集団の居するものであると思われる。その集団の性格については現段階では不明である。しかし、周辺の集落開始よりも古いことから、少なくともこの地に拠点を置き、その後周辺を含めた大集落群の発端となった

集団であると言える。また、台太郎遺跡では関東系土師器が出土することから、少なくとも東北南部や関東地方と何らかの密接な繋がりが想定され、このことも周辺の諸集落の中でも台太郎遺跡の集落が中心的な集落であったということを示唆するものであろう。

一方、平安時代には、「木」という墨書・刻書土器を多く持つ集団であることを述べたが、それ以外に他の周辺集落と比べて突出するような特性は、現在のところ竪穴住居や遺物から見いだすことはできない。9世紀初頭に志波城が台太郎遺跡の北に造営された後に台太郎遺跡の特性が見いだせないのは志波城の成立と関係があるのかは今後の課題である。

最後に中世の台太郎遺跡は堀をもつ居館が登場する。隣接遺跡である向中野館との関連性が注目される。どのような人々が居したのかは未解明であるが、大規模な堀や出土する輸入陶磁器や国産陶器などの資料より在地において盟主的な立場にあった氏族であろう。

(注)

宮城昭における土師の年代観は村田晃一氏、八戸における土師の年代観については宇部副保氏からそれぞれご教示いただいた。

引用・参考文献

- 高橋義介¹⁾ 1999 『台太郎遺跡第15次発掘調査報告書』岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第309集(財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター
- 高橋義介・金子佐知子²⁾ 2001 『台太郎遺跡第18次発掘調査報告書』岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第369集(財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター
- 杉沢昭太郎³⁾ 2003 『台太郎遺跡第23次発掘調査報告書』岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第415集(財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター
- 杉沢昭太郎⁴⁾ 2003 『台太郎遺跡第26次発掘調査報告書』岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第416集(財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター
- 西澤正晴⁵⁾ 2003 『台太郎遺跡第35次発掘調査報告書』岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第417集(財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター
- 宇部副保 2002 『東北北部型土師器にみる地域性』『海と考古学とロマン—市川金丸先生古希記念献呈論文集—』市川金丸先生古希を祝う会
- 杉沢昭太郎 2003 『中世の盛岡市向中野—向中野館・台太郎遺跡の発掘調査成果から—』『紀要XXII』(財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター

Ⅵ 考察—台太郎遺跡出土の古代土器における器種細分—

1 はじめに

これまでの台太郎遺跡の発掘調査で得られた資料は、盛岡市域で質・量ともにもっとも充実した古代の集落遺跡であると言える。特に600棟からなる堅穴住居群、それに伴う膨大な土器類である。これら遺構および遺物は大きく分けて2時期に分かつことができる。この画期は、北上川流域における共通する古代の一大画期である9世紀を前後する時期である。9世紀に入ると北上川流域には、水沢市の胆沢城や盛岡市の志波城が成立し、このような城柵の成立が政治や文化に大きな変化をもたらすとされている。このような歴史観と照らし合わせると、これまでの土器研究においてもこの画期を見出すことができる。例えば、この地域に9世紀を前後する時期において急速に須恵器が普及し始めるとされていることなど、歴史的現象と考古資料との対比がおこなわれている。しかし、このような画期において土器の器種が変化している点についてはあまり触れられることはない。したがって、本稿では7～10世紀に至る台太郎遺跡出土の土器について9世紀以前と以後で器種分類を細かにここない、その分化した器種の変化と画期について若干の考えを述べたい。

2 志波城成立以前の土器

台太郎遺跡では、9世紀初頭の志波城成立以前の土器は7・8世紀のものが該当する。以下本稿では、I期とする。この時期の土器群には須恵器はほとんど含まれず、土師器が主たる土器である。これら土師器を機能・用途により3形態に分類すると、供膳形態・煮沸形態・貯蔵形態に分けることができる。これらについて順次特徴について概観する。

供膳形態の器種では、坏が代表格であるが、ほかには高坏や鉢などもこれに加わる。

[土師器坏]

まず、供膳形態の中で圧倒的な量を誇る坏であるが、台太郎遺跡では供膳形態の約8割がこの坏である。

形態は、口縁部と底部との間である体部に段・稜・沈線を有し、それをもって上部と下部に分けることができる。法量は規格性に乏しいながらも、大・中・小の3形態に分けることができる。底部は丸底あるいは丸底風で、糸切りやヘラ切り等の痕跡はみられない。

成形は、基本的に粘土紐輪積みや粘土紐巻き上げなどの成形によると考えられる。ただし、体部の段などは成形時に傾きの変化点として捉えられている可能性がある。

調整は、ロクロ等の横方向の回転力による痕跡はみられず、ロクロを用いない調整がおこなわれているようである。内面にはミガキが施され、外面にはヘラケズリやハケなどの調整がみられる。まれに、外面にもミガキが施されることがあるが、ごくわずかである。なお、外面調整のヘラケズリおよびハケは、「同一工程・同一工具・同一目的・別痕跡」の調整である可能性も十分考えられる。もし、そうならば、単なる個体差による調整痕跡差にほかならず、あくまでも現代に残る痕跡が違うだけである可能性が考えられ、注意を要する。

焼成は、土師器通有の焼成である。しかし、土器の色調差で大まかに2種類に分けられる。一つは黄橙色系の比較的濃い色調のもので、一つは灰白色系の比較的淡い色調のものである。両者の差は、どのような状況で現れるのかわからないが、焼成という工程で差が出現する可能性が高いと考えられ

る。また、内面はミガキが施されているため、調整とセットで内面黒色処理がおこなわれる。黒色処理されているため、破断面では処理された内面側に炭素の吸着が浸透している様子が観察できる。黒色処理とは別に、外面には必ずといっていいほど比較的大きな黒斑がみられることも特徴的である。また、口縁部には内面から連続して外面にもいくらか黒色処理が及んでいることも付け加えておく。坏の用途については、詳細な分析が必要であるため断定はできないが、内面が黒色処理されていることから液体の盛り付けにも適していたと考えられる。

[土師器高坏]

次に高坏は、台太郎遺跡では通常の坏に比べると数量的にかなり少数である。供膳形態全体数の1割程度といったところであろう。

形態は、坏体部に段や稜を持ち、基本的に通常の坏と大きく変わらないが、通常の坏よりもやや深い碗形のものが多い。脚部は高い台形を呈し、坏部と同じように中位に段や稜を持つ例が多い。脚部の高さは、坏部の器高を大きく凌駕することはなく、同程度の高さかそれよりも低いことが多い。台太郎遺跡で出土する高坏の形態的特徴は、規格性に乏しく「一個体・一形態」といった感が強い。大きさも一様ではない。

成形は、坏部と脚部と別でおこなわれる。別成形された後、坏部と脚部は接合される。坏部・脚部ともに基本的には粘土紐輪積みや粘土紐巻き上げで成形されている。

調整は、坏部においては通常の坏と同じである。内面はミガキが施されている。工具を用いた調整はナデ等の調整で消されていることが多い。

焼成は、土師器通有の焼成である。坏部は内面黒色処理されている。坏と同じく土器の色調差で大まかに2種類に分けられ、黄褐色系の比較的重い色調、灰白色系の比較的重い色調とに分けられる。また、外面の黒斑もほぼ漏れなくみられる。

高坏の用途については、坏同様断定はできないが、内面が黒色処理されていることから液体の盛り付けにも適していたと考えられる。ただし、坏と大きく異なるのは出土総量が非常に少ないことである。台太郎遺跡で出土した古代土器群は、堅穴住居内から出土したものが圧倒的多数を占め、検出された遺構も堅穴住居が主を占めることを考えると居住域内での使用頻度が低い器種である可能性が考えられる。あるいは、日常生活必須の器種ではなく、「特別な時・特別な場」で使用される特別な器種であるのかもしれない。汎日本的な高坏の使用法である儀器としての用途と共通するのかもしれない。

[土師器鉢]

鉢も高坏と同様に量的には圧倒的劣勢の器種である。高坏と同様に供膳形態の中で約1割程度の稀少器種である。今回の第54次調査では、RA615より1点のみ出土している。

形態は、大形の坏といった様子で、口径がおおよそ20cm以上である。器壁は厚く、体部には段・稜・沈線などの区画が巡る。

成形は、その他の器種と同様、基本的に粘土紐輪積みや粘土紐巻き上げなどの成形によると考えられる。

調整は、内外面ともにハケが施されており、調整の面からみれば、坏よりも甕などに近い比較的重い調整である。これは胎土の粗さも甕などと共通する。この器種に内面にミガキが施されていれば、坏と相似形であるため坏との区分が困難であるが、内面調整が異なる点をもって器種差とすることが可能である。

焼成は、土師器通有の焼成である。坏とは異なり、内面は黒色処理されていない。

鉢の用途については不明な点が多く、供膳形態と断定することも難しい。しかし、明確に煮沸の痕跡

がみられるものを確認していないため、現段階では供膳形態と分類し、器種名も「鉢」とした。今後、資料が増加して煮沸痕跡が明瞭なこの形態の土器が一定量確認されれば、供膳形態「鉢」を転じて煮沸形態「鍋・塀・なべ」とすることとなるかもしれない。これは、煮沸形態との共通点を多く有するため可能性が高いと考えられる。しかし、供膳形態とすると黒色処理がされていないため内向の緻密さが得られない。したがって、液体の内容物は不向きである。現代の感覚ではサラダボールといったところであろうか。

次に煮沸形態の器種は、大小の差はあるが壺が代表である。直接被熱を受けないが、壺とセットで用いられると考えられている「甗」も仲間に入るのである。

[土師器壺]

形態は、長胴形を呈するいわゆる「長胴壺」・「長壺」と呼ばれる器種である。やや古い一群の中には、体部がやや膨らむが壺ほどの膨らみは持たない、大きな口径を持つ形態の壺もある。底部は平底であり、体部は下半が窄まるが、上半は比較的直立気味である。頸部は段・稜・沈線などが巡り、口縁部との境を持つ。頸部や口縁部の段・稜・沈線は多条のものもみられる。口縁部は外傾あるいは外反し、口縁端部は丸く取られるものと端面を持つものの2種ある。また、口縁部が受け口状になるものも一定量含まれる。法量は大きく分けて大・小あり、大半が大形である。

成形は、基本的に粘土紐輪積みや粘土紐巻き上げなどの成形によると考えられる。器表面あるいは破断面にて輪積みの痕跡が確認できるものも少なくない。ただし、器壁の薄いものと、厚いものの2種が認められる。底部は完全に平底のものもあるが、やや上げ底風になっているものもあり、これは輪状のものを基部として成形しているものもあると考えられる。

調整は、体部外面が縦方向に工具を用いた調整、体部内面が横方向に工具を用いた調整である。ハケ・ヘラケズリ・ヘラナデを代表に、まれにミガキが認められるものもある。坏の場合と同様に「同一工程・同一工具・同一目的・別痕跡」の調整である可能性が考えられる。縦方向・横方向の使い分けは、粘土紐の接着を確実にこなうことを意識したものと考えられる。口縁部はヨコナデが施されているが、横方向の条線が明瞭なものが多くみられる。ヨコナデの当て具としてバックスキンなどではなく、木綿などの布が用いられている可能性が考えられる。また、すべてにおいてロクロ等の回転力は用いられていない。

焼成は、土師器通有の焼成である。内面は黒色処理されない。体部には設置痕跡の黒斑や棒状黒斑が認められる。坏類と同じく土器の色調差で大まかに2種類に分けられ、黄橙色系の比較的濃い色調、灰白色系の比較的淡い色調に分けられる。これらは焼成環境の2セットであるのかもしれない。

壺の用途は煮沸である。外面のススや内面のコゲなど大・小ともに煮沸痕跡が認められることが多い傾向である。小形壺の場合は、煮沸施設であるカマドとはミスマッチであると思われるため、大形壺との使い分けがなされていた可能性が考えられる。また、先述した体部にやや膨らみを持つ壺との中間的形態の器種にも煮沸痕跡がみられるものが多いため、壺の一種であると理解している。

[土師器甗]

成形・調整・焼成など、多くの点で壺とほぼ同じである。壺と異なる点は、底部が穿孔されている、あるいは底部そのものが無く中空の形態であるかという底部の形態差である。壺よりやや小振りなものが多く傾向である。壺の上に重ねられて使用するものと考えられる。

貯蔵形態は基本的に壺の一種のみである。壺が転用されて貯蔵形態として使用されることも想定されるが、原則的には壺が唯一の貯蔵形態であると考えられる。

〔土師器壺〕

形態は、球胴形を呈するいわゆる「球胴壺」・「丸壺」と呼ばれる器種である。ここで、壺ではなく壺としたのは、古代の土器について様式的見地に立てば煮沸形態は「壺」、貯蔵形態は「壺」と呼称すべきであると考えためである。そのため「壺」は本書を通して一貫して用いてきた。胴部が膨らみ、底部と頸部で窄まる形状を呈する。やはり、頸部には段・稜が巡る点は、その他の器種と同様である。口縁部は外傾あるいは外反する。やや古い一群の壺は、算盤玉形の体部のものも存在する。

成形は、基本的に粘土紐輪積みや粘土紐巻き上げなどの成形によると考えられる。器表面あるいは破断面にて輪積みの痕跡が確認できるものも少なくない。この痕跡をみると、何段階かに積み上げの休止点が認められる。底部から大きく外に開きながら粘土を積み、その休止点から積み上げ角度を内に向けている。頸部に近いところでさらに角度を内に向け積み、頸部から口縁部にかけてもう一度角度を外に向けて積み上げている。このような成形方法によって算盤玉形の体部形状になるようである。球胴形の壺は、その休止点および変化点が顕著ではない傾向である。底部は、壺と同様に完全平底のものもあるが、やや上げ底風になっているものもあり、これは輪状のものを基部として成形しているものもあると考えられる。

調整は、体部外面が縦方向に工具を用いた調整、体部内面が横方向に工具を用いた調整が基本である。ハケ・ヘラケズリ・ヘラナデを代表に、まれにミガキが認められるものもある。しかし、壺とは異なり、成形の休止点および変化点においては調整方向に変化があり、複雑に施される傾向が認められる。これは粘土紐の接着を確実に起こすことを意識したものと考えられる。調整については坏や壺の場合と同様に「同一工程・同一工具・同一目的・別痕跡」の調整である可能性が考えられる。口縁部は壺と同じくヨコナデが施されているが、横方向の条線が明瞭なものが多くみられる。ヨコナデの当て具としてバックスキンなどではなく、木綿などの布が用いられている可能性が考えられる。また、すべてにおいてクロク等の回転力は用いられていない。

焼成は、土師器通有の焼成である。内面は黒色処理されない。体部には設置痕跡の黒斑や棒状黒斑が認められる。坏や壺と同じく土器の色調差で大まかに2種類に分けられ、黄橙色系の比較的濃い色調、灰白色系の比較的淡い色調に分けられる。やはり焼成環境の2セットであるのかもしれない。壺の用途は貯蔵である。体部が膨らみ、頸部が括れるため貯蔵に適した形状とすることができる。また、出土する壺には煮沸痕跡が認められないことも貯蔵目的で作られた器種であることの証左であろう。ごくまれに、2次的な焼成痕跡が認められるものもあるが、極端に少ない事例であるため少数回の煮沸転用に終了した程度であると考えられる。ちなみに壺という器種は土器では存在しないため、その他の素材の蓋が壺に用いられたのかもしれない。

〔その他〕

出土数は少ないが、台太郎遺跡では関東系土師器が存在する。これまでは坏のみの出土である。土師器以外で若干量の須恵器が認められる。器種は坏、提瓶、平瓶、壺などが出土している。他地域から搬入されたものであると考えられる。

以上、台太郎遺跡での志波城成立以前の7・8世紀の上器を器種分類した。器種は以下の通りである。供膳形態は「坏」・「高坏」・「鉢」、煮沸形態は「壺」・「甗」、貯蔵形態は「壺」、その他数種の他地域からの搬入された土器が認められる。概ねこの地域の土器はこれらの土師器の器種（形式）から成り立っている。これらは、居住域で出土したものである器種セットであるため日常生活と大きく関わるものと想定される。

3 志波城成立以後の土器

台太郎遺跡では、9世紀初頭の志波城成立以前の土器は9・10世紀のものが該当する。以下本稿ではⅡ期とする。この時期の土器群には前代と異なり、新たに須恵器が加わる。以後、土師器と須恵器が主たる土器として使用される。これらを前代と同じく機能・用途により3形態に分類すると、供膳形態・煮沸形態・貯蔵形態に分けることができる。ちなみに、前代と土器は変わるが、遺構にみられる生活形態については基本的に変化がみられないことを断っておく。これらについて順次特徴について概観する。

供膳形態の器種では、坏・埴などがある。これらの区分は難しいが、本稿では坏と埴は基本的に同じ器種とする。坏は土師器と須恵器の両方に認められる器種である。また、底部に高台が付くものと付かないものに分かれる。前者は「高台付坏」とし、便宜上後者と区別する。

〔土師器坏〕

形態は、前代の坏とは異なり全体的に丸みが失われ、平底の底部から口縁部まで比較的直線的に外傾する形態である。法量は比較的規格性に富む。後述するが、黒色処理されるものとされないものがあり、黒色処理されるものは体部にやや丸みがあることが多いが、処理されないものは体部の丸みが少ない傾向である。これはミガキ調整に起因するものなのかもしれない。

成形は、基本的に粘土紐輪積みや粘土紐巻き上げなどの成形がロクロによる水挽き風の成形が考えられるが、現段階では決し得ない。底部には回転糸切りの痕跡が残るものが多いが、調整で消される場合もある。

調整は、ロクロ等の横方向の回転力による痕跡が明瞭で、ロクロを用いた調整がおこなわれる。内面にミガキが施される内黒のもの、内外面ともに施される両黒のもの、内外面ともにミガキが施されないものの3種がある。本稿ではそれぞれ、内黒は「土師器坏A類」、両黒は「土師器坏B類」・「土師器坏C類」（いわゆる、あかやき土器）とする。A類とB類は体部外面の最下部にヘラケズリなどの調整がみられる場合があるが、C類はこの調整はみられない。この調整は、底部の糸切り痕を消す調整と連動している場合が普通である。

焼成は、いずれも土師器通有の焼成であるが、前代よりも良好で堅緻である。

土師器坏A類は、前代の土師器と異なり色調差はあまりみられず、黄橙色系の比較的濃い色調で安定している。内面はミガキが施されているため、調整とセットで内面黒色処理がおこなわれる。外面には黒斑はほとんどみられないが、まれに薄く小さな斑がみられる場合がある。

土師器坏B類は、内外面ともにミガキが施されているため、調整とセットで内外面ともに黒色処理がおこなわれる。内外面ともに黒色処理され、その全体が黒色であるためその他の様子は窺い知ることができない。

土師器坏C類は、個体によって若干の色調差がみられる。黄橙色系の比較的濃い色調から灰白色系の比較的淡い色調のものまである。中には一部還元が進んでいるものもみられる。このような差は、どのような状況で現れるのか不明であるが、焼成という工程で差が出現する可能性が高いと考えられる。また、黒斑がまったくみられないことも特徴的である。

土師器A類とB類はともに黒色処理されているため、破断面では処理された面側に炭素の吸着が浸透している様子が観察できる。

土師器坏の用途については、詳細な分析が必要であるため断定はできないが、黒色処理されているものは液体の盛り付けにも適していたと考えられる。しかし、黒色処理されない土師器坏C類は、若干用途が異なっていたのかもしれない。

[土師器高台坏]

形態は、平底の坏底部に高台が付く以外は同じ形態である。坏とは異なり、法量は通常の坏と同じものと通常の坏より浅いものの2種がある。

成形についても、基本的に坏と同じである。高台は、坏の成形後に貼り付けられる。底部には回転糸切りの痕跡が残すものと、高台貼り付けの際に消される場合もある。

調整は、坏同様にロクロ等の横方向の回転力による痕跡が明瞭で、ロクロを用いた調整がおこなわれる。内面にミガキが施される内黒のもの、内外面ともに施される両黒のもの、内外面ともにミガキが施されないものの3種がある。それぞれ、内黒は「土師器高台付坏A類」、両黒は「土師器高台付坏B類」・「土師器高台付坏C類」（いわゆる、あかやき土器）とする。

焼成は、土師器坏と同じである。

土師器高台付坏A類は、色調差があまりみられず、黄橙色系の比較的濃い色調で安定している。内面はミガキが施されているため、調整とセットで内面黒色処理がおこなわれる。外面には黒斑はほとんどみられないが、まれに薄く小さな斑がみられる場合がある。坏部は通常の坏よりも浅いものでは占められる。

土師器高台付坏B類は、内外面ともにミガキが施されているため、調整とセットで内外面ともに黒色処理がおこなわれる。内外面ともに黒色処理され、その全体が黒色であるためその他の様子は窺い知ることはできない。坏部は通常の坏と同じ深さのものでは占められる。

土師器高台付坏C類は、個体によって若干の色調差がみられる。黄橙色系の比較的濃い色調から灰白色系の比較的淡い色調のものまである。中には一部還元が進んでいるものもみられる。このような差は、どのような状況で現れるのか不明であるが、焼成という工程で差が出現する可能性が高いと考えられる。また、黒斑がまったくみられないことも特徴的である。坏部は通常の坏と同じ深さのものでは占められるが、まれに通常の坏よりも浅いものもみられる。

土師器高台付坏A類とB類はともに黒色処理されているため、破断面では処理された面側に炭素の吸着が浸透している様子が観察できる。

土師器高台付坏の用途については、土師器坏とは異なったかどうか不明である。

[須恵器坏]

形態・成形・調整ともに土師器坏C類とほぼ同じである。異なるのは、還元焼成である点で、土師器坏C類にみられる木炭の酸化焙焼成色調と、しばしばみられる一部還元焙焼成色調が逆になっている場合があることである。

須恵器坏の用途については、詳細な分析が必要であるため断定はできないが、黒色処理されている坏同様に液体の盛り付けにも適していたと考えられる。基本的には、土師器坏C類と大差ないと考えられる。

次に煮沸形態の器種は、前代同様に大小の差はあるが壺が代表である。ロクロを用いないものを用いるもの両方みられる。本稿では、前者を「土師器壺A類」、後者を「土師器壺B類」とする。ほかに、「鍋・塀・なべ」と呼ぶべきものもわずかにみられる。

[土師器壺A類]

形態は、前代と同様に長胴形を呈する。底部は平底であり、体部は下半がやや窄まるが、上半は比較的直立気味で、概ね寸胴である。頸部は括れが弱く暖味なものが多い。口縁部は外傾あるいは外反する。法量は大きく分けて大・小あり、大半が大形である。形態・法量ともに個体差によるばらつきがみられ、規格外に乏しい。

成形は、基本的に粘土紐輪積みや粘土紐巻き上げなどの成形によると考えられる。器表面あるいは破断面にて輪積みの痕跡が確認できるものが多い。底部は完全に平底で木葉痕や砂を残すものが多い。底部の厚みは他の器種にみられないほど厚手でしっかりしている。胎土は、比較的大きめの砂粒が多く粗い。砂粒は、あるいは混和材として混入されている可能性も考えられる。

調整は、体部外面が縦方向に工具を用いた調整、体部内面が横方向に工具を用いた調整である。ハケ・ヘラケズリ・ヘラナデが認められる。前代の場合と同様に「同一工程・同一工具・同一目的・別痕跡」の調整である可能性が考えられる。しかし、胎土が粗いためかなりの高確率でヘラケズリとみることができ。縦方向・横方向の使い分けは、粘土紐の接着を確実にこなうことを意識したものと考えられる。口縁部はヨコナデが施されているが、前代に比べ横方向の条線が不明瞭である。ヨコナデの当て具としてバックスキンなどが用いられている可能性が考えられる。また、すべてにおいてロクロ等の回転力は用いられていない。

焼成は、土師器通有の焼成である。内面は黒色処理されない。体部には設置痕跡の黒斑や棒状黒斑が認められる。前代と異なり色調は、赤褐色から黄橙色系の比較的重い色調のものが大多数を占め、灰白色系の比較的重い色調のものが客体的である。

甕の用途は煮沸である。前代同様外面のススや内面のコゲなど大・小ともに煮沸痕跡が認められることが多い傾向である。小形甕の場合は、煮沸施設であるカマドとはミスマッチであると思われるため、大形甕との使い分けがなされていた可能性が考えられる。しばしば、小形甕は反転されてカマド燃焼部で据え置かれた状況で出土することがある。支脚として転用されたと推定される。

〔土師器甕B類〕

形態は、土師器甕A類と同様に長胴形を呈するが、A類よりもやや柔らかな曲線を描き、胴部に膨らみを持つ。底部は平底であり、体部は下半がやや窄まる。口縁部は外傾あるいは反外する。口縁端部は、上方につまみ上げられるものが多くみられる。法量は大きく分けて大・小あり、大形のものとは体部上半で窄まり、全体的に楕円形を呈するが、小形のものとは上半が比較的重直気味である。形態・法量ともに土師器甕A類ほど個体差によるばらつきはみられず、より規格性に富んでいる。

成形は、基本的に粘土紐輪積みや粘土紐巻き上げなどの成形によると考えられる。底部は完全に平底で回転系切りの痕跡や砂底のものも存在する。

調整は、体部はロクロなどによる回転力を用いた横方向の調整がおこなわれ、ロクロ口が明瞭である。また、体部には1次的な調整としてタタキがみられるものもあるが、ロクロを用いる調整で消えることが多いため顕著に残存する例は少ない。それ以外に、体部外面下半には縦方向に工具を用いた調整、体部内面が横方向に工具あるいは指を用いた調整である。これらはハケ・ヘラケズリ・ヘラナデである。口縁部はヨコナデが施されている。土師器甕A類同様、ヨコナデの当て具としてバックスキンなどが用いられている可能性が考えられる。

焼成は、土師器通有の焼成である。体部には黒斑はあまり認められない。色調は、黄橙色系の比較的重い色調のものが大多数を占め、灰白色系の比較的重い色調のものが客体的である。

この甕の用途も煮沸である。土師器甕A類と同様に外面のススや内面のコゲなど大・小ともに煮沸痕跡が認められることが多い傾向である。小形甕の場合は、煮沸施設であるカマドとはミスマッチであると思われるため、大形甕との使い分けがなされていた可能性が考えられる。しばしば、小形甕は反転されてカマド燃焼部で据え置かれた状況で出土することがある。支脚として転用されたと推定される。

〔土師器甕〕

成形・調整・焼成など、多くの点で土師器甕とほぼ同じである。甕と異なる点は、底部が穿孔されている、あるいは底部そのものが無く中空の形態であるかという底部の形態差である。甕よりやや小振りなものが多い傾向である。甕の上に重ねられて使用するものと考えられる。取っ手が付けられることもある。

貯蔵形態は基本的に甕の一種のみである。甕が転用されて貯蔵形態として使用されることも想定されるが、原則的には甕が唯一の貯蔵形態であると考えられる。

〔土師器鍋〕

成形・調整・焼成など、多くの点で土師器甕B類とほぼ同じである。甕と異なる点は、鍋形の広くて浅い形態である。用途は判然としないが、ススが認められる例が多いため煮沸形態であると考えている。出土数は決して多くないため、この時期の土師器様の必須器種であったとは考えがたい。

この時期の貯蔵形態は基本的に須恵器がその役目を担っていると考えられる。しかし、一部補助的に土師器の器種も貯蔵形態として存在するようである。これは土師器甕B類と同じ形状で内面にミガキ調整が施され、黒色処理されたものである。内黒であるために、煮沸には適さない。もし、煮沸すれば内面黒色処理の炭素は飛んでしまうと考えられる。また、煮沸形態の土師器の内面にミガキを施し、緻密に仕上げる必要性はない。この内黒の土師器甕B類は、貯蔵形態として土師器甕と呼ぶべきであろう。また、同じように内黒で、口が広く開き、小形の土師器甕より浅いものは供膳形態とし、土師器鉢としてもよいかもしいない。

須恵器の中で甕(瓶)・甕などのいわゆる袋物と呼ばれるものが該当するであろう。前代と異なり須恵器が貯蔵形態を担うようになり、結果的に大小様々な形態に分化している。大まかに甕は形状によって分化し、甕は法量によって分化しているという特徴が挙げられる。

〔須恵器甕〕

形態は、細分をおこなうと長頸甕・広口甕・短頸甕などに分けられる。これらのうち、長頸甕がもっとも多く出土する。いずれの器種も高台が付くものと付かないものがある。

成形は、基本的に粘土紐輪積みや粘土紐巻き上げなどの成形によると考えられる。

調整は、ロクロによる調整と体部外面下半の縦方向あるいは斜め方向に工具を用いた調整が基本である。この工具を用いた調整はヘラケズリとみえる場合が多い。まれに下半のヘラケズリはロクロを用いた回転ヘラケズリが施されていることがある。口縁端部は上部につまみ上げられるような形状を呈するものが多い。この器種の口縁部は比較的凝った意匠であることが多い。

焼成は、須恵器通有の還元焰焼成である。青灰色を呈し、堅致に焼かれている。

須恵器甕の用途は貯蔵である。形状も体部が膨らみ、頸部が括れるため貯蔵に適した形状と言える。しかし、須恵器甕や前代の土師器甕などに比べると容量が小さい。

〔須恵器甕〕

形態は、球胴で丸底を基本とし、口縁部は甕より短い形態である。大小様々な法量のものがあり、様ではない。

成形は、粘土紐(帯・板)輪積みや粘土紐(帯)巻き上げなどの成形によると考えられる。大形のものは成形の休止がみられる場合もある。

調整は、外面にはタタキ目が残り、内面は当て具痕が残る。タタキには平行タタキが多く、当て具痕には無文・有文様々である。

焼成は、甕と同じく須恵器通有の還元焰焼成である。青灰色を呈し、堅致に焼かれている。

須恵器甕の用途はやはり貯蔵であるが、何を貯蔵したのかは定かではない。液体・穀物いずれにも対応できると考えられる。

以上、各時期の器種をまとめると以下の通りである。

I 期

「供膳形態」・・・土師器坏、土師器高坏、土師器鉢

「煮沸形態」・・・土師器甕、土師器甌

「貯蔵形態」・・・土師器壺

II 期

「供膳形態」・・・土師器坏A～C類、土師器高坏A～C類、土師器鉢、須恵器坏、土師器鉢

「煮沸形態」・・・土師器甕A・B類、土師器甌、土師器鍋

「貯蔵形態」・・・須恵器壺、須恵器甕

4 器種の変化と画期

台太郎遺跡での9世紀初頭の志波城成立以前と以後の土器の器種分類と各器種の諸特徴について思い付くままに羅列したが、従来の見解通り志波城成立期の以前のI期と以後のII期では土器様式が大きく変わっていることがわかる。この変化について形態ごとでまとめ、その歴史的意義について私見を交えながら述べてみたい。

〔供膳形態〕

前後を通じて坏が主体であることに変わりはないが、志波城成立以前のI期では土師器坏が主である。それに対して、以後のII期では須恵器坏と土師器坏が併存し、特に、土師器坏にロクロが用いられるようになる。さらに、土師器坏は急激に器種を分化させ、高台付坏など新たな器種が生まれる。また、I期にあった高坏はII期には消えてしまい、姿をみせない。高坏が高台付坏に型式変化したとも考えられるが、現段階では両者の形態差が大きく、高坏から高台付坏への型式変化を辿ることは不可能である。また、黒色処理は両時代ともにみられる。

〔煮沸形態〕

前後を通じて土師器甕であることに変わりはないが、坏と同じように、以前では土師器、以後では土師器A類とB類が併存する。

〔貯蔵形態〕

以前では、球胴の土師器壺が担っていたが、以後は球胴の土師器壺が消え須恵器の袋物が一手に担うようになる。

〔3形態共通〕

I期からII期へ時代が移ると須恵器が普及し、土師器にもロクロ技術が導入されるが、従来の非ロクロ土師器は甕だけが存続する。同時に、ロクロ技術が用いられる土器は規格性が増し、用いられない土器は規格性が乏しい。

I期と比べて以後では土器の色調が安定し、体部などの黒斑が消える、もしくは縮小化する傾向にある。これは焼成技術の発達によるものと考えられる。

以上のような結果から、I期からII期にかけて土器の大きな変化が認められる。

まず、土器の使用に関する側面では、I期からII期になっても基本的な3形態はそれぞれ備わって

おり、大きな変化は認められない。しかし、個別にみると確実に変化はみられる。供膳形態では高坏の消滅や坏における新器種の加入、煮沸形態ではロクロが用いられた土師器甕B類が加わり、貯蔵形態においては土師器壺から須恵器が用いられるようになる。また、共通の変化として規格性の高い高品質できれいな土器が増加する。この中で、大きな変化は高坏の消滅・ロクロ土師器の登場・貯蔵形態の土器の転換であろう。

高坏は、これまでの研究で、8世紀後半までにはすでに消滅していると考えられている。したがって、Ⅰ期とⅡ期の大きな画期によって消滅するものではなさそうである。この高坏の消滅は、汎日本的にみれば6・7世紀における高坏は葬送儀礼など祭祀用である。この高坏が消えるのは祭祀の在り方にくらかの变化が起きた可能性が考えられる。

次にロクロ土師器の登場は、ロクロを用いるというⅠ期にはなかった技術革新である。この特殊な技術は、ロクロ技術を活用する須恵器生産の開始と大きく関わると考えられる。すなわち、ロクロ土師器の登場は、須恵器生産技術の援用によるものと推測される。

さらに、貯蔵形態の転換は、周辺で須恵器の貯蔵形態が生産され始め、集落にも供給されることによって土師器壺が駆逐されるとみるべきである。

このようにⅠ期からⅡ期への変化をみると、どの変化も土器の生産が背景に関わるものばかりである。特に、集落周辺での須恵器生産が大きな要因として考えられる。志波城成立によって人や土器を取り巻く環境が大きく変わったことは確かである。では、どのように、前述したような変化や流れができたのであろう。推測を含め説明すると、以下の通りである。

志波城が成立することにより、土器の需要が増大し、同時に須恵器生産が開始される。台太郎遺跡でも志波城成立以前のⅠ期よりも成立以後のⅡ期の方が集落は拡大し、堅穴住居の数も増加する。このことは、これまでもしばしば人口の増加ととらえられている。これは、周辺集落も同様の傾向である。台太郎遺跡を含め周辺域の調査では、Ⅰ期の集落遺跡が単独で見つかることは少なく、Ⅱ期の集落遺跡でもあることが常である。それとは反対に、Ⅰ期の集落がなく、Ⅱ期の集落のみが見つかる遺跡の例は多い。このことから志波城成立と周辺集落の動向が大きく関わっていると推察できる。

次に須恵器生産体制が確立し、軌道に乗り、そして盛行すると台太郎遺跡のような集落への須恵器供給もおこなわれるようになる。Ⅱ期になるとどの集落でも、堅穴住居より須恵器が普遍的に出土することからも容易に推定できる。

さらに、須恵器生産開始に伴って土師器生産も技術革新を迎える。これまでの非ロクロ技術から大半の土師器はロクロ技術が導入され、焼成技術の向上も出土する製品から看取できる。集落でも須恵器とロクロ技術によって生産された良質な土師器が主たる土器となるのである。

しかし、一方で土師器甕A類のような非ロクロの土師器甕も出土する。これは、集落のさらなる拡大による需要過多、ロクロ土器生産そのものの衰退なのかわからないが、おそらく、ロクロ製品の不足を非ロクロ製品で補ったためであったのではないだろうか。これに関しては、以前土師器の焼成土坑を調査した『細谷地遺跡第8次調査報告書』で述べたことがあるが、非ロクロ製品は集落内での自給自足的な土器であったのではないかと推察している。このような背景には、志波城が約10年というわずかな期間でその機能を徳丹城に移したことと因果関係があるのかもしれない。

5 まとめにかえて

台太郎遺跡の古代の土器を器種別に概観した。今回の器種分類は、あくまでも代表的な形態を中心に掲げた。そして、9世紀初頭の志波城の成立を暫定的な画期として、その前後それぞれの時期に土

器様式がどのようなものであったかを示した。その結果、従来から言われているように、2つの時期で土器様式が大きく変わることを、この台太郎遺跡でも追認することができた。そして、台太郎遺跡で現象として捉えられるこのような変化と画期が、どのような理由・背景で起こり、どのような意味を持つのか探ってみた。そこで着目したのは、土器の使用に関わる側面ではなく、土器の生産に関わる側面において大きな変化が認められる点である。この変化は、周辺域においては志波城の成立と関係するとみられ、台太郎遺跡でも志波城成立に前後する時期に大きな土器生産の画期があり、それはおもに周辺での須恵器生産開始が大きく関わると考えられる。

しかし、台太郎遺跡では今のところ志波城成立期の土器は出土していない。7世紀から10世紀まで続く台太郎遺跡の古代集落で9世紀初頭の土器だけが欠如しているのである。この時期だけに人がいなかったのか、などと言われることもあるようだが、個人的には現実的な考えではないと思われる。ここからは想像でしかない。前節で示した須恵器生産が開始される時期と周辺集落へその製品供給が充実する時期までの時間差がどれほどあるかはわからないが、この時間的隙間が9世紀初頭であるのかもしれない。そして、志波城成立期の土器は志波城と志波城のごく近い集落にしか供給されず、その他の集落では旧来の土器様式を脱していないのかもしれない。

さて、いずれにせよ台太郎遺跡を含め周辺の古代集落を考えるために、今後も土器様式の追求を続けたいと考える。本稿では、台太郎遺跡での前後150年程の大きなタイムスパンで述べてしまったが、今後はその中で小画期を見出し、詳細な動向を押さえたいと思う。それと同時に、周辺集落の土器も分析し、少なくとも志波城周辺域である盛南地区の中で歴史的意義を考える必要がある。今後の大きな課題である。

引用・参考文献

- 高橋義介¹⁾ 1999『台太郎遺跡第15次発掘調査報告書』岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第309集(財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター
- 高橋義介・金子佐知子²⁾ 2001『台太郎遺跡第18次発掘調査報告書』岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第369集(財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター
- 杉沢昭太郎³⁾ 2003『台太郎遺跡第23次発掘調査報告書』岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第415集(財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター
- 杉沢昭太郎⁴⁾ 2003『台太郎遺跡第26次発掘調査報告書』岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第416集(財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター
- 西澤正晴⁵⁾ 2003『台太郎遺跡第35次発掘調査報告書』岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第417集(財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター

写 真 图 版



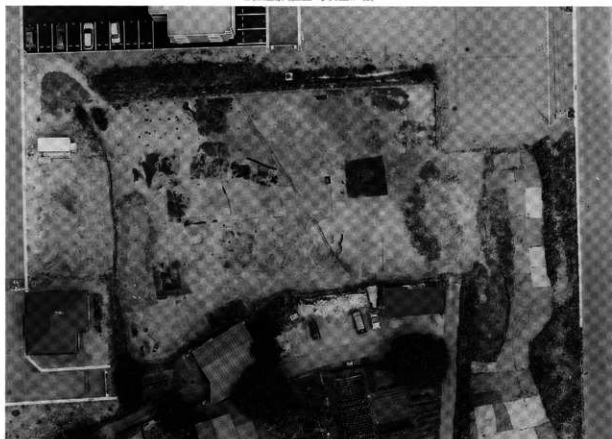
調査区遠景(南西から)



I区近景(直上・写真上が北)



Ⅱ区近景(直上・写真上が北)



Ⅲ区近景(直上・写真左が北)

写真図版 2 航空写真②



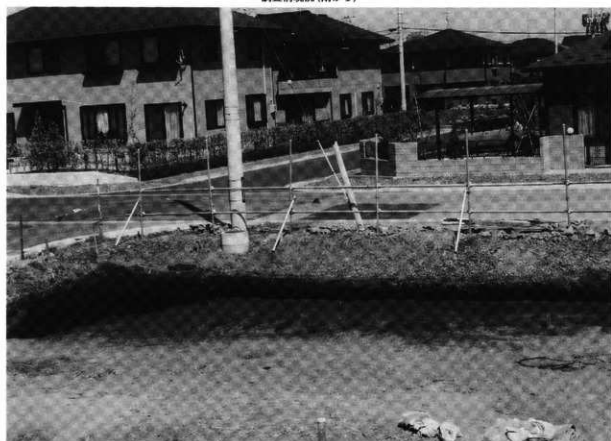
調査前現況(南から)



全景(南から)



調査前現況(南から)



全景(南から)



調査前現況(北から)



全景(北から)



調査前現況(西から)



全景(北から)

写真図版6 I・D・E区



調査前現況(西から)



全景(東から)



ⅡB区全景(北から)



ⅡE区追加分 全景



調査前現況(南から)



全景(南から)



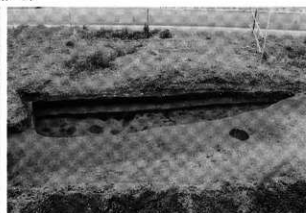
全景(東から)



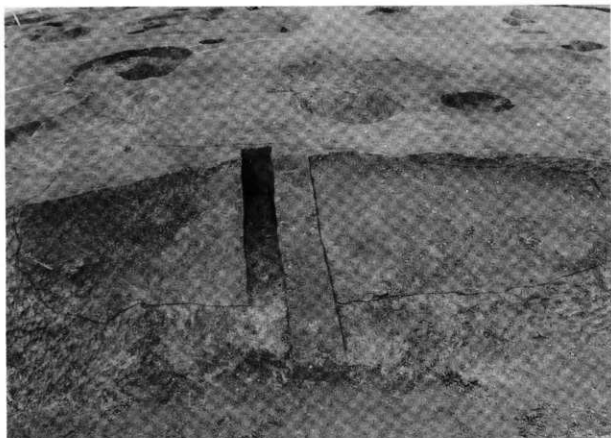
断面(東から)



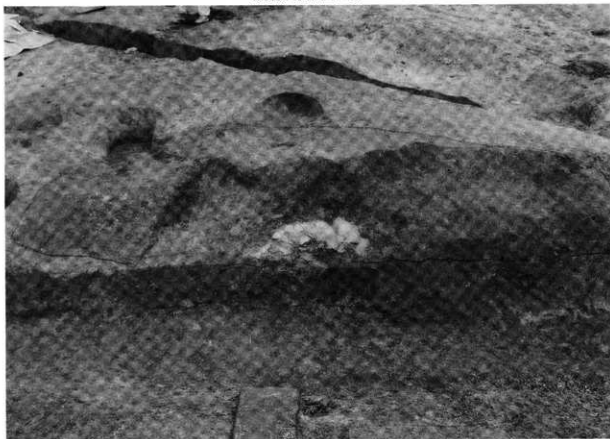
断面(南から)



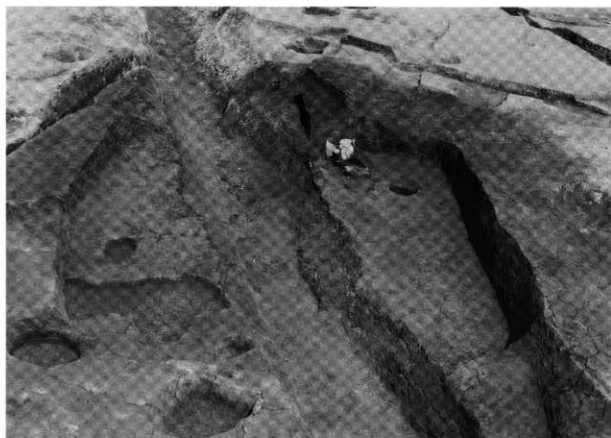
床断面(東から)



東側検出状況(西から)



西側検出状況(東から)



全景(南から)



断面(南から)



断面(南から)



カマド(南から)



煙道断面(南から)



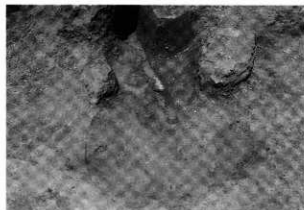
全景(南から)



断面(南から)



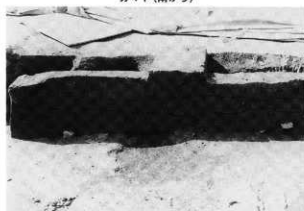
断面(西から)



カマド(南から)



カマド(南から)



カマド断面(南から)



煙道断面(北から)



煙出し断面(北から)



カマド軸断面(南西から)



遺物出土状況(南から)



遺物出土状況(南から)



全景(北から)



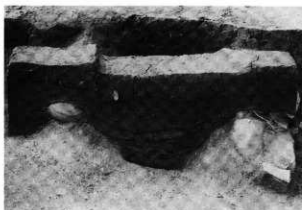
断面(南から)



断面(西から)



カマド(南から)



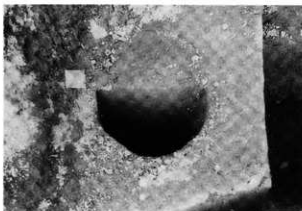
カマド断面(南から)



カマド袖断面(南から)



煙道断面(南から)



煙出し断面(西から)



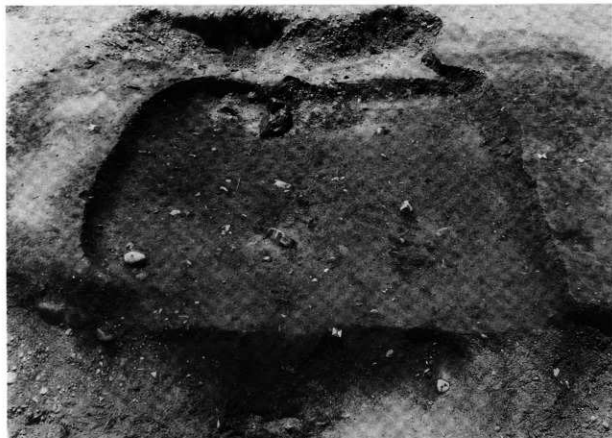
遺物出土状況(南から)



遺物出土状況(南から)



遺物出土状況(南から)



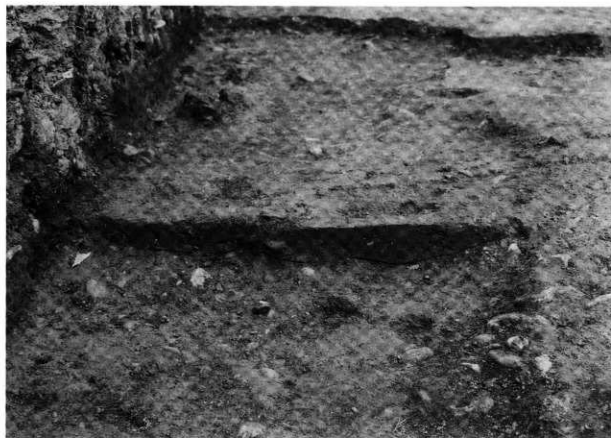
全景(北から)



断面(南から)



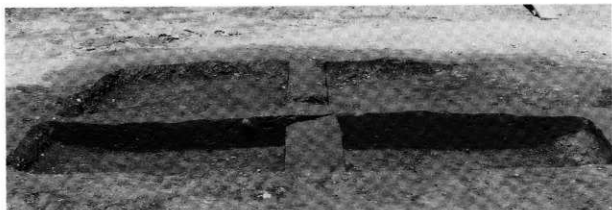
断面(西から)



RA605 (南から)



RA606全景 (西から)



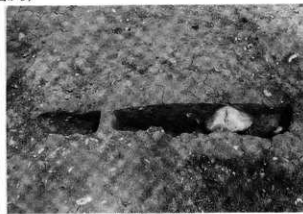
断面(南から)



断面(西から)



カマド(西から)



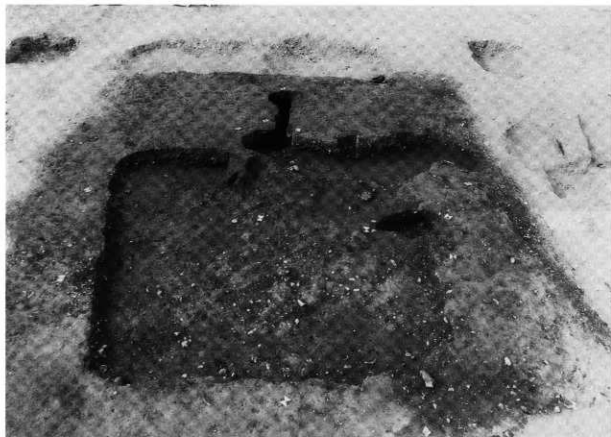
煙道断面(南から)



P1断面(東から)



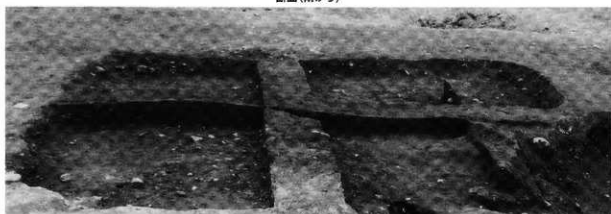
P3断面(西から)



全景(南から)



断面(南から)



断面(東から)



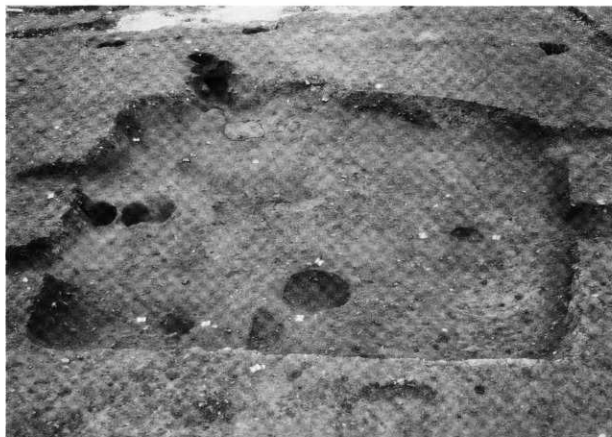
カマド断面(南から)



煙道断面(南から)



煙道断面(東から)



全景(西から)

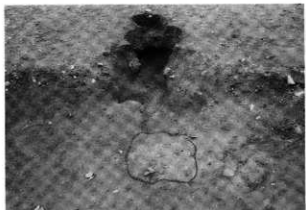


断面(南から)

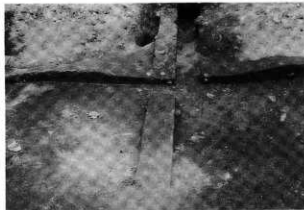


断面(西から)

写真図版 22 RA608 ①



カマド(西から)



カマド断面(西から)



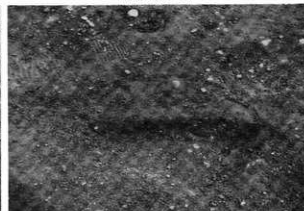
煙道断面(南から)



P1断面(南から)



P2断面(西から)



P3断面(南から)



作業風景



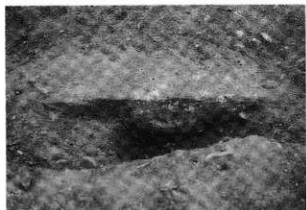
作業風景



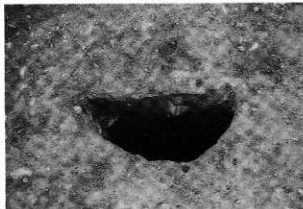
断面(南から)



断面(東から)



P1断面(南から)



P2断面(南から)



P3断面(南から)



P4断面(南から)



P5断面(南から)



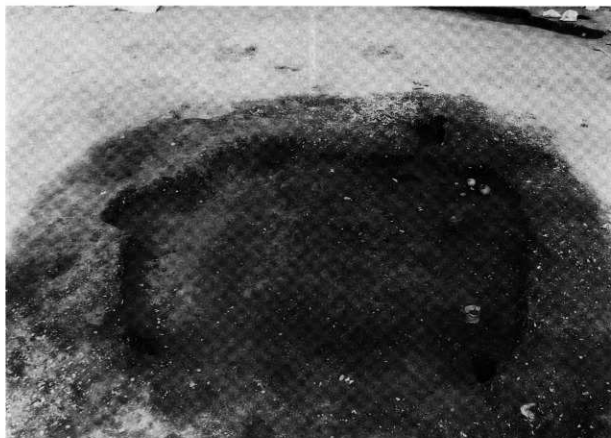
P6断面(南から)



P7断面(南から)



作業風景



全景(西から)



断面(南から)



断面(東から)



カマド断面(西から)



煙道断面(南から)



P1断面(南から)



P2断面(南から)



遺物出土状況



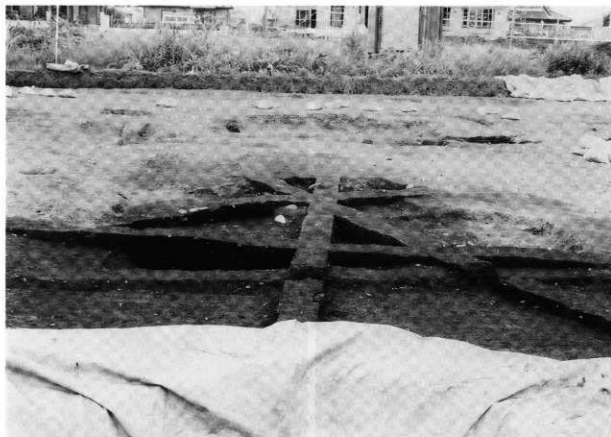
現地説明会



現地説明会



現地説明会



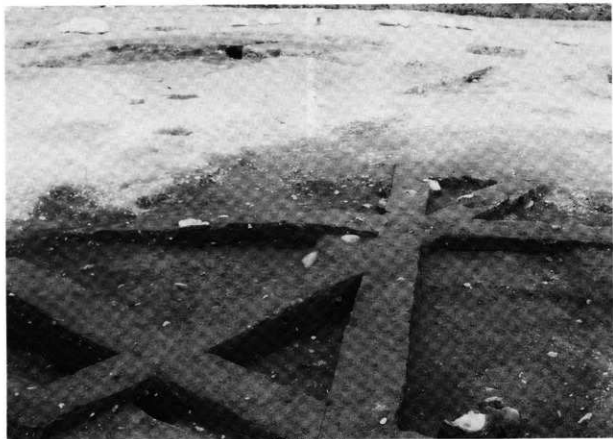
断面(南から)



断面(西から)



断面(南西から)



断面(南東から)



カマド袖断面(西から)



煙道断面(南から)



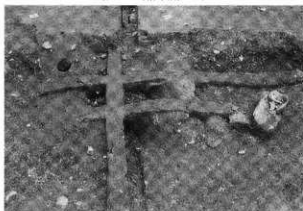
煙道断面(東から)



北カマド断面(南から)



北カマド断面(東から)



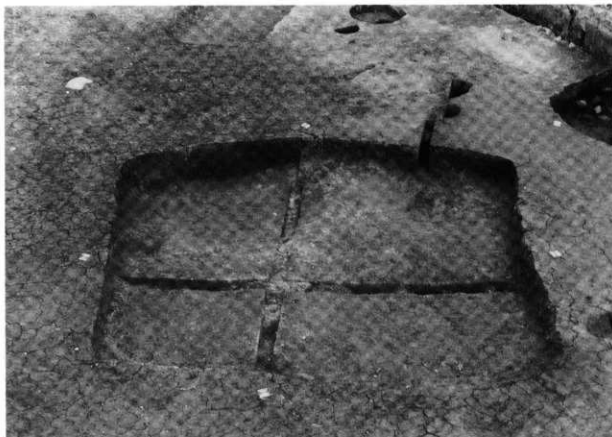
北カマド煙道断面(南から)



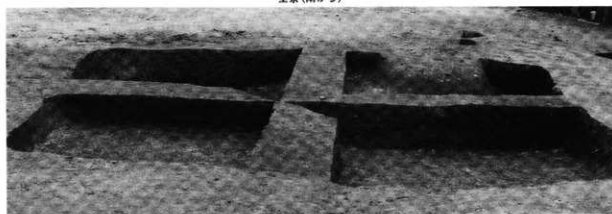
北カマド煙道断面(東から)



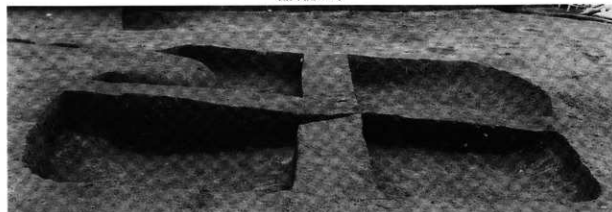
遺跡標柱



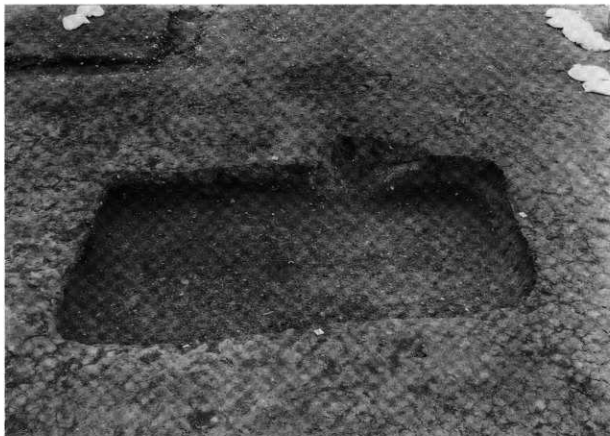
全景(南から)



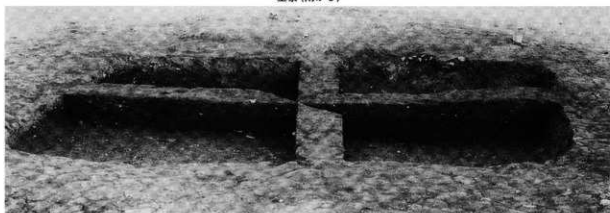
断面(南から)



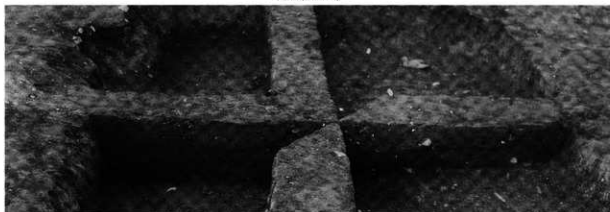
断面(西から)



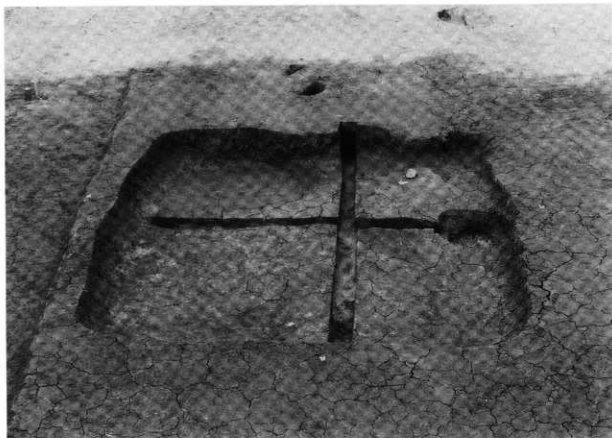
全景(南から)



断面(南から)



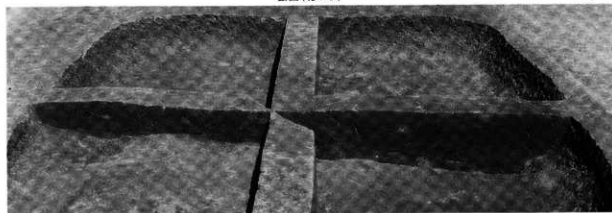
断面(西から)



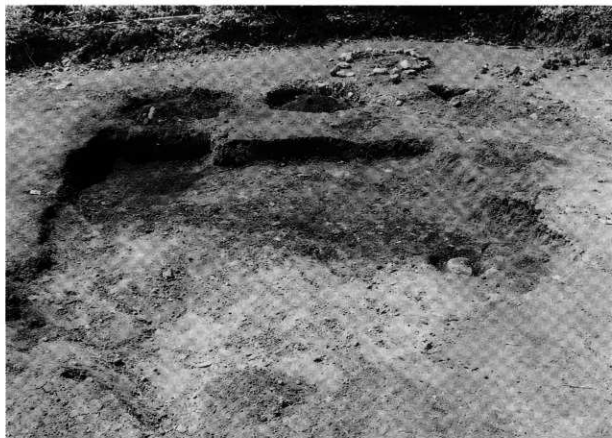
全景(東から)



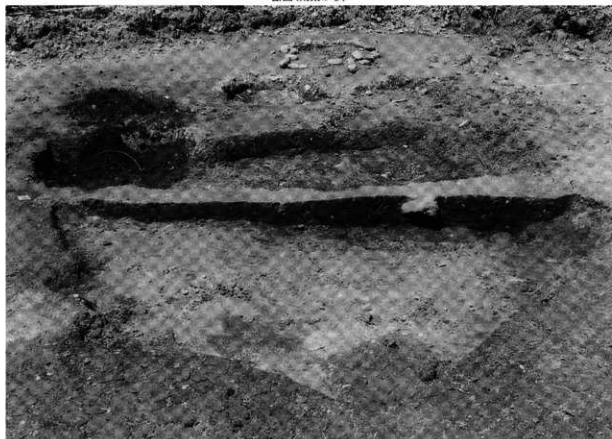
断面(北から)



断面(西から)



断面(南東から)



断面(南東から)



RD1181全景(北東から)



RD1181断面(北東から)



RD1182全景(西から)



RD1182断面1(東から)



RD1182断面2(東から)



RD1183全景(南から)



RD1183断面(北西から)



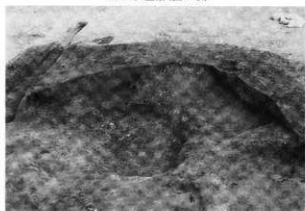
RD1184全景(西から)



RD1184断面1(東から)



RD1184断面2(東から)



RD1186・1187全景(北から)



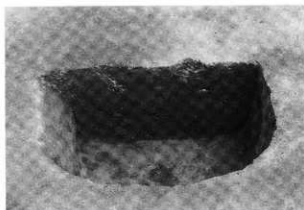
RD1186・1187断面(南から)



RD1186・1187全景(西から)



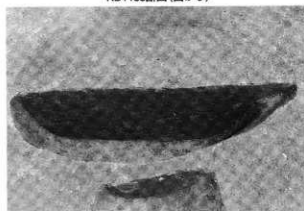
作業風景



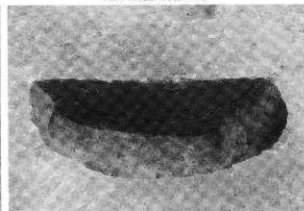
RD1188断面(西から)



RD1189断面(北から)



RD1190断面(南から)



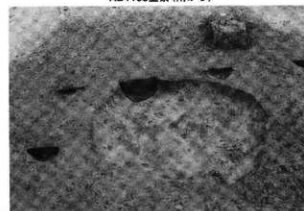
RD1191断面(南から)



RD1193全景(南から)



RD1193断面(南から)



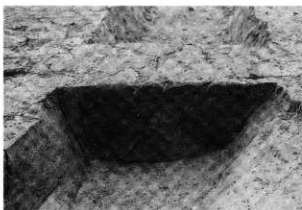
RD1192断面(西から)



RD1192断面(南から)



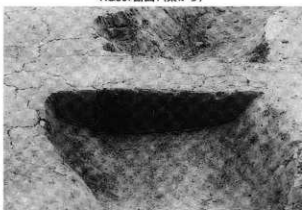
RG507全景(西から)



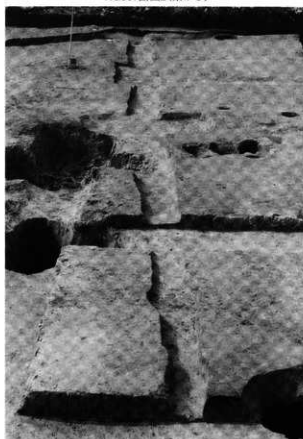
RG507断面1(東から)



RG507断面2(東から)



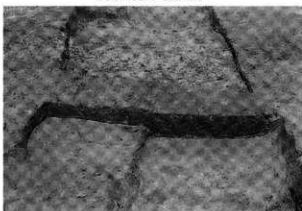
RG507断面3(東から)



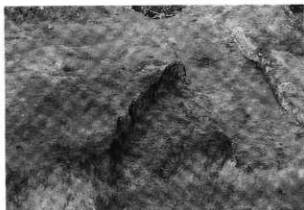
RG508全景(南から)



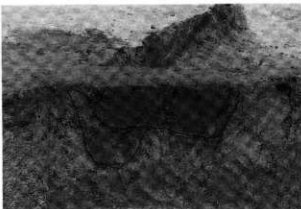
RG508断面1(南から)



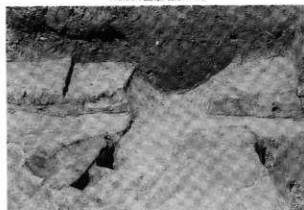
RG508断面2(南から)



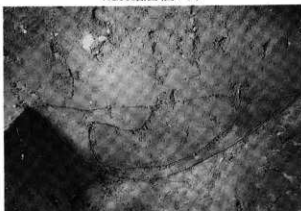
RG509全景(西から)



RG509断面(西から)



RG201全景(東から)



RG201断面(東から)



RG224全景(北から)



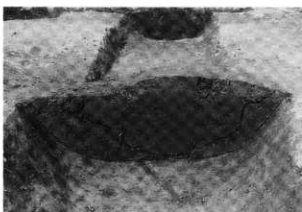
RG224断面1(南から)



RG224断面2(南から)



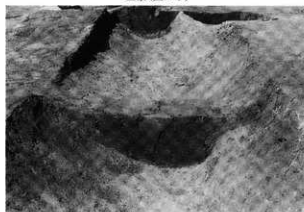
全景(西から)



断面1(西から)



断面2(西から)



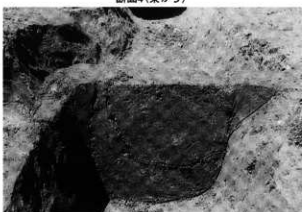
断面3(東から)



断面4(東から)



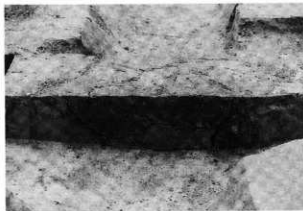
断面5(東から)



断面6(東から)



RG345全景(西から)



RG345断面1(東から)



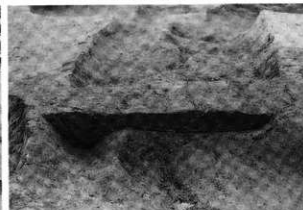
RG345断面2(東から)



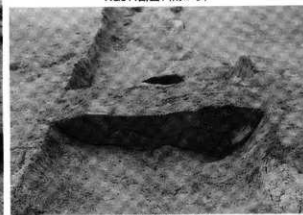
RG345断面3(東から)



RG511全景(北星から)



RG511断面1(南から)



RG511断面2(南から)



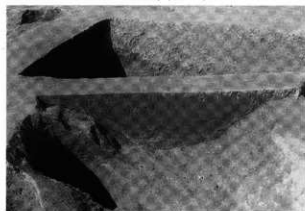
RG267全景(北から)



RG267断面1(北から)



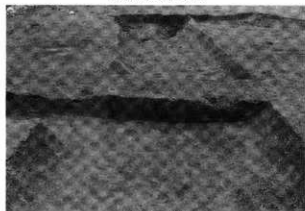
RG267断面2(南から)



RG200断面(西から)



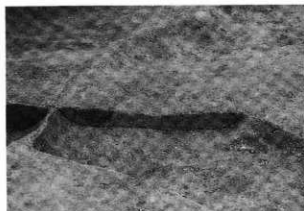
RG512断面1(南から)



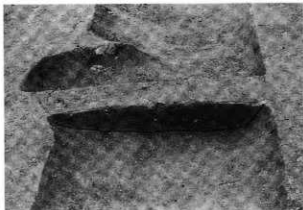
RG512断面2(南から)



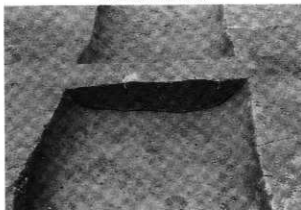
RG512断面3(南から)



RG513断面1(南から)



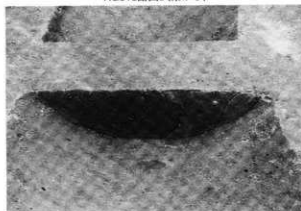
RG513断面2(東から)



RG513断面3(東から)



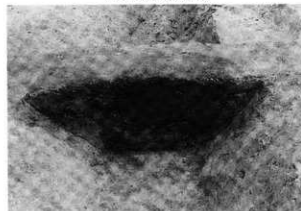
RG514断面1(南から)



RG514断面2(南から)



RG514断面3(南から)



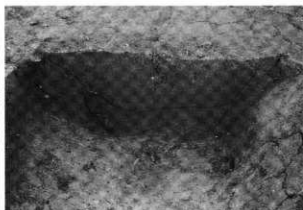
RG515断面1(西から)



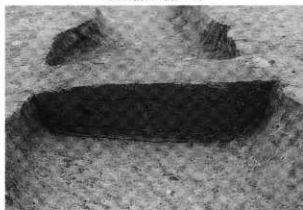
RG515断面2(西から)



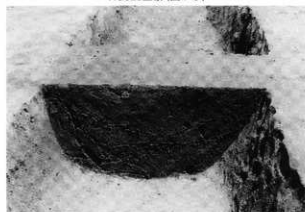
RG328全景(西から)



RG328断面1(東から)



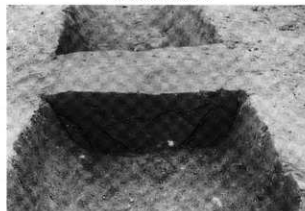
RG328断面2(東から)



RG328断面3(東から)



RG516断面(東から)



RG517断面1(南から)



RG517断面2(南から)



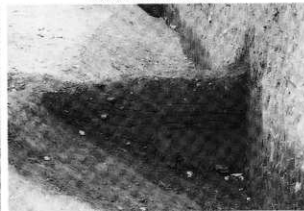
RG264 (I B区) 全景 (東から)



RG264 (I B区) 断面 (西から)



RG264 (II A区) 断面1 (東から)



RG264 (II A区) 断面2 (東から)



RG264 (II A区) 断面3 (西から)



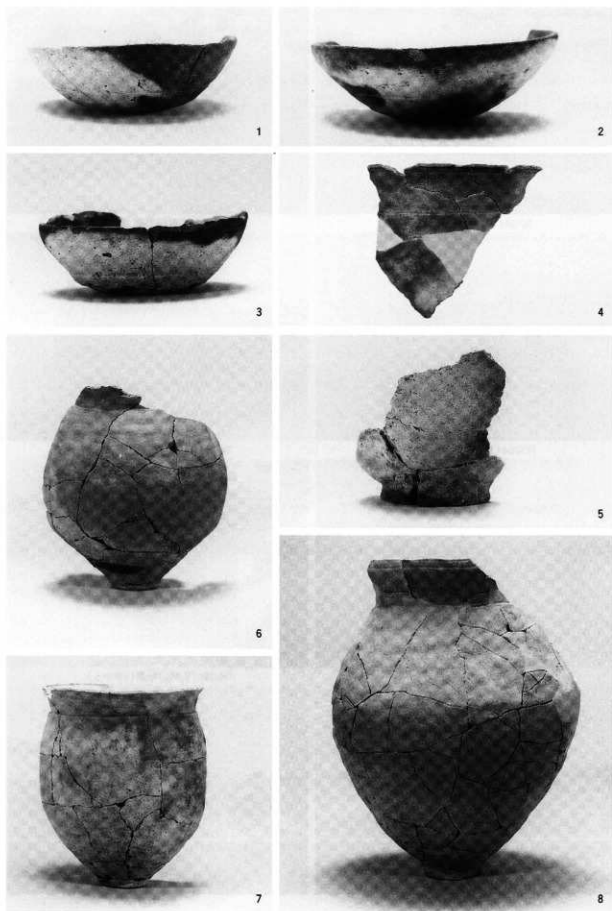
RG264 (II A区) 断面1 (東から)



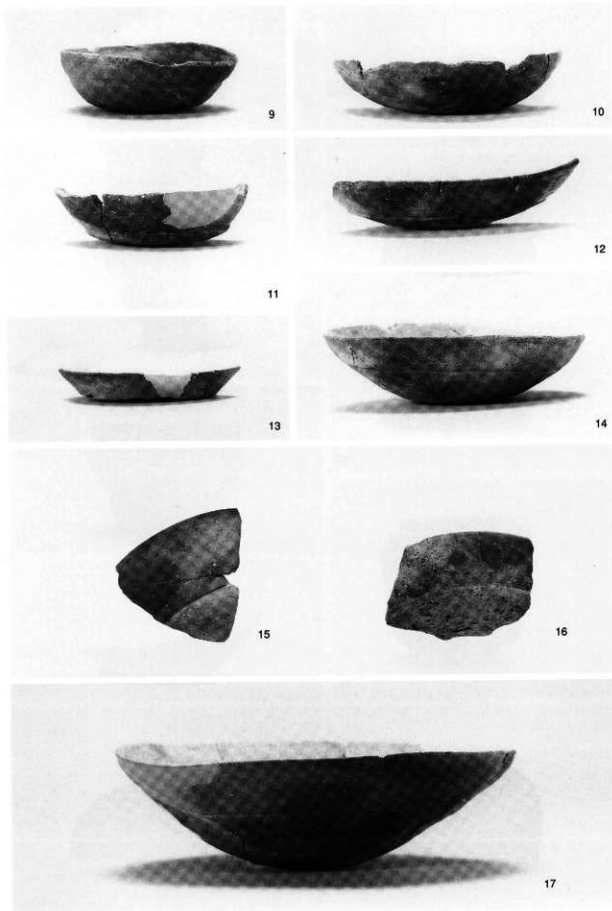
作業風景



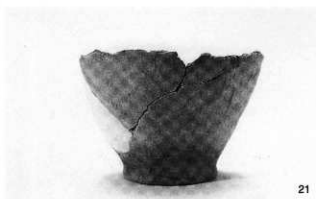
作業風景



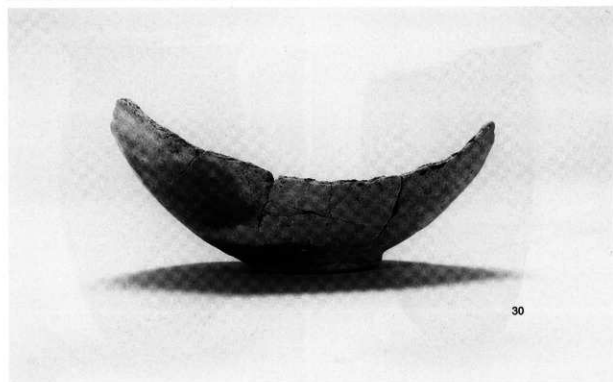
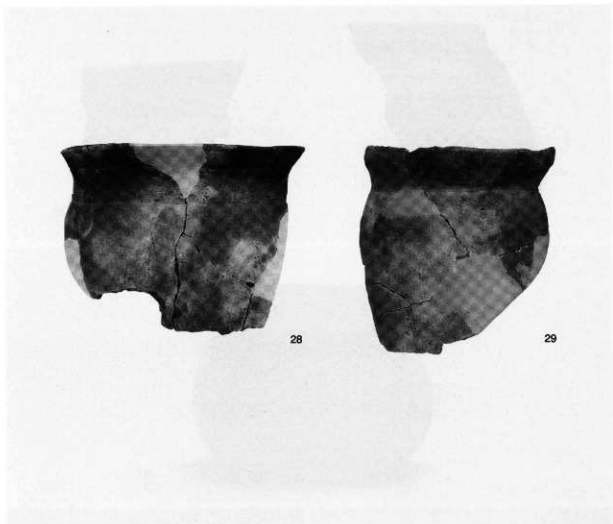
写真図版 46 RA604



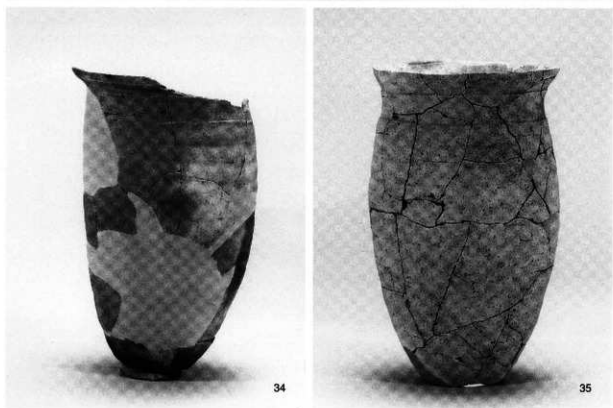
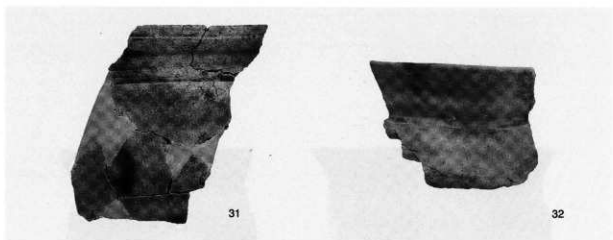
写真図版 47 RA615 ①



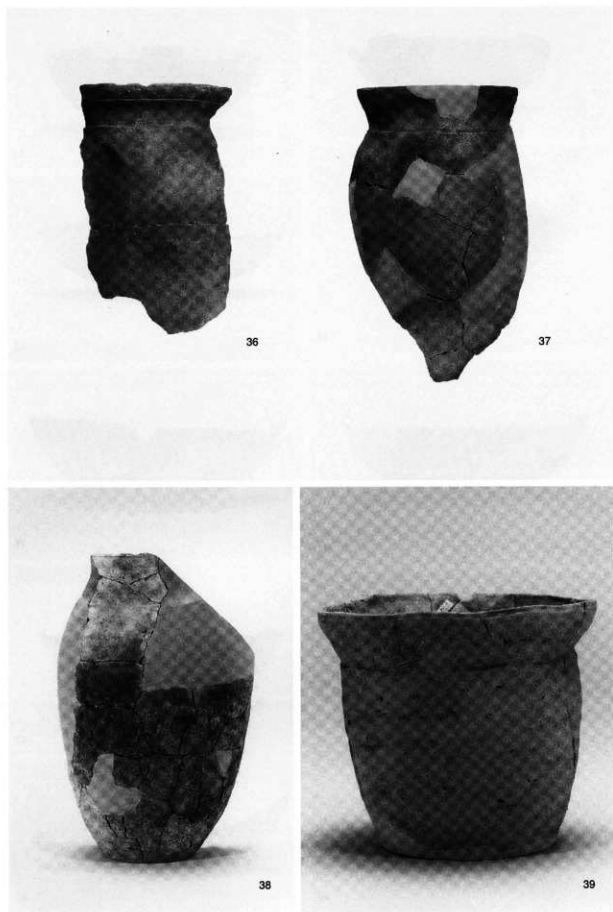
写真図版 48 RA615 ①



写真図版 49 RA615 ③



写真図版 50 RA615 ④



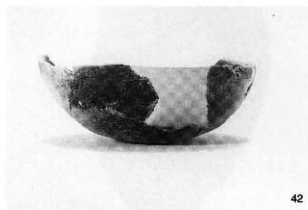
写真図版 51 RA615 ⑤



40



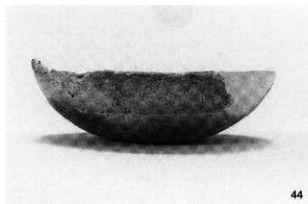
41



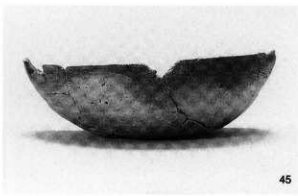
42



43



44



45



46



47

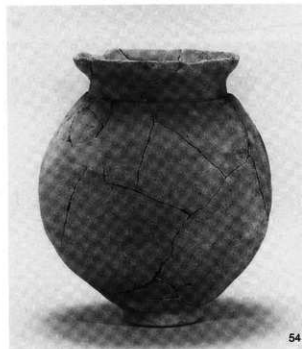


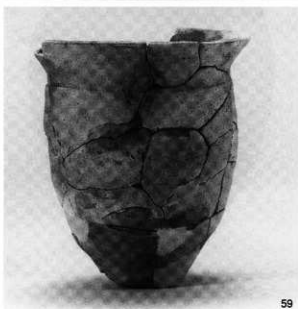
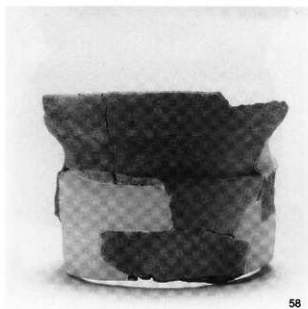
48



49

写真図版 52 RA616 ①





写真図版 54 RA616 ③



62



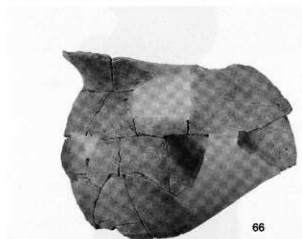
63



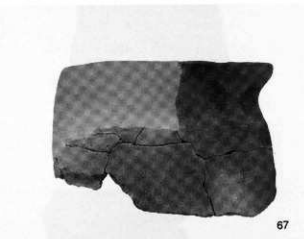
64



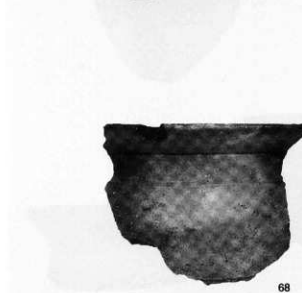
65



66



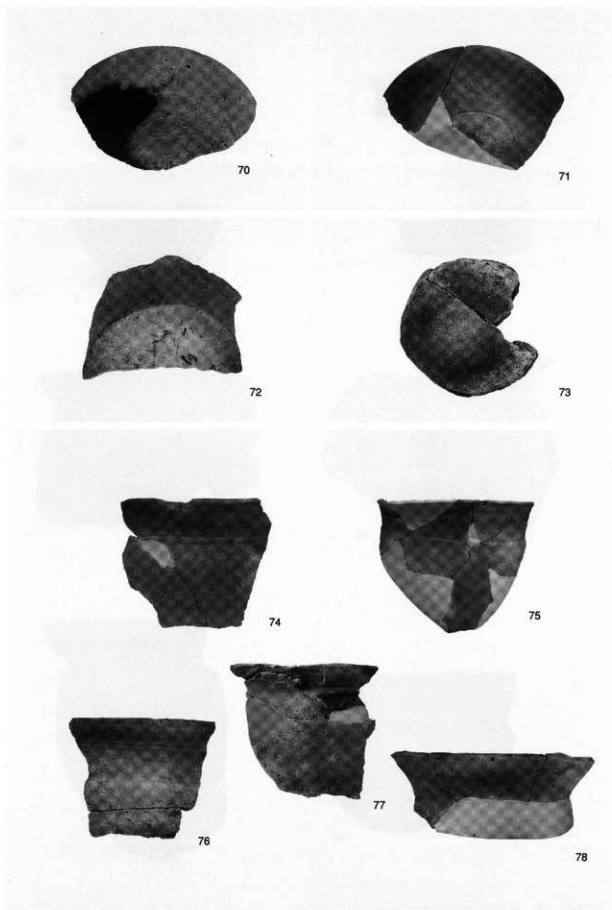
67



68



69



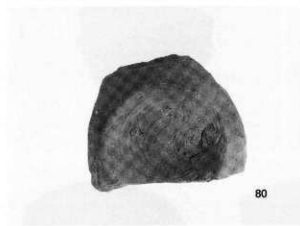
写真図版 56 RA616 ⑤



79



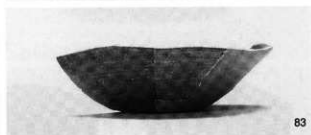
81



80



82



83



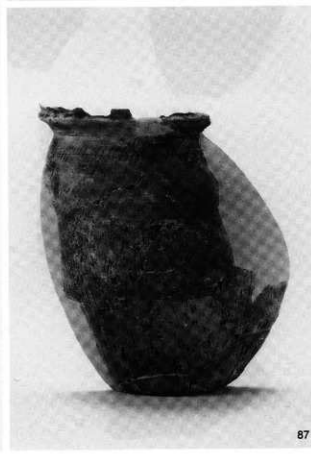
84



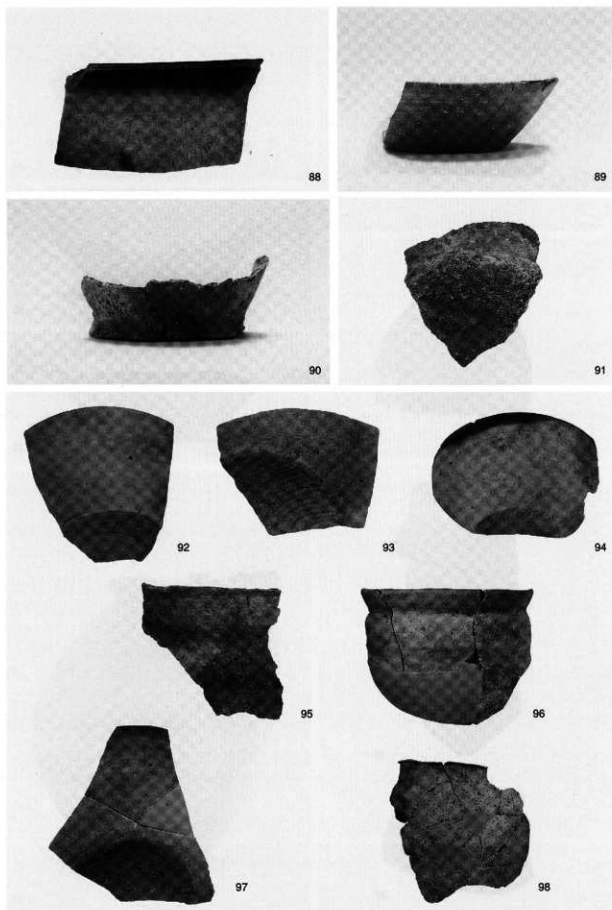
85



86



87



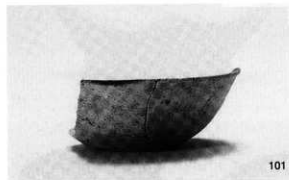
写真図版 58 RA607 ~ 609



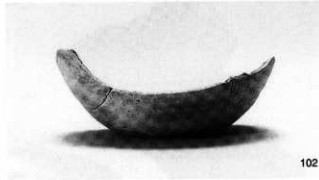
99



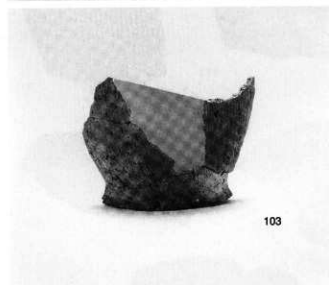
100



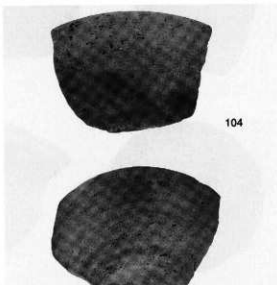
101



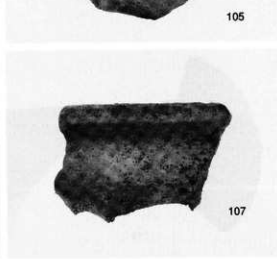
102



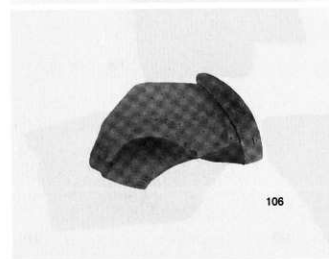
103



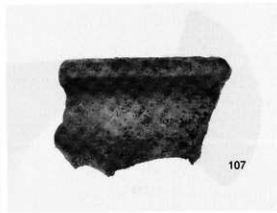
104



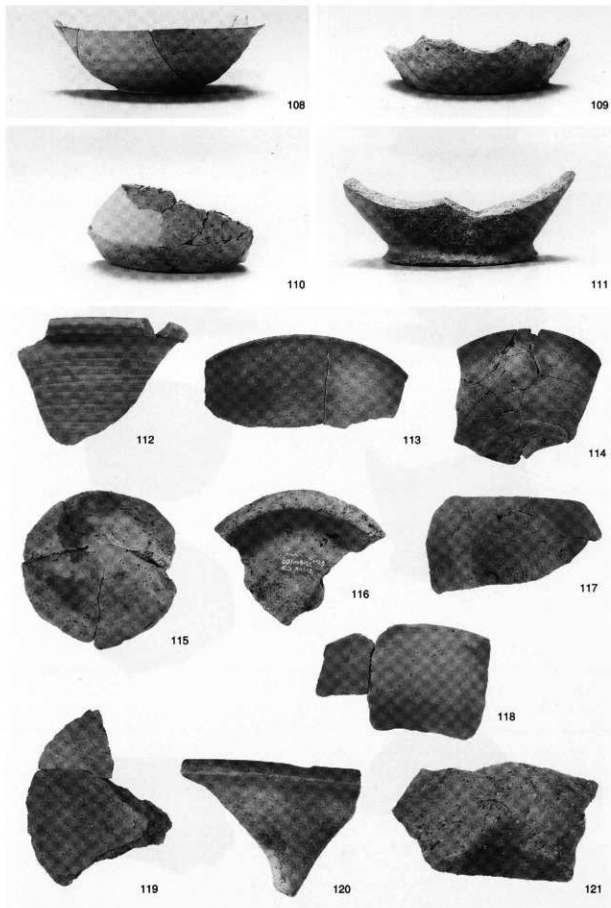
105



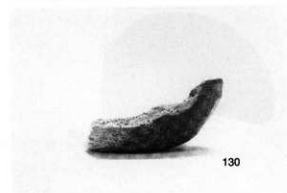
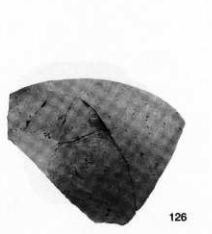
106



107

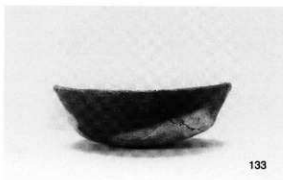


写真図版 60 RA612





132



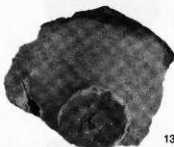
133



134



135



136



137



138



139



140



141



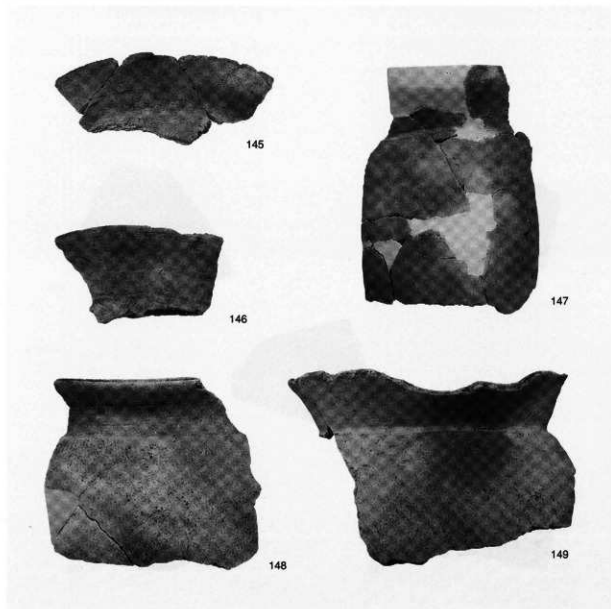
142



143



144



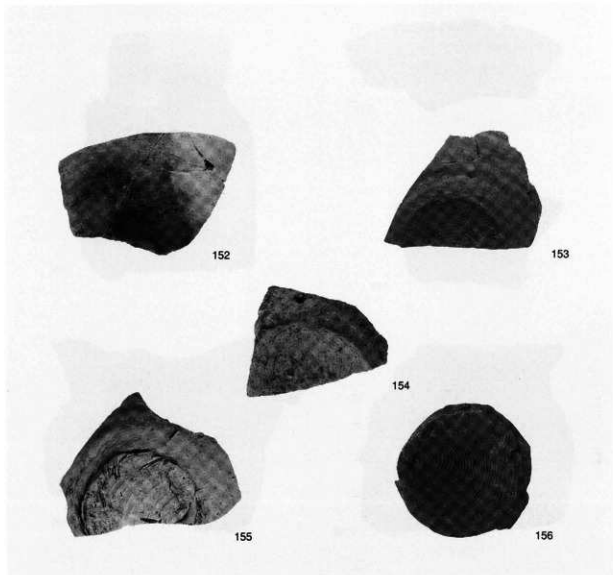
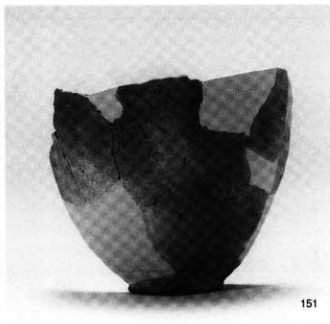
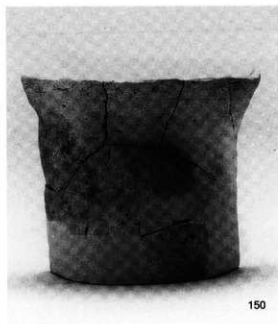
145

146

147

148

149



写真図版 64 RD1187 ③・RG ①



157



158



159



161



160



162



163



164



165



166

報告書抄録

ふりがな	だいたろういせきだい54じはくつちようさほうこくしょ							
書名	台太郎遺跡第54次発掘調査報告書							
副書名	盛岡南新都市計画整備事業関連遺跡発掘調査							
巻次								
シリーズ名	岩手県文化振興事業団埋蔵文化財報告書							
シリーズ番号	第486集							
編著者	福島正和							
調査機関	財団法人岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター							
所在地	〒020-0853 岩手県盛岡市下飯岡11-185 TEL 019-638-9001							
発行年月日	2006年3月15日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	北緯 緯度	東経 経度	調査期間	調査面積	調査原因	
台太郎遺跡 第54次調査	盛岡市向中野 字向中野19ほか	3201	LE16 -2269	39度 40分 47秒	141度 08分 40秒	2004.04.12 ～2004.08.06	5,052㎡	「盛岡南新都市計画 整備事業」に伴う緊急 発掘調査
所収遺跡名	類別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項			
台太郎遺跡 第54次調査	集落跡	古墳～奈良	壘穴住居4棟、 土坑2基	土師器・関東系土師 器坏・鉄製品・土玉・ 石製紡錘車	拠点集落			
		平安	壘穴住居9棟、 壘穴住居状遺 構4棟、土坑10 基、溝17条	土師器・須恵器・鉄 製農具	集落			
		中世	堀1条	国産陶器・中国産青 磁碗	居館を取り囲む堀			

岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第 486 集

台太郎遺跡第 54 次発掘調査報告書

盛岡南新都市計画整備事業関連遺跡発掘調査報告書

印刷 平成 18 年 3 月 13 日

発行 平成 18 年 3 月 15 日

発行 (財) 岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター

〒 020 - 0853 岩手県盛岡市下飯間 11 - 185

電話 (019) 638 - 9001

F A X (019) 638 - 8563

印刷 小松総合印刷株式会社

電話 (019) 624 - 1374

F A X (019) 623 - 6719

